

芦崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

箱崎 17

—箱崎遺跡第22次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集

2004

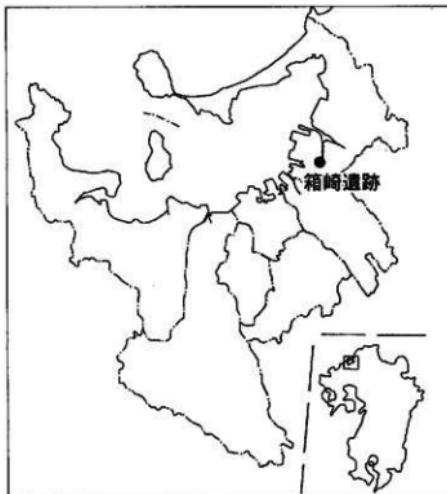
福岡市教育委員会

筥崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ

HAKO ZAKI
箱 崎 17

—箱崎遺跡第22次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集



遺跡略号 調査番号
HKZ-22 0022

2004

福岡市教育委員会



4区全景（上空から）

※上が北、デジタル合成写真

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は箱崎土地区画整理事業に伴い調査を実施した箱崎遺跡第22次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、古墳時代や中世の集落跡を確認すると共に、多数の生活用具や交易品が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、多くのご協力を賜りました福岡市土木局をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が筥崎上地区開拓事業に伴い、東区馬出5丁目、箱崎1丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第22次調査の報告書である。
- 本書で報告する調査の細目は以下のとおりで、本書はこのうち4区の報告書である。なお、5区については、平成16年度以降に報告予定である。

調査番号	遺跡略号	調査区	調査面積		調査期間
0022	HKZ-22	4区	2,473m ²	2,976m ²	2000.7.24~2001.4.18
		5区	503m ²		

- 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣、上田龍児(福岡大学人文学部学生)、花島拓・山元真美子(別府大学文学部学生)、西出絵美・福田匡朗・渡邊誠(九州大学文学部学生)が行った。
- 本書で報告する遺物実測図の作成は榎本、星野恵美、濱石正子、撫養久美子が行った。
- 本書に掲載した遺構写真的撮影は榎本が行った。
- 本書に掲載した空中写真的撮影は朝日航洋株式会社が行った。
- 本書に掲載した遺物写真的撮影は平川敬治が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は榎本、星野、濱石、撫養が行った。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より0°19'西偏する。
- 本書に記載した座標は国土調査法第Ⅱ座標系に換算している。
- 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、埋葬遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
- 本書で記述する輸入陶磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」
『九州歴史資料館研究論集4』1978年
太宰府市教育委員会『大宰府糸跡XV-陶磁器分類編-』(太宰府市の文化財第49集)1983年
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 出土した金属製品の一部の保存科学処理は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎、片多雅樹が行った。
- 本書に關わる記録・遺物等の資料は同埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆は付論を除いて榎本が行った。
- 付論として九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博教授による出土人骨に関する分析および同埋蔵文化財センター比佐、片多による金属製品の付着纖維の測定報告を掲載している。
- 本書の編集は榎本が行った。

本文目次

I. はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
II. 遺跡の立地と環境.....	2
III. 調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 4区の調査.....	7
1) 概要.....	7
2) 遺構と遺物	10
(1)獨立柱建物(SB)	10
(2)竪穴住居(SC)	12
(3)井戸(SE)	13
(4)土坑(SK)	55
(5)溝(SD)	88
(6)埋葬遺構(SX)	94
(7)その他の遺物.....	103
IV. 結語.....	104

付 論

1 福岡市箱崎遺跡第22次調査出土の中世人骨 (九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋 孝博)	105
2 箱崎遺跡第22次調査出土青銅鏡付着縪維の調査について (福岡市埋蔵文化財センター 片多雅樹・比佐 陽一郎)	107

挿図目次

第1図 箱崎遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)	5
第3図 苓崎上地区画整理事業地内調査区位置図(1/3,000)	(折り込み)
第4図 4区調査区位置図(1/1,000)	8
第5図 4区北壁上層実測図(1/50)	9
第6図 SB0070実測図(1/80)および出土遺物実測図(1/3).....	10
第7図 SB0071実測図(1/80)および出土遺物実測図(1/3).....	11
第8図 SC0041実測図(1/40)	12
第9図 SC0041出土遺物実測図(1/3、1/4)	13
第10図 SE0005実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	14
第11図 SE0006実測図(1/10)および出土遺物実測図(1/3).....	15
第12図 SE0007実測図(1/40)	16

第13図	SE0007出土遺物実測図(1 / 3)	17
第14図	SE0008実測図(1 / 40)	18
第15図	SE0008出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	19
第16図	SE0011実測図(1 / 40)	20
第17図	SE0011出土遺物実測図(1 / 3)	21
第18図	SE0012実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	22
第19図	SE0014実測図(1 / 40)	23
第20図	SE0014出土遺物実測図(1 / 3)	24
第21図	SE0015実測図(1 / 40)	25
第22図	SE0015出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4)	26
第23図	SE0022実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	27
第24図	SE0026実測図(1 / 40)	28
第25図	SE0026出土遺物実測図(1)(1 / 3, 1 / 4)	29
第26図	SE0026出土遺物実測図(2)(1 / 4)	30
第27図	SE0027実測図(1 / 40)	31
第28図	SE0027出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4)	32
第29図	SE0030実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	33
第30図	SE0031実測図(1 / 40)	34
第31図	SE0031出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4, 1 / 6)	35
第32図	SE0038実測図(1 / 40)	36
第33図	SE0038出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4)	37
第34図	SE0039実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1)(1 / 3)	38
第35図	SE0039出土遺物実測図(2)(1 / 4)	39
第36図	SE0042実測図(1 / 40)	40
第37図	SE0042-0043出土遺物実測図(1 / 3)	41
第38図	SE0046実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1)(1 / 3, 1 / 4)	42
第39図	SE0046出土遺物実測図(2)(1 / 3, 1 / 4)	43
第40図	SE0047実測図(1 / 40)	44
第41図	SE0047-0057出土遺物実測図(1 / 3)	45
第42図	SE0057実測図(1 / 40)	45
第43図	SE0058実測図(1 / 40)	46
第44図	SE0058出土遺物実測図(1 / 3)	47
第45図	SE0060実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	48
第46図	SE0062実測図(1 / 40)	49
第47図	SE0062出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3, 1 / 4)	50
第48図	SE0063-0065-0066実測図(1 / 40)およびSE0063出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	51
第49図	SE0067実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	52
第50図	SE0068実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 3)	53
第51図	SK0001-0017-0019実測図(1 / 40)	54
第52図	SK0001-0017-0019出土遺物実測図(1 / 1, 1 / 3)	55

第53図	SK0021-0025実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1 / 6)	56
第54図	SK0032-0034-0037実測図(1 / 40)	57
第55図	SK0032-0034出土遺物実測図(1 / 3)	58
第56図	SK0037出土遺物実測図(1 / 3)	59
第57図	SK0044-0048-0049-0052実測図(1 / 40)	60
第58図	SK0044-0048-0049出土遺物実測図(1 / 3)	61
第59図	SK0052出土遺物実測図(1 / 3)	62
第60図	SK0053実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1)(1 / 3)	63
第61図	SK0053出土遺物実測図(2)(1 / 4)	64
第62図	SK0054実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1)(1 / 3)	66
第63図	SK0054出土遺物実測図(2)(1 / 3, 1 / 4)	67
第64図	SK0055実測図(1 / 40)および出土遺物実測図(1)(1 / 3, 1 / 4)	68
第65図	SK0055出土遺物実測図(2)(1 / 4)	69
第66図	SK0055出土遺物実測図(3)(1 / 4)	70
第67図	SK0055出土遺物実測図(4)(1 / 4)	71
第68図	SK0059-0553-0595実測図(1 / 40)	72
第69図	SK0059-0553-0595出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4)	73
第70図	SK0596-0597-0607-0629-0672実測図(1 / 40)	75
第71図	SK0596-0597-0607-0629-0672出土遺物実測図(1 / 3)	76
第72図	SK0715-0718-0749-0753-0765-0818-0824-0833実測図(1 / 40)	77
第73図	SK0715-0718-0749-0753-0765出土遺物実測図(1 / 3)	78
第74図	SK0818-0824-0833出土遺物実測図(1 / 3)	79
第75図	SK0886-0930-0946-0956-0974-1052実測図(1 / 40)	81
第76図	SK0886-0930-0946-0956-0974-1052出土遺物実測図(1 / 3)	82
第77図	SK1067-1126-1132-1142実測図(1 / 40)	83
第78図	SK1067-1126-1132-1142出土遺物実測図(1 / 3)	84
第79図	SK1156-1165-1185-1193-1288実測図(1 / 40)	86
第80図	SK1156-1165-1185-1193-1288出土遺物実測図(1 / 3)	87
第81図	SD0016-0020-0028-0036-0069実測図(1 / 40, 1 / 60)	89
第82図	SD0016-0020-0028-0036-0069出土遺物実測図(1 / 3, 1 / 4)	90
第83図	SX0018実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1 / 3)	91
第84図	SX0023実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	92
第85図	SX0024実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	93
第86図	SX0029-0035実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1 / 4, 1 / 6)	95
第87図	SX0033実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	96
第88図	SX0040実測図(1 / 30)および出土遺物実測図(1)(1 / 3)	97
第89図	SX0040出土遺物実測図(2)(1 / 2, 1 / 3)	98
第90図	SX0050実測図(1 / 30)	99
第91図	SX0050出土遺物実測図(1 / 2, 1 / 3)	100
第92図	ピット出土遺物実測図(1 / 3)	102
第93図	構築出土遺物実測図(1 / 1, 1 / 2, 1 / 3, 1 / 4)	103

図版目次

巻頭図版	4区全景(上空から)	
図版1	(1)4区南側全景(上空から)	(2)4区北側全景(上空から)
図版2	(1)SC0041(南から) (3)SE0006(北から) (5)SE0011(東から)	(2)SC0041(南西から) (4)SE0008(西から) (6)SE0011井筒(北から)
図版3	(1)SE0012(北東から) (3)SE0015(北東から) (5)SE0026(北東から)	(2)SE0014(北東から) (4)SE0022(北東から) (6)SE0026井筒(東から)
図版4	(1)SE0030(北西から) (3)SE0038(北から) (5)SE0039井筒(南から)	(2)SE0031(西から) (4)SE0039(東から) (6)SE0042(西から)
図版5	(1)SE0046(北東から) (3)SE0047井筒(南東から) (5)SE0058(南東から)	(2)SE0047(南東から) (4)SE0057(西から) (6)SE0058井筒(東から)
図版6	(1)SE0060-0063(南から) (3)SE0062井筒(南から) (5)SE0068(南から)	(2)SE0062(南から) (4)SE0065-0066-0067(北から) (6)SK0017(北から)
図版7	(1)SK0021(北から) (3)SK0037(北から) (5)SK0053(西から)	(2)SK0025(北東から) (4)SK0048(北東から) (6)SK0054(北から)
図版8	(1)SK0055(東から) (3)SD0028(北から) (5)SD0069(東から)	(2)SD0020土層(西から) (4)SD0036土層(南から) (6)SX0018(西から)
図版9	(1)SX0018人骨出土状況(西から) (3)SX0029(北から) (5)SX0033(西から)	(2)SX0023-0024(西から) (4)SX0029(北から) (6)SX0033遺物川土状況(西から)
図版10	(1)SX0035(西から) (3)SX0040遺物出土状況(西から) (5)SX0050遺物出土状況(南から)	(2)SX0040(西から) (4)SX0050(東から) (6)SX0050遺物出土状況(南から)
図版11	出土遺物(1)	
図版12	出土遺物(2)	

表目次

第1表	箱崎遺跡調査一覧表	4
第2表	笛崎土地区両整理事業地内調査一覧表	6
第3表	ピットおよび遺構検出時出土遺物一覧表	101

付図

箱崎遺跡第22次調査4区全体図(1/150)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市上木局筑崎連続立体開発事務所換地課長より平成6(1994)年8月24日付、土旨第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛てに東区馬出・箱崎・篠松、博多区吉塚本町における福岡都市計画事業 篠崎上地区画整理事業(事業面積: 27.8ha)に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた(事前審査番号: 7-1-50)。

同事業は、平成4年1月17日に都市計画決定が行われ、同年9月14日の事業計画決定がなされた。その事業目的は、東区の中心地域として位置付けられている箱崎地区の道路や公園等の公共施設の未整備や、土地細分化や家屋密集等による市街地環境の低下、また道路と鉄道(JR鹿児島本線・篠栗線)の平面交差による踏切事故や慢性的な交通渋滞等の問題を解消するため、土地区画整理による総合的なまちづくりを行なうことで、都市計画道路等の整備・改善や鉄道高架による道路との立体交差化、またその高架事業に伴うJR 箱崎駅の移設を実施し、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るものである。

埋蔵文化財課では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成6年9月14日より建物移転の終了した箇所を対象に試掘調査を順次開始した。なお、事業面積が広範なことや一部の建物移転交渉が難航したことにより、試掘調査は現在まで継続して行っている。これまでの試掘調査の結果、中世を主体とする遺構が、東側はJR鹿児島本線、西側が事業地西端の都市計画道路 壱泊・箱崎線(通称: 炒見通り)、北側がJR(新)箱崎駅西口広場付近、南側が事業地南端の範囲、面積約 35,000m²において確認できた(第3図参照)。この試掘結果をもとに両課は、当該地の埋蔵文化財保存を前提とした協議を行ったが、1号公園部分(事業面積: 2,500m²)を除き、事業計画上、遺構の破壊が回避できないことが判明したため、平成11年度から本調査を、また平成14年度から資料整理・調査報告書作成を継続して行うこととなつた(第2表参照)。なお、これらに係る費用は事業主体である土木局筑崎連続立体開発事務所が負担した。

2. 調査の組織

調査委託: 福岡市土木局 筑崎連続立体開発事務所

調査主体: 福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査統括: 埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治(前任) 田中壽夫(現任)

調査庶務: 文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

調査担当: 同課調査第2係 榎本義嗣(現同部文化財整備課整備係)

調査作業: 金子龍雄 清田厚巳 熊本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 高崎秀巳 原勝輝

米倉國弘 石橋テル子 金子澄子 唐島栄子 草場恵子 小林スエ子 近藤澄江

酒井康恵 坂田ミネ 杉村百合子 田崎アヤ子 辻美佐江 永松トミ子 本郷満子

村田敬子 吉村智子

上田龍児(福岡大学学生) 花島祐 山元真美子(以上別府大学学生) 西田絵美 福

田匡朗 渡邊誠(以上九州大学学生) 梅田隆憲 大平有一 矢野愛二(以上九州産業
大学学生)

整理作業: 西島信枝 松尾真澄

小林市美 松本奈美(以上中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで土木局筑崎連続立体開発事務所をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

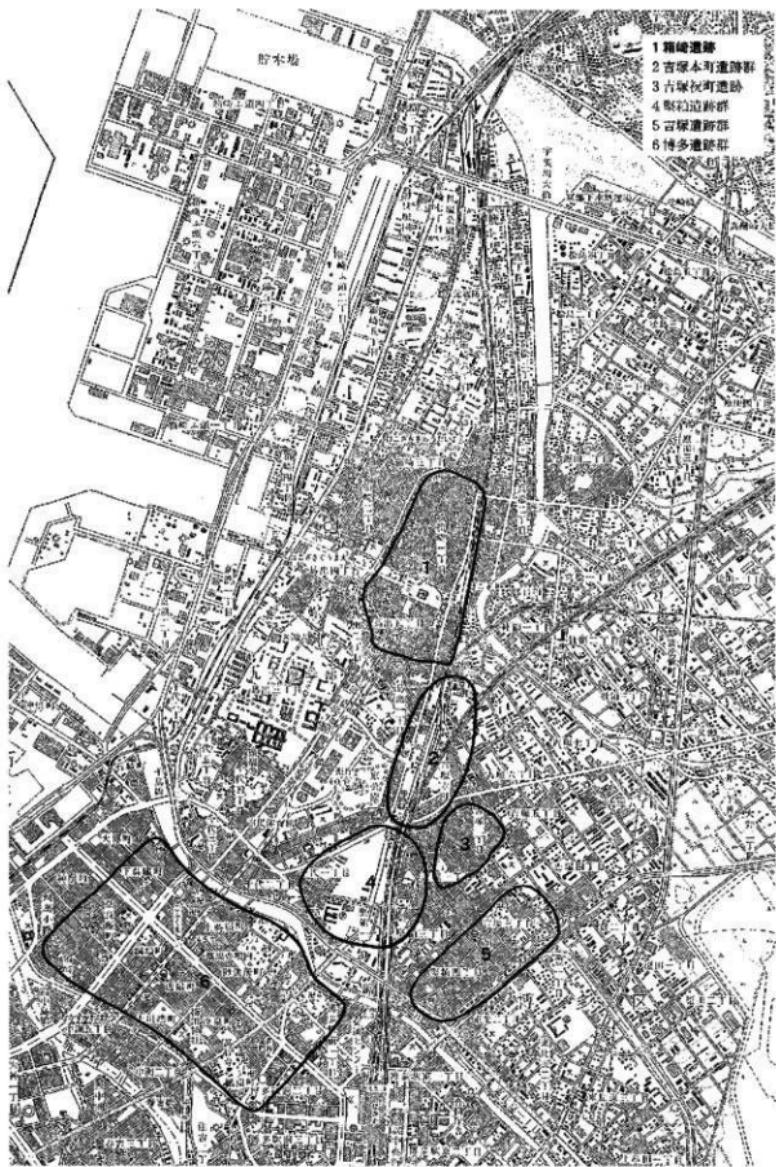
II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については遅くとも绳文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により両されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第1図に示した範囲で、北側から箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に囲まれる。この東側にはかつて入り江が博多湾から湾入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。

第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基にIH地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。遺跡北東端部で実施された第10次調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のはば中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次調査区付近から南北方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、笛崎宮境内、第2次調査区付近までは南北方向に延伸する。砂丘尾根は遺跡南半部では東側に大きく振れるため、砂丘の西側には広い緩斜面が形成される。また、遺跡南東部の第26次調査8区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。該地付近には昭和初期まで水路が遺存していたことからも、従来低地であったと考えられる。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査4区および第26次調査6区付近には標高約3.5mを測る等高線が認められ、更に南側に延伸するものと考えられるが、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側斜面は殆ど認められない。なお、現仕のところ砂丘南西端部の微地形は調査例が少なく不明瞭である。

同図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顯著な堆積物が確認されている。第10次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができる。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列も確認されている。東限については、今回報告する笛崎土地区画整理事業に伴う試掘調査が現在も継続して行なわれており、JR鹿児島本線に沿うラインが該当する可能性が高い。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高く、第40次調査19区においても古墳時代以降の遺構が検出されている。また、北側では第36次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても從来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。該地におけるより詳細な旧地形の解明および遺跡範囲の確定は今後の調査課題の一つといえよう。

本遺跡の発展の契機となった歴史的事象としては笛崎宮の創建をまず挙げることができる。同宮は延長元年(923)に穗波郡人分宮を遷座、創建したと伝えられる。永承6年(1051)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延6年(1140)には一時大宰府の府領となった。しかし、文治元年(1185)には再び石清水八幡宮からの補任がなされた。この間、仁平元年(1151)には大宰府檢非違所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追捕を行っている。これを記した『宮寺縁事抄』には両地区に宋人が在住していたことや1,600軒以上の家屋が存在したことが記述されており、日宋貿易に関与した宋商人の家屋を含む町が既に該地に形成されていたことを裏付ける。文永11年(1274)の元寇(文永の役)の際に彦崎宮が焼失したことが伝えられており、同地区一帯も被災した可能性が高い。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)、箱崎地区の海岸線に薩摩國の分担によって元寇防壁が築かれる。至治3年



第1図 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)

(1323)に沈没したことが判明している韓国新安沖の沈没船からは「宮崎宮」銘の木簡が出土しており、同宮は該期においても引き続き日本の大陸交易拠点の一つとして位置付けられる。以後の中世後半期においても『海東諸國紀』や『筑紫道記』、『宗湛日記』等に籍崎の地名が散見され、海上交通の要所や籍崎松原に代表される名勝地としてもその名を残している。

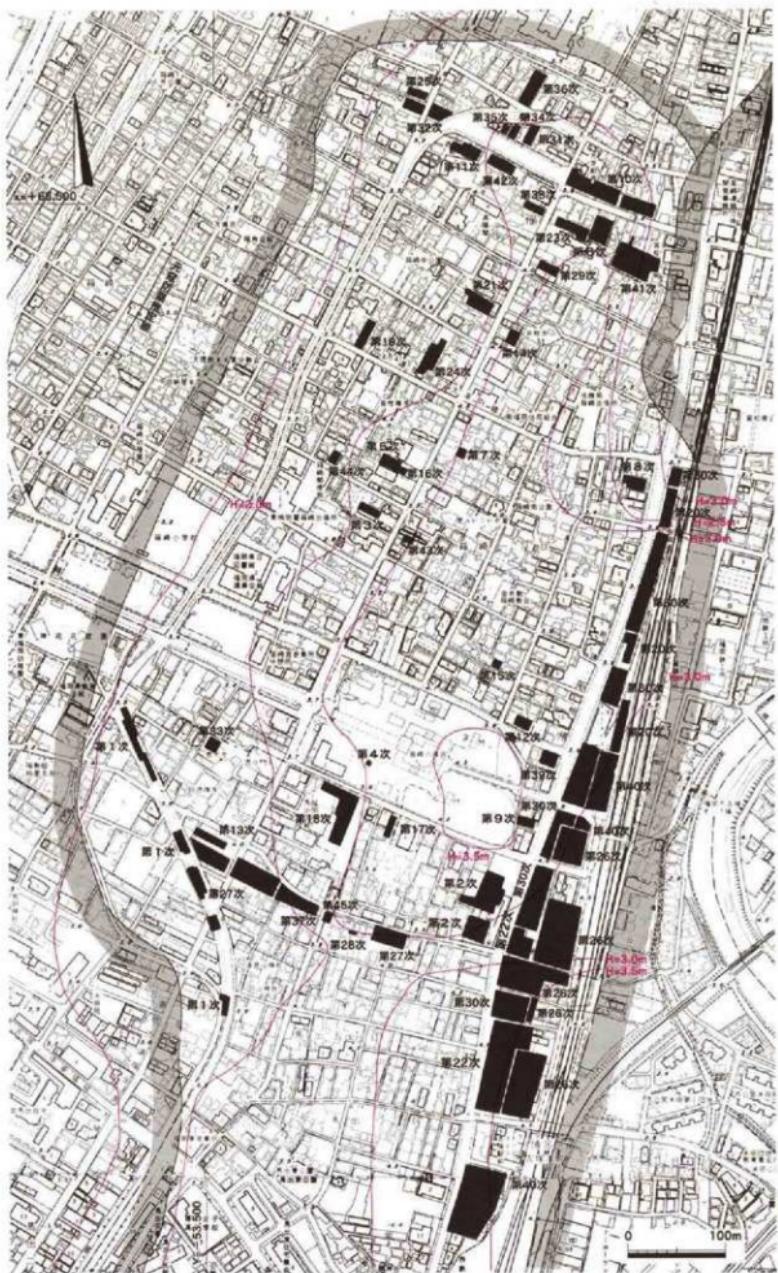
籍崎遺跡では現在までに45次の調査が実施されている(第1表・第2図)。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第6次調査出土の磨製石斧や第20次調査出土の刻目突起文土器の壺片があるが、後世の遺構からの出土である。また、同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片も散見される。今後の調査において稀少であろうが、該期の遺構が確認される可能性がある。なお、現在のところ最も時期の遅い遺構としては本報告第22次調査の弥生時代後期の土坑がある。続く古墳時代では第8次・20次・22次・26次・30次・40次調査等において堅穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。これらは前期を主体とするが、中期、後期の遺構・遺物も散見される。なお、第40次調査では砂丘上に築造された5世紀代の円墳が確認されている。これらはいずれも砂丘尾根から陣側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択したことが看取される。その後、数世紀の絶続が認められるが、宮崎宮創建時の10世紀代の遺構は同宮の南東側に接する第2次・22次・26次・30次・40次調査区において確認されている。先に述べた砂丘鞍部の在り方等を勘案すると、その具体的な位置は不詳であるが、前述した港湾施設がこれら調査区の東側に存在する可能性が示唆される。11世紀代では前代のやや拡大した範囲において該期の遺構が確認され、これらは尾根線および東側緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構が密度をもって存在することから中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは西側緩斜面の利用も開始され始め、12世紀後半には遺跡の広範囲に集落が展開する。13世紀以降もほぼ全域に集落が確認されているが、海側西側斜面を積極的に生活の場として活用している。第11次・14次・21次・24次・42次・44次調査では重層的な調査が実施され、上面で13世紀、14世紀、下面において12世紀、13世紀の遺構が検出されている。中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少數である。第13次調査では短冊形の地割を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

<参考文献>

- ・八林(佐治監修)『福岡平野の古墳群と遺跡立地』九州大学出版会 1998年
- ・川添 隆一著『よみがえる三里塚』東アジアの国際都市 東京 平凡社 1988年

調査次第	調査年次	生 き 遺 墓 の 時 期	概 文	調査次第	調査年次	生 き 遺 墓 の 時 期	概 文
第1次	1983	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第20次	2000	12世紀後半~14世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第2次	1984	10世紀後半~12世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第3次	2001	13世紀後半~14世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第3次	1985	12世紀後半~14世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第4次	2001	11世紀後半~12世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第4次	1986	11世紀後半	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第5次	2001	11世紀後半~12世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第5次	1981	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第6次	2001	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第6次	1984	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第7次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第7次	1994	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第8次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第8次	1995	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第9次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第9次	1995	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第10次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第10次	1996	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第11次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第11次	1997	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第12次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第12次	1997	11世紀後半~12世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第13次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第13次	1997	11世紀後半~12世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第14次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第14次	1997	12世紀後半~14世紀前半	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第15次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第15次	1998	11世紀後半~12世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第16次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第16次	1998	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第17次	2002	12世紀後半~13世紀	『福岡平野の古墳群と遺跡立地』
第17次	1999	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第18次	1999	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』
第18次	1999	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第19次	1999	12世紀後半~14世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』
第19次	1999	12世紀後半~14世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第20次	1999	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』
第20次	1999	古墳時代後~後K、12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第21次	2000	12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』
第21次	2000	古墳時代後~後K、12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第22次	2000	古墳時代後~後K、12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』
第22次	2000	古墳時代後~後K、12世紀後半~13世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』	第23次	2000	12世紀後半~14世紀	『高須山山頂付近の10世紀後半の遺跡』

第1表 稽崎遺跡調査一覧表



第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回報告する第22次調査区は、東区馬出5丁目および同区箱崎1丁目地内に所在し、箱崎遺跡の立地する古砂丘の西側緩斜面上に位置している。今回の発掘調査区は2地点に分れており、南側を4区、北側を5区と呼称した。これは第2表に示すとおり、菅崎土地区画整理事業に伴う発掘調査の調査区呼称については、調査次数に関らず、調査着手順に通し番号としており、平成11年度に行った同事業に伴う初年度の調査である第20次調査1区～3区に継続し、4区・5区を用いた。

なお、本報告書は南側の4区のみを報告対象とし、北側の5区については平成16年度以降に報告の予定である。

今回の発掘調査は、平成12(2000)年7月24日、重機による4区の表土剥ぎ取りから開始した。

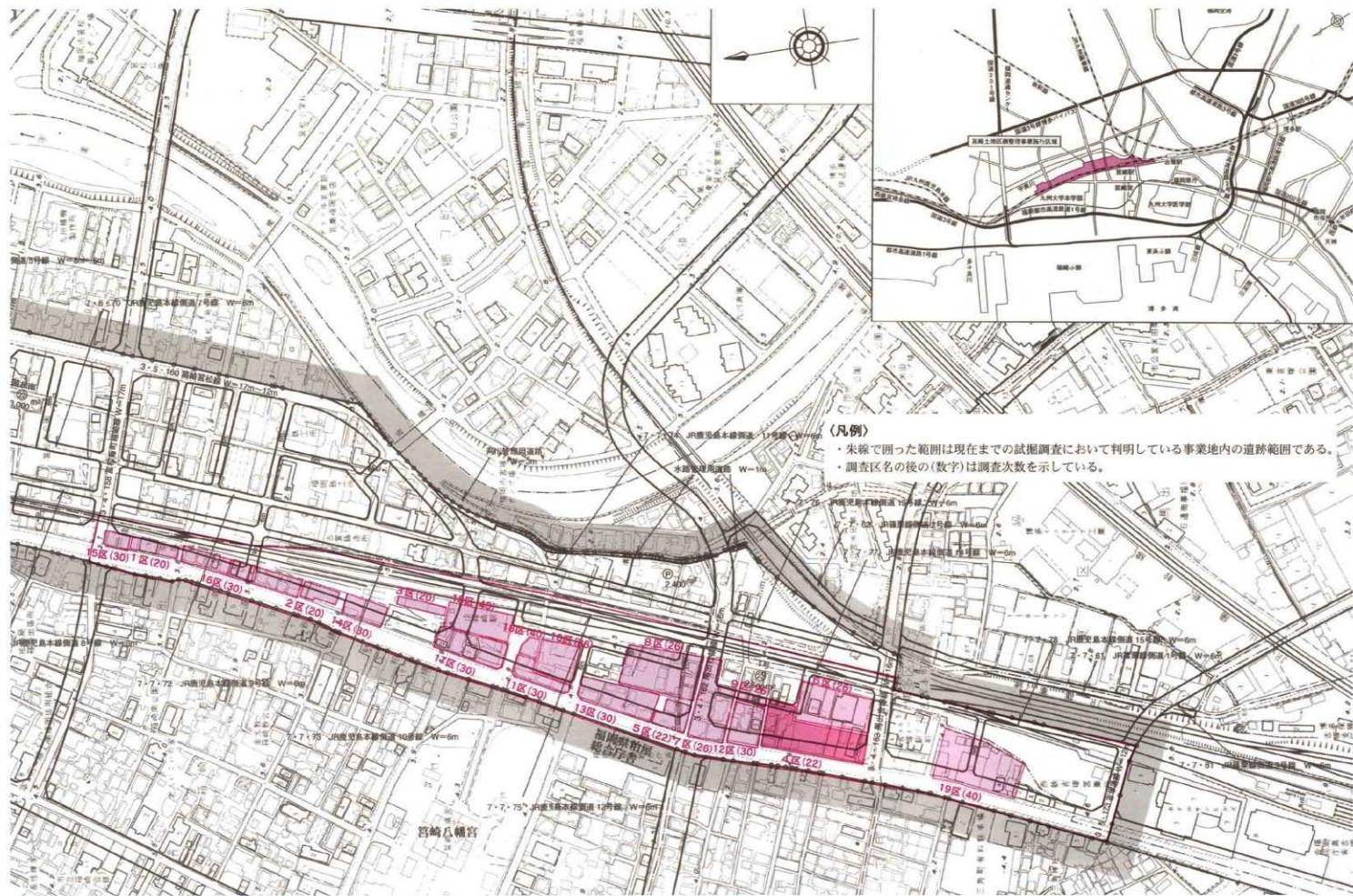
その後、同区の最終作業と並行しながら、5区の表土剥ぎ取りを平成13年1月22日に着手し、全調査を同年4月18日に終えた。両調査区での調査面積は2,976m²である。

調査時の遺構番号は、0001から4桁の通し番号を遺構の種別に換らざ付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構番号と組み合わせて記述する。なお、調査時には、4区では0001～1329、5区では1401～1627の遺構番号を用いた。

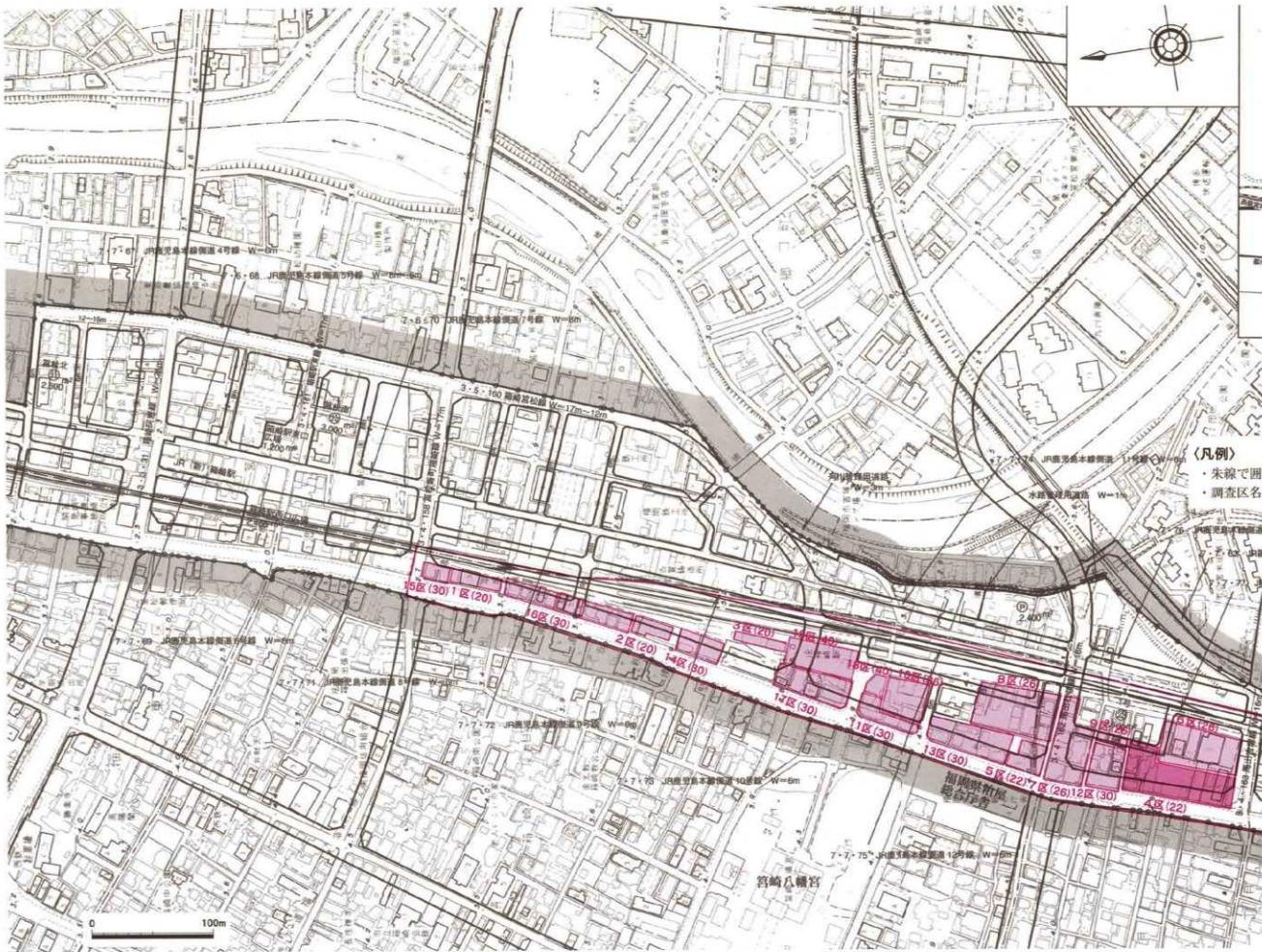
なお、同事業に伴う調査では、区画整理という事業の性格上、施工後には街区や道路形態が現況と大きく変化するため、国土座標(第II座標系)による調査区の管理を行っている。

調査年度	調査次数 (いすれも 箱崎遺跡)	調査番号	調査区名	調査面積	報文
1999(平成11) 年 度	第20次	9959	1区	254m ²	『箱崎14』 市報第767集(2003)
			2区	300m ²	
			3区	328m ²	
2000(平成12) 年 度	第22次	0022	4区	2,473m ²	本報告
			5区	503m ²	2004年度刊行予定
2001(平成13) 年 度	第26次	0108	6区	1,180m ²	『箱崎21』 市報第815集(2004)
			7区	1,296m ²	
			8区	1,859m ²	
			9区	100m ²	『箱崎21』 市報第815集(2004)
			10区	820m ²	
2002(平成14) 年 度	第30次	0210	11区	542m ²	2005年度刊行予定
			12区	715m ²	
			13区	1,203m ²	
			14区	450m ²	
			15区	208m ²	
			16区	1,279m ²	
			17区	600m ²	
2003(平成15) 年 度	第40次	0318	18区	1,000m ²	2006年度刊行予定
			19区	2,167m ²	

第2表 菅崎土地区画整理事業地内調査一覧表



第3図 管崎土地区画整理事業地内調査区位置図（1/3,000）



第3図 箕崎地区面整理事業地内調査区位置図（1/3,000）

2. 4区の調査

1) 概要

第22次調査4区は馬出5丁目1番地に所在し、箱崎遺跡の南東端に位置する。調査前の状況は、個人住宅や共同住宅解体後の平地であった。本区の東側隣接地では第26次調査6区、また北側の道路を隔てた街区では、同調査9区および第30次調査12区の各調査が実施されている。

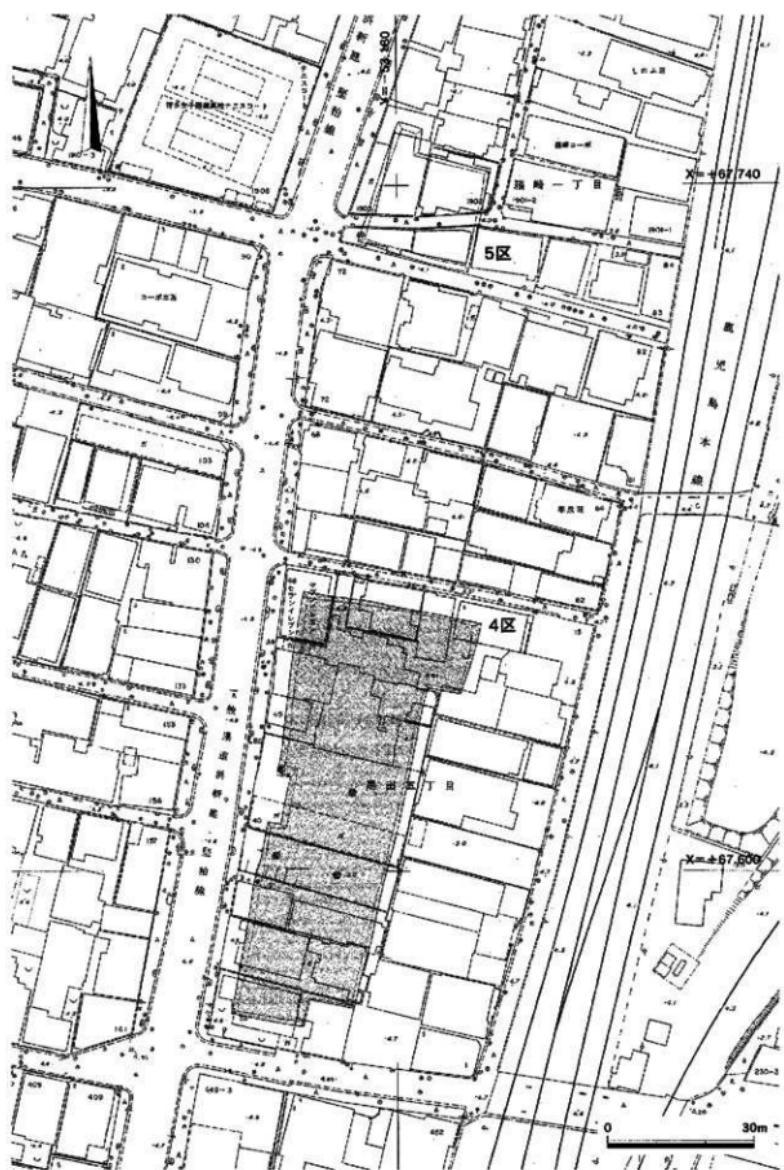
調査区の層序(第5図 北壁土層図参照)は、上層(1層)約0.5m~1mが瓦礫を含む客土層で、近現代の擾乱が多く認められる。その下層には明茶褐色砂質土(2層)がほぼ水平に堆積する。上下層の境界は明瞭である。3層はやや粘性のある暗灰褐色砂質土で、炭化物を微量含む。更に4層は暗灰褐色砂質土と黄灰褐色砂質土とが織状に堆積するが、基盤の黄褐色砂丘砂の傾斜に沿って、東側に行くについたがい薄くなる。また、砂丘砂は東側から西側に向かって緩く傾斜しており、その標高は西端部で約3m、東端部で約3.5mを測る。よって、これらの土層堆積状況から本調査区は砂丘西侧緩斜面に占地するものと考えられる。なお、遺構の大半は4層の上面から掘り込まれているが、実際の遺構検出は、プランが比較的明瞭に確認し得る4層の中位で行った。

本調査区で検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代、古代末頃、中世の3時期に大別され、獨立柱建物、竪穴住居、井戸、土坑、溝、埋葬遺構等を良好に検出したが、調査区南端部には、既存した建物の基礎等による著しい擾乱により、南北幅10数mにわたり、遺構がほとんど遺存していない範囲がある。また、地中梁が残存する南東端部はその除去が困難であることから、やむを得ず調査対象外とした。

本区の発掘調査は平成12(2000)年7月24日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。廃土処理を調査区内で行わざるを得なかったため、調査対象地のほぼ中央を境界として、まず南半部の調査を行うこととした。重機による掘削作業と並行して、発掘器材の搬入やレベル移動、座標測量を行い、8月7日より人力作業を開始した。9月上旬には元寇防署第9次調査(調査番号:0035、遺跡略号GKB-9)を行なったことから、10日程度本区の調査を中断したが、11月8日には空中全体写真を撮影し、南半部の調査を終了した。翌日から重機によって、南半部の廃土埋め戻しおよび北半部の表土剥ぎ取りを行い、同月20日より人力作業に着手した。翌年1月下旬には本調査区の最終作業と並行しながら、5区の重機による表土剥ぎ取りを行なったが、同月27日には空中全体写真を撮影し、同月31日の重機埋め戻し作業終了をもって4区の調査を完了した。なお、本調査区の調査面積は2,473m²である。

先述したが、調査時の遺構番号は、0001から4桁の通し番号を遺構の種別に関らず付している。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、4区では0001~1329の遺構番号を用いた。

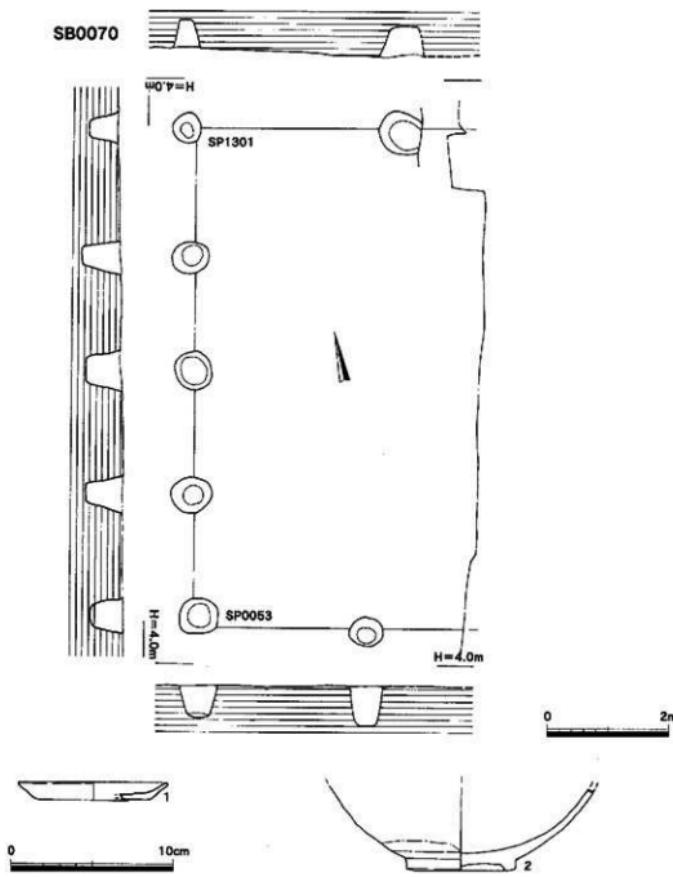
また、調査区内での遺構位置を本文中に示す際には調査時における座標軸を基準とした10m単位での英字(西から東方向にA、B、・・)と数字(北から南方向に1、2、・・)によるクリッド区表記(付図参照)を用いる。



第4図 4区調査区位置図 (1/1,000)

第5図 4区北壁土層実測図 (1/50)





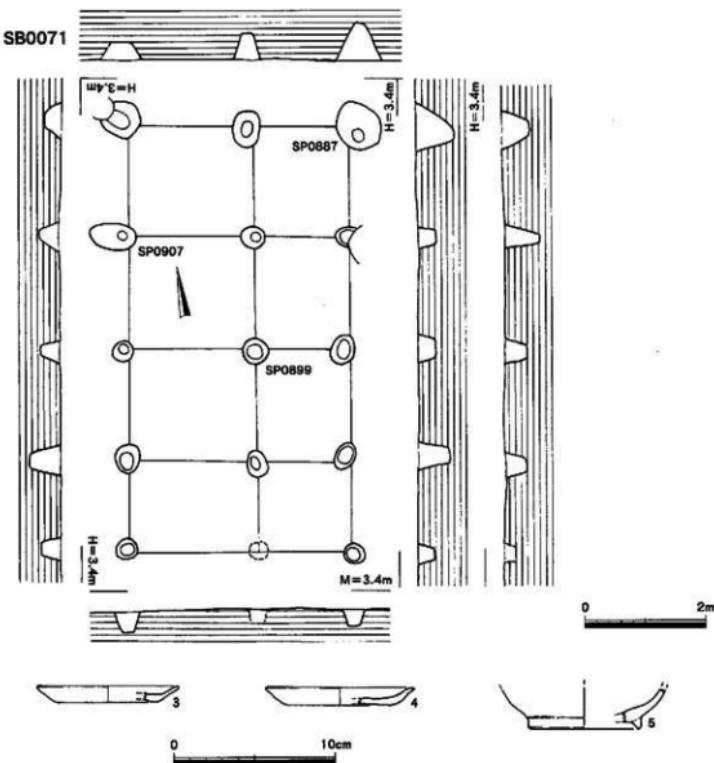
第6図 SB 0070実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)

2) 遺構と遺物

(1) 挖立柱建物 (SB)

遺構の重複が著しく、掘立柱建物として抽出できたものは以下の2棟にとどまった。他に柱筋の通る柱穴群は認められるが、建物の復元には至らなかった。

SB0070(第6図) D-E-4・5区に位置する。2間以上×4間の南北方向の御柱建物と推測され、東側の桁行は調査区外に位置する。建物方位はN-23°-Eで、南西の隅柱であるSP0553はSK0597を切っている。梁間の柱間は北側が3.3m、南側が2.7mである。西側の桁行の全長は8.1mで、柱間



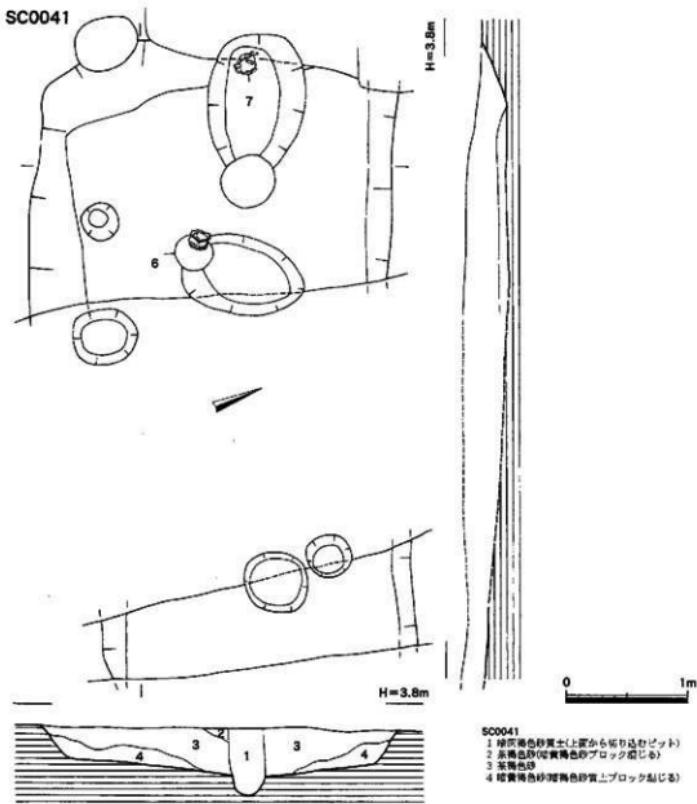
第7図 SB0071実測図(1/80)および出土遺物実測図(1/3)

は1.8~2.1mを測る。柱穴は円形を呈し、径50~70cm、深さ50~65cmである。

出土遺物(第7図) 1はSP0553から出土した回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径9.0cmを測る。板状圧痕はない。2は白磁碗IV-2a類で、体部外面の下半は露胎である。他の柱穴からも土師器や白磁碗、瓦等が出土したが、いずれも細片である。以上の出土遺物やSK0597との重複関係から12世紀後半以降の遺構と考えられる。

SB0701(第7図) C-D-1・2区で確認した2間×4間の総柱建物で、建物方位はN-20°-Eである。梁間の全長は3.6mで、柱間は北側が1.5、2.1mを測り、東側が狭い。南側梁間の中央柱穴は土坑に切られている。桁行全長は6.9mで、柱間は南側がやや狭く1.5m、他は1.8mを測る。東側桁行の北から2番目の柱穴はSK0886に切られている。各柱穴は大半が円形を呈し、径は30~50cmが主体を占める。深さは30~60cmを測る。

出土遺物(第7図) 3・4は土師器小皿である。順に復元口径は8.8、9.0cm測り、SP0899、SP0907



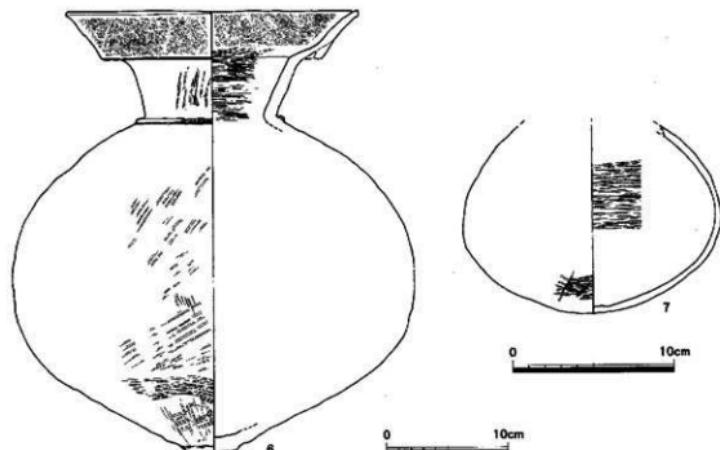
第8図 SC0041実測図 (1/40)

から出土した。3は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。4の外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕はない。5はSP0887出土の土師器柄で、低い高台を貼付する。他に土師器の細片や瓦等が出土している。以上の出土遺物やSK0886との切り合い関係から12世紀中頃の建物と考えられる。

(2) 窪穴住居 (SC)

今回の調査では古墳時代前期の窪穴住居と考えられる遺構を1基確認した。また、後述するが、ほぼ同時期の溝状遺構も検出している。

SC0041(第8図) 調査区北東端のE-F-2・3区に位置する。中央部は南北方向のSD0036によって、また北西コーナーはSX0040に切られる。平面プランは長方形を呈し、南北方向の幅約3mを測る。東側は調査区外に位置するため、東西方向の長さは不明であるが、現況では5m以上と推



第9図 SC0041出土遺物実測図（6は1/4、7は1/3）

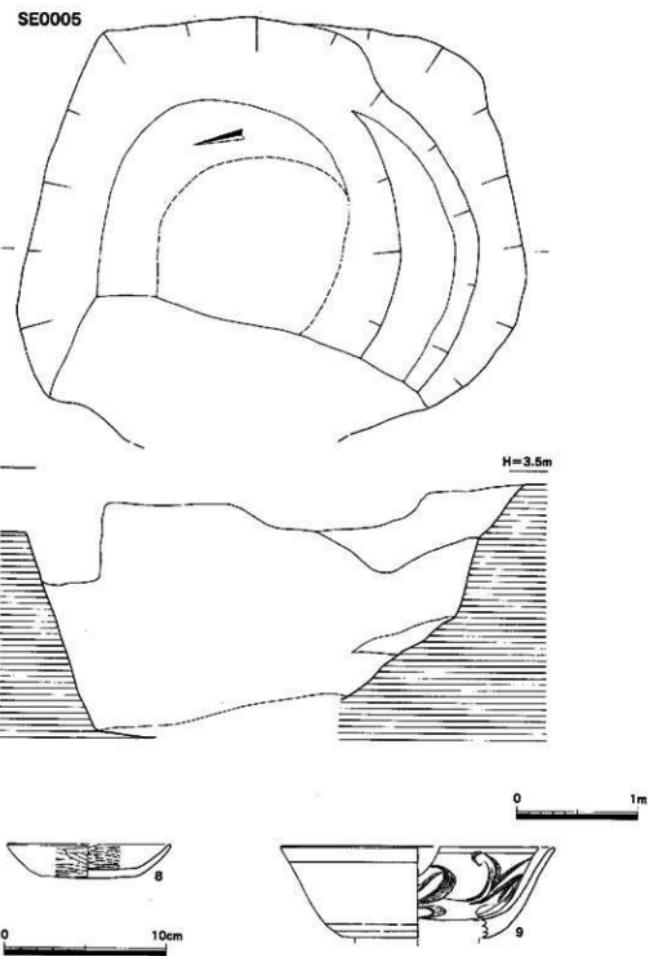
測される。壁面の立ち上がりは緩やかで、深さは30~35cmが遺存している。床面では数基のピットを確認したが、主柱穴は不明である。また、ピット上では2個体の土師器壺(6・7)が出上した。遺構の覆土は茶褐色砂を主体とする。

出土遺物(第9図) 共に縦内系の土師器壺である。6は二重口縁壺で、口縁部の一部を欠失するものの、頸部以下は完存し、口径23.8cm、器高36.5cmを測る。胴部は扁球形を呈し、底部には小さな平底を残す。胴部外面は斜方向の叩きを施し、ナデを加えるが、下半には刷毛目調整もしくは板状工具によるナデを行なう。内面は横もしくは斜方向の刷毛目を施す。頸部は上方に開きながら立ち上がり、外反する二重口縁を付す。口縁上部の下端には粘土貼付が顕著に観察できる。また、頸部下端には低い突帯を貼り付け、刻目を施す。口縁部の内外面には櫛状工具による波状文を施すが、外面には刺突文を加えている。頸部内面には横方向の刷毛目調整を行い、また外面は縦方向の刷毛目が僅かに残るが、削り風のナデを加えている。7は胴部のみが遺存するが、長頸壺であろう。底部は丸底で、扁球状の胴部をなす。器面は風化が進み、外面では下半の一部にヘラ研磨が残る程度である。内面には上半部に横方向の刷毛目が認められる。器壁は薄く仕上げる。他にも土師器が出上しているが、いずれも細片である。

(3) 井戸 (SE)

井戸は古代末から中世に至る総数29基を検出した。井戸の下部には木桶を据えるものが大半を占めるが、丸太割り抜き材や曲物を用いたものも少数認められた。

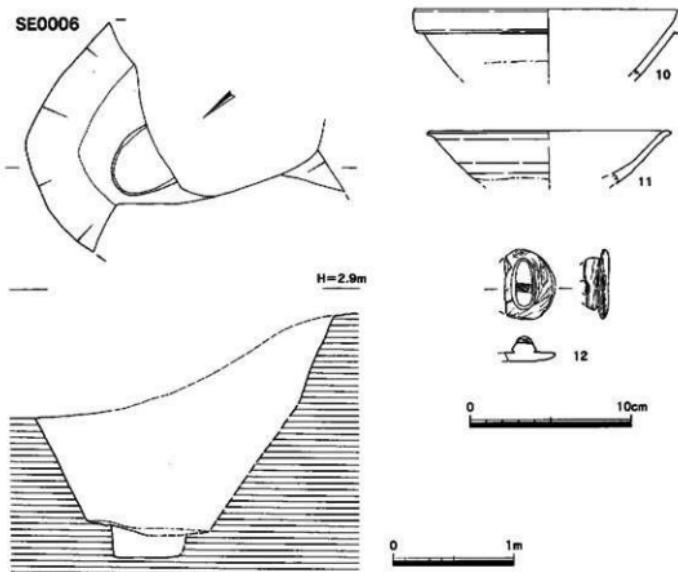
SE0005(第10図) 調査区南西端のA・B-9区で検出したSE0012を切る井戸である。遺構の西端は調査区外に位置する。現況での平面プランは不整な円形を呈し、径約3.5~4.0mを測る。南側の壁面中位には狭いテラスを設ける。検出面からの深さ1.9mに平坦面を有し、更に井戸の下部を据える掘り込みをもつものと推定されるが、中央部に現代のコンクリート製の井戸が掘り込まれている



第10図 SE0005実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (1/3)

ため、詳細は不明である。

出土遺物(第10図) 8は瓦器皿で、内外面にヘラ研磨を施す。外底部は回転糸切りであるが、器面同様にヘラ研磨を加えている。復元口径は10.1cmを測る。9は龍泉窯系青磁碗 I-2 a類である。内面に片彫りによる花文を配する。他の出土遺物として回転糸切りおよびヘラ切りの土師器、中国陶



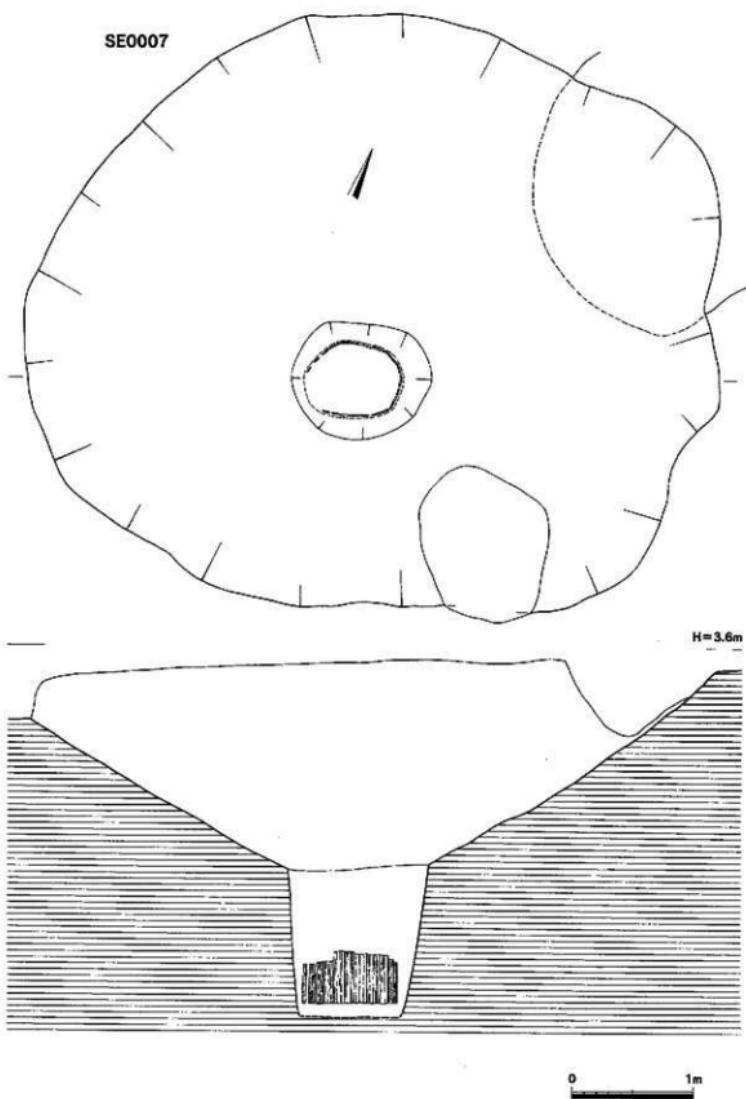
第11図 SE0006実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

器、白磁碗IV・V類の細片がある。これらから12世紀中頃の井戸に位置付けられる。

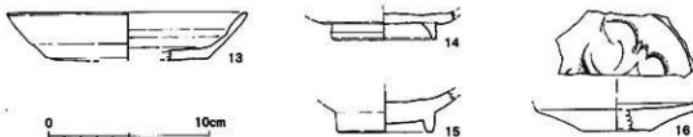
SE0006(第11図) B-8区で確認したが、調査区を東西方向に分断する大規模な搅乱中に位置するため遺存状況は不良である。また、遺構の西側は調査区外に延びている。現況では径約2.5mを測る円形を呈するものと推測される。検出面からの深さ約1.8mに平坦面を設け、径0.5m前後、深さ0.25mの円形の掘り込みを有する。その内部には腐食したやや厚味のある木質の痕跡を確認した。水溜に用いた木桶と考えられる。底面の標高は0.72mを測り、湧水する。

出土遺物(第11図) 10-11は白磁碗で、共に下半は露胎である。また、内外面に貫入が多い。10は玉縁状の口縁部を有する碗IV類、11は碗VI-1a類である。12は滑石製品で、径4.3cmを測る円盤状の基部に梢円柱状の摘みを粗く削り出しが、上部は欠損する。その中央部には径約0.4cmの紐通しの孔を有し、鉄芯が残存する。底面は凸レンズ状を呈する。他に回転糸切り底の土師器や須恵質土器、中国陶器、瓦等が出土しているが、細片が多い。これらの出土遺物から12世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SE0007(第12図) B-C-7・8区に位置する不整な円形プランの井戸で、径は4.8~5.6mを測る。覆土は黄褐色砂と褐色砂を主体とし、井筒部分は暗褐色粘性の砂質土である。壁面は上面から緩い傾斜をもってすぼみ、深さ1.7mから直立して、約1.2mが掘り込まれている。その下層部には厚さ2.0~2.5cm、幅10cm前後の板材を用いた木桶が高さ約30~40cm程遺存していたが、土圧により径約60~80cmの梢円形に歪む。また、その上位には礫の投棄が認められた。底面の標高は0.56mを測り、



第12図 SE0007実測図 (1 / 40)



第13図 SE0007出土遺物実測図（1/3）

湧水が認められた。

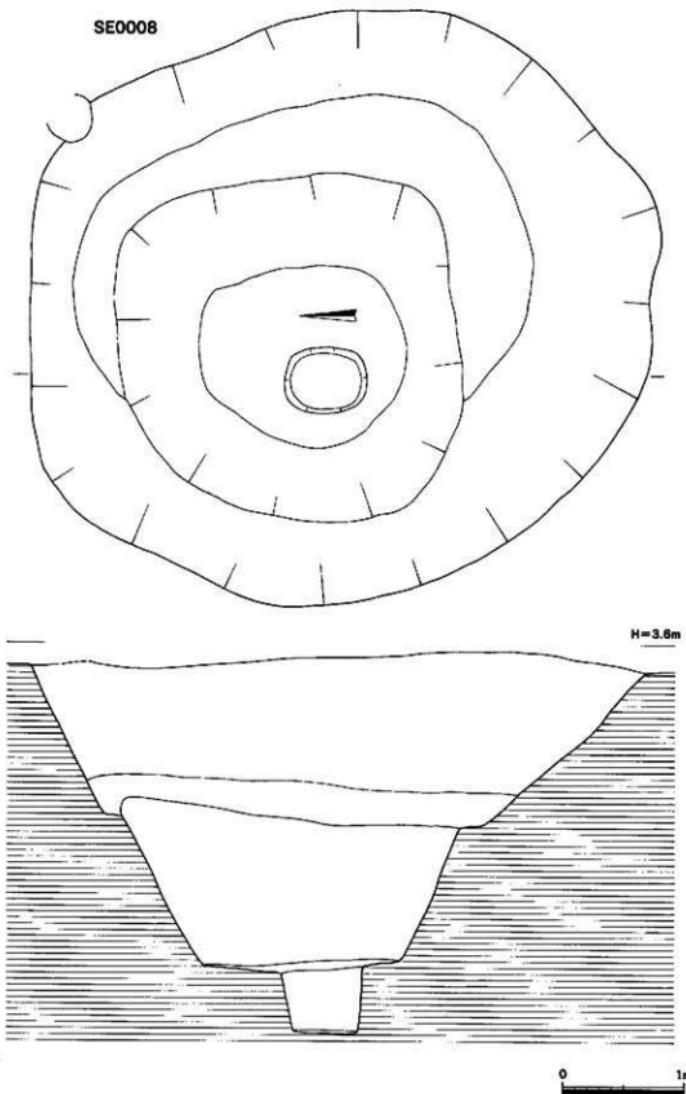
出土遺物(第13図) 13は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器坏で、復元口径は14.7cmを測る。14は土師器碗で、直立する高台を貼付する。15は白磁碗V類であろう。外面は露胎で、見込みにビンホールが多い。16は龍泉窯系青磁皿I-1b類で、見込みには片彫りによる花文を施す。釉は淡緑色を呈するが、外底部は極き取る。他に中国陶器、白磁碗IV類、龍泉窯系青磁、瓦等の細片が川土している。これらの出土遺物から12世紀後半頃の井戸と考えられる。

SE0008(第14図) B-7区で検出した。平面プランは幅4.7～5.3mを測る不整な円形を呈し、壁面中位の東側には狭いテラスを有する。覆土は淡褐色砂と黄褐色砂を主体とし、井筒部分は粘性のある黒褐色砂質土である。検出面からの深さ約2.5mに平坦面を設け、やや西側に井筒の下部を据える径0.65m、深さ0.5mの円形の掘り込みを有する。その上面では精円形プランの木質の腐食した痕跡を確認した。水溜に据えた木桶が土丘により歪んだものと推測される。底面の標高は0.42mを測り、その約0.2m上位で湧水が認められた。

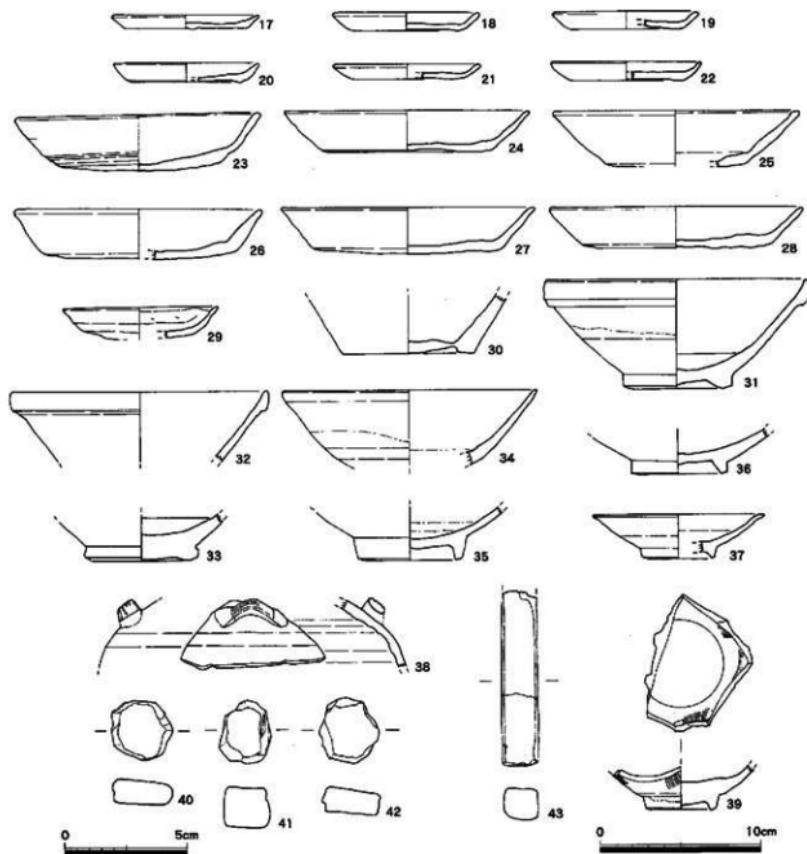
出土遺物(第15図) 17～22は土師器小皿で、復元口径は9.0～9.2cmを測り、その平均は9.0cmである。外底部は17のみ回転ヘラ切りで、板状圧痕を有し、他は板状圧痕のない回転糸切りである。

23～28は回転糸切り底の土師器坏で、いずれも外底部に板状圧痕が認められる。復元口径は15.0～15.6cmで、平均は15.2cmを測る。29は瓦器皿で、口縁部および体部外面はヨコナデ、内面はヘラ研磨を施し、上半部には指オサエが残る。外底部は粗くナデ調整を行う。30は低い高台を有する中国陶器の壺で、内面に光沢のない灰褐色の釉が施される。胎土は淡黄紫褐色を呈する。31～38は白磁である。31～33は碗IV類で、このうち31は井筒下層から出土したほぼ完存のIV-1a類である。体部下半以下には施釉されず、露胎部分は鈍い橙色を呈する。釉は光沢のない白色で、見込みには沈線が巡る。32はやや黄味がかった白色の釉が施される。33は底部片で、見込みには沈線を有する。外面は露胎である。34・35は碗皿類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。共に釉は剥落した白色である。34は直口縁を呈する皿-2類、35は皿-1類で、高台際まで施釉される。36は碗VI類であろう。高台際まで白色の釉が施される。37は皿III-2類である。口縁部は緩く外反し、体部下半以下は露胎である。38は耳壺III類で、横耳を貼付した肩部の破片資料である。39は同安窯系青磁小碗I類である。内外面に柳状工具による施文が行なわれ、見込みには段を有する。オリーブ灰色の釉が高台に垂れている。40～42は井筒内出土の瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。いずれも灰色を呈する。43は一辺2.0～2.2cmを測る方柱状の上製品で、井筒内から出土した。良好な焼成で、全面に丁寧なナデを施す。片側端部は欠損している。他の出土遺物として龍泉窯系青磁、須恵質土器、瓦等の細片がある。以上から12世紀中頃から後半の遺構に位置付けられる。

SE0011(第16図) C-D-8区に位置する井戸で、東側の一部は調査区外に延び、南側壁面の一部は搅乱されている。現況では不整な円形を呈するものと考えられ、南北方向での径は約5mを測る。



第14図 SE0008実測図 (1 / 40)

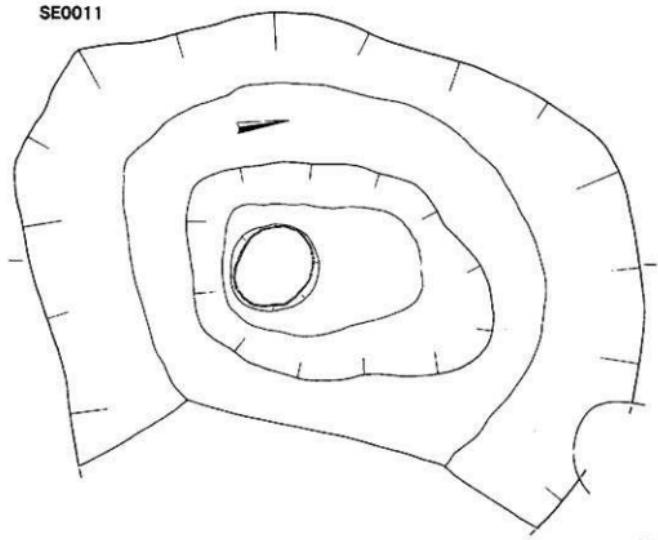


第15図 SE0008出土遺物実測図 (40~42は1/2、他は1/3)

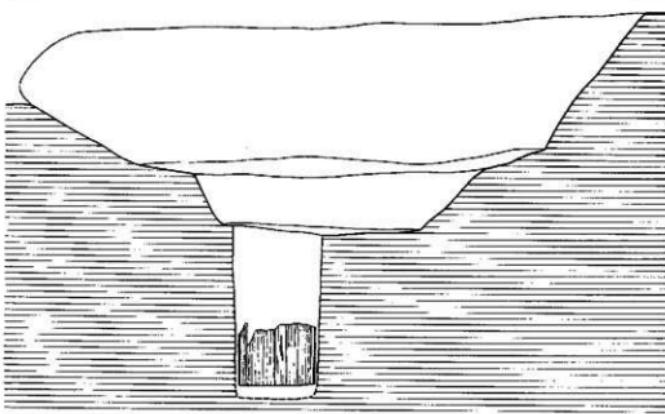
覆土は褐色砂質土と黄褐色砂を主体とし、井筒部分は上層が淡褐色砂質土、下層では粘性のある暗褐色砂質土である。壁面周開には上面からの深さ約1.2mおよび1.6mの2段にテラスを有し、さらに下段の南端に井筒下部を据える径0.6m、深さ約1.4mの掘り込みが認められた。その下層では幅10前後、厚さ約2cmの板状21枚を用いた木桶が高さ50cm前後遺存していた。土圧により木桶は橢円形に歪むが、径は60cm程度であろう。底面の標高は0.47mを測り、約0.2m上位で湧水する。

出土遺物(第17図) 44~46は回転糸切り底の土師器小皿で、板状压痕を有する。復元口径は8.7~9.4cmを測る。47は土師器丸底杯で、内面にコテ当て痕が残り、平滑に仕上げている。外底部は粗いナデを施す。48は瓦器皿である。口縁部はヨコナデ、他はヘラ研磨を施す。49~50は中国陶器で

SE0011

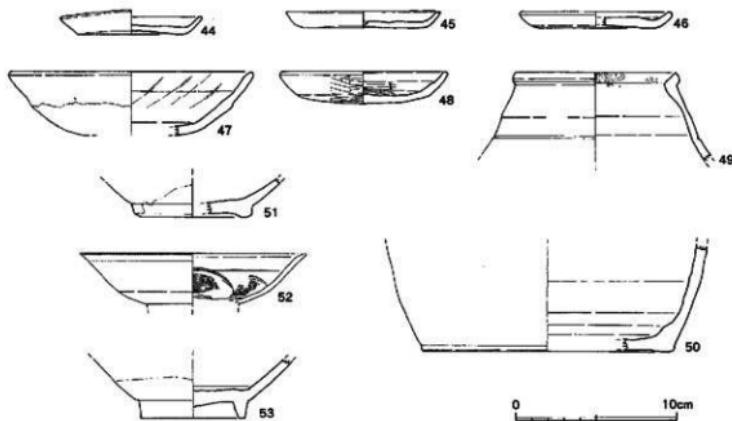


H = 3.8m



0 1m

第16図 SE0011実測図 (1 / 40)



第17図 SE0011出土遺物実測図（1/3）

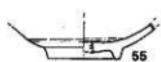
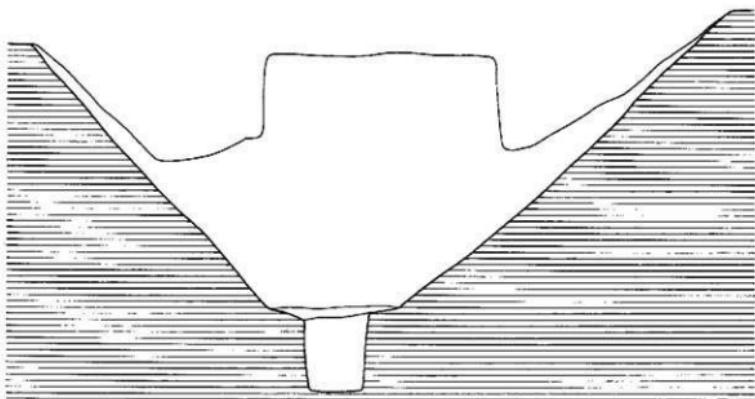
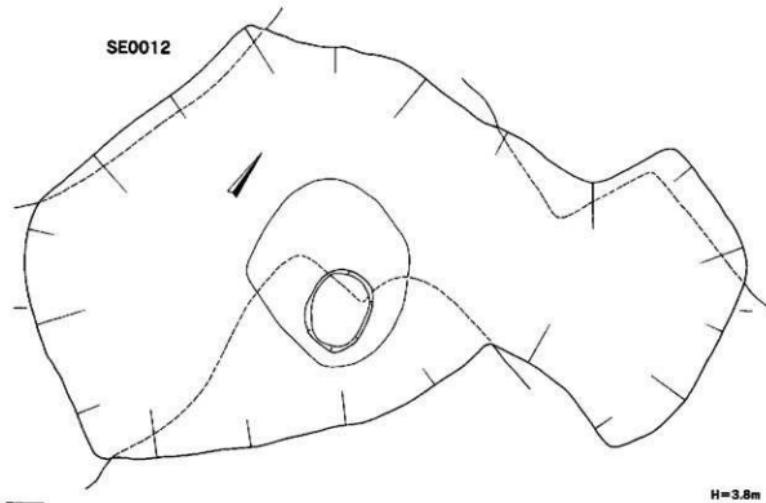
ある。49は蓋で、短く折れる口縁部の内面には目跡を残し、肩部に沈線が巡る。淡灰色の胎土にオリーブ灰色の釉が掛けられる。50は蓋もしくは甕の底部で、黄白色の釉が薄く全面に施される。胎土は暗灰色で、白色の粒子を含む。51～53は白磁碗である。51はIV類で、高台の一部に釉が垂れる。52はVI-1 b類で、口縁部は緩く外反する。内面の上半には細い沈線を配し、下半には櫛状工具および片彫りによる施文を有する。高台の基部が僅かに遺存している。53はⅤ-2類もしくは3類で、見込みの釉を輪状に掻き取っており、目跡が付着する。体部下半以下は露胎で、釉はオリーブ色を帯びる。他に回転ヘラ切り底の土師器や須恵質土器、龍泉窯系青磁等の細片が出土している。これらの遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SE0012(第18図) 調査区南西端のB-9区に位置する。SE0005や周辺の搅乱に切られるため、平面プランは不整形であるが、現況から梢円形もしくは円形プランを呈するものと推定される。上面が遺存する北東—南西方向では径約5.7mを測る。また、壁面の大半は中位まで削平が及んでいる。

上面からの深さ約2.1mに狭い平垣面を設け、さらに井筒下部を据えるため、径0.5～0.7mの梢円形の掘り込みを行っている。その深さは0.6mで、底面の標高は0.47mを測る。その内部には木質が遺存していたが、腐食が進み、形態等は不明瞭であった。

出土遺物(第18図) 54は復元口径15.6cmを測る土師器壊である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。55・56は白磁である。55は皿III-1類で、見込みの釉を輪状に掻き取り、露胎部分には目跡が認められる。56は皿V-2 a類で、丸味のある体部に「く」字状に短く折れる先細りの口縁部を有する。釉はやや青味のある白色である。57は長さ16.8cmを測る鉄鑿である。断面は方形を呈し、身部から刃部に向かってやや細くなり、両刃の直刃を有する。基部は打撃により、端部が外側に張り出している。他に少量の回転ヘラ切り底の土師器、白磁碗IV類等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SE0014(第19図) B-C-6区で確認した井戸で、SE0022およびSK0025を切る。当初はSE0022

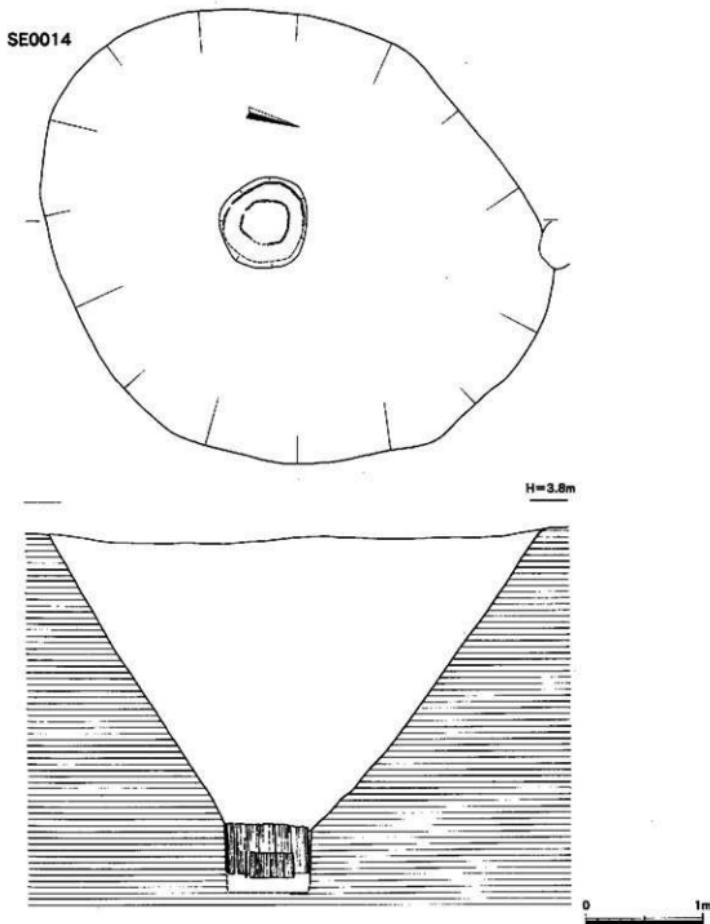


0 1m



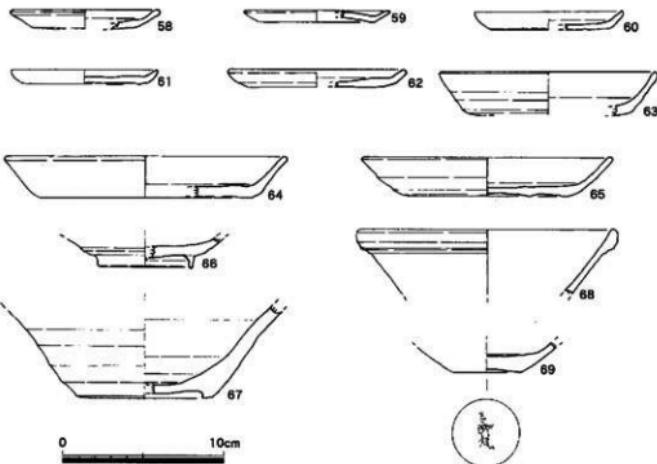
0 10cm

第18図 SE0012実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



第19図 SE0014実測図 (1 / 40)

との重複関係が不明瞭であったため、両造構を同時に掘り下げ、覆土途中で切り合いを確認した。平面プランはやや不整な円形で、径は3.6～4.3mを測る。壁面は上面から底面近くまですばむが、深さ2.3m付近で直立して、更に約0.6mが円形に掘り込まれている。底面の標高は0.59mを測る。その内部には大小の木桶が遺存しており、内側に厚さ1cm前後、幅5～6cmの板材を用いた径約35cmの水溜用の桶を掘え、更に外側のやや高い位置には厚さ2cm前後、幅10cm前後の板材を組み合わせ



第20図 SE0014出土遺物実測図（1 / 3）

た推定径65cmの桶が確認できた。また、小形の桶の下端付近では湧水が認められた。

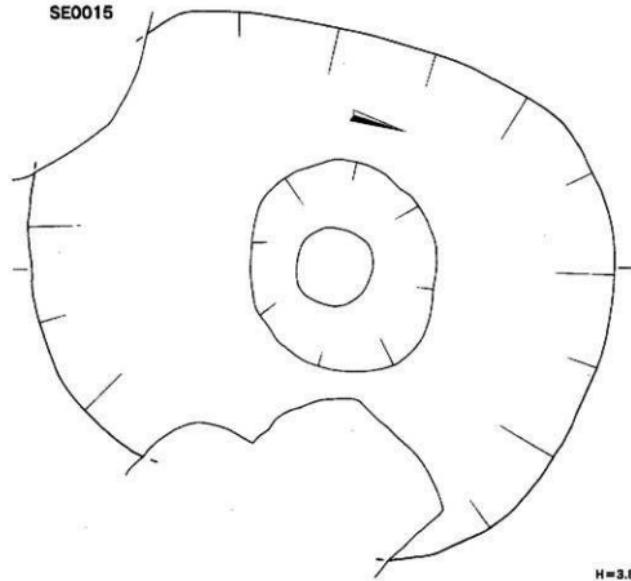
出土遺物(第20図) 58~62は土師器小皿である。外底部は58のみ回転ヘラ切りで、他は回転糸切りである。また、58·59を除いて板状圧痕が認められる。復元口径は9.0~11.0cmを測る。63~65は土師器坏である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径は13.4~17.4cmを測る。

66は土師器椀である。直立する低い高台を貼付し、内外面ともにヨコナデ調整を行う。67是中国陶器の壺底部で、輪状の高台を削り出している。胎土は灰色を呈し、オリーブ色がかった灰白色の釉が薄く全面に施される。体部外面には日跡が認められる。68~69は白磁である。68は正縁状の口縁部を呈する碗IV類である。外面にはビンホールが見られる。69は皿IV類であろう。外底部の釉は削り取り、墨書きで「三郎丸」が記される。釉は光沢がなく、外向にはビンホールが目立つ。胎土や露胎部分はにぶい橙色を呈する。他に須恵質土器、龍泉窯系青磁、滑石製品、瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃~後半の井戸と考えられる。

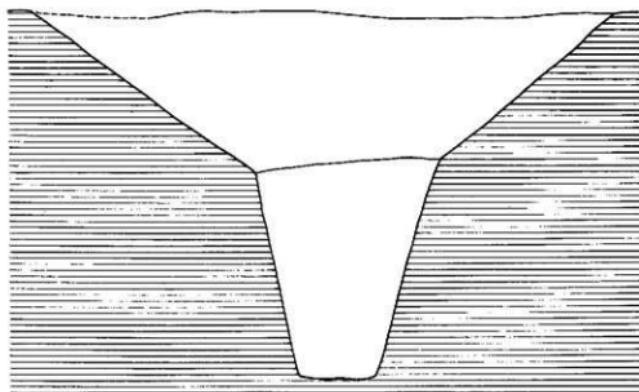
SE0015(第21図) B·C~7区に位置し、SK0021を切る。また、壁面の一部は周辺の搅乱によって削平を受けている。現況での平面プランは南北方向に長い橿円形状を呈し、長径4.8m、短径4.1m前後を測る。壁面の上半は緩くすぼまるが、上面からの深さ約1.3m付近で、直立気味に更に1.7mが掘り込まれる。その径は上端で1.5mの円形を呈する。その内部には井筒に用いたと考えられる木桶等の木質が確認できたが、腐食が進んでいた。底面の標高は0.56mを測り、0.15m付近では湧水する。

出土遺物(第22図) 70~71は土師器小皿である。70は復元口径9.0cmを測り、外底部は回転ヘラ切りである。板状圧痕はない。71は復元口径11.0cmを測る小皿cで、外開きの高台を貼付する。内外面にヨコナデを加える。72~73は土師器坏で、共に復元口径は15.0cmを測る。72は丸底坏で、外底部は回転ヘラ切り、板状圧痕はない。口縁部はヨコナデによって僅かに外反する。73は回転糸切

SE0015

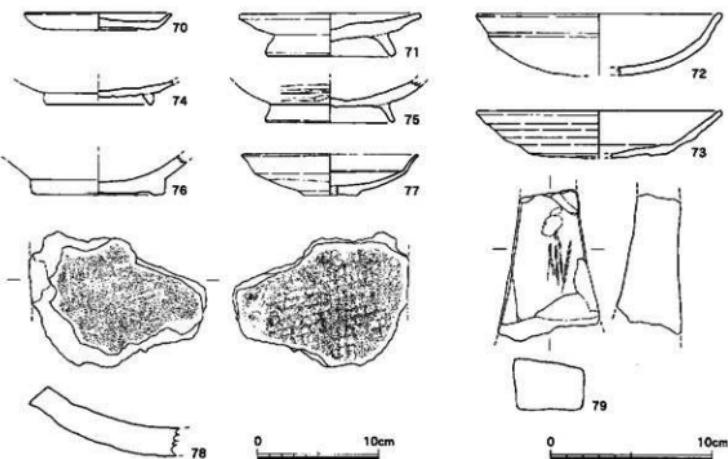


H = 3.8m



0 1m

第21図 SE0015実測図 (1 / 40)



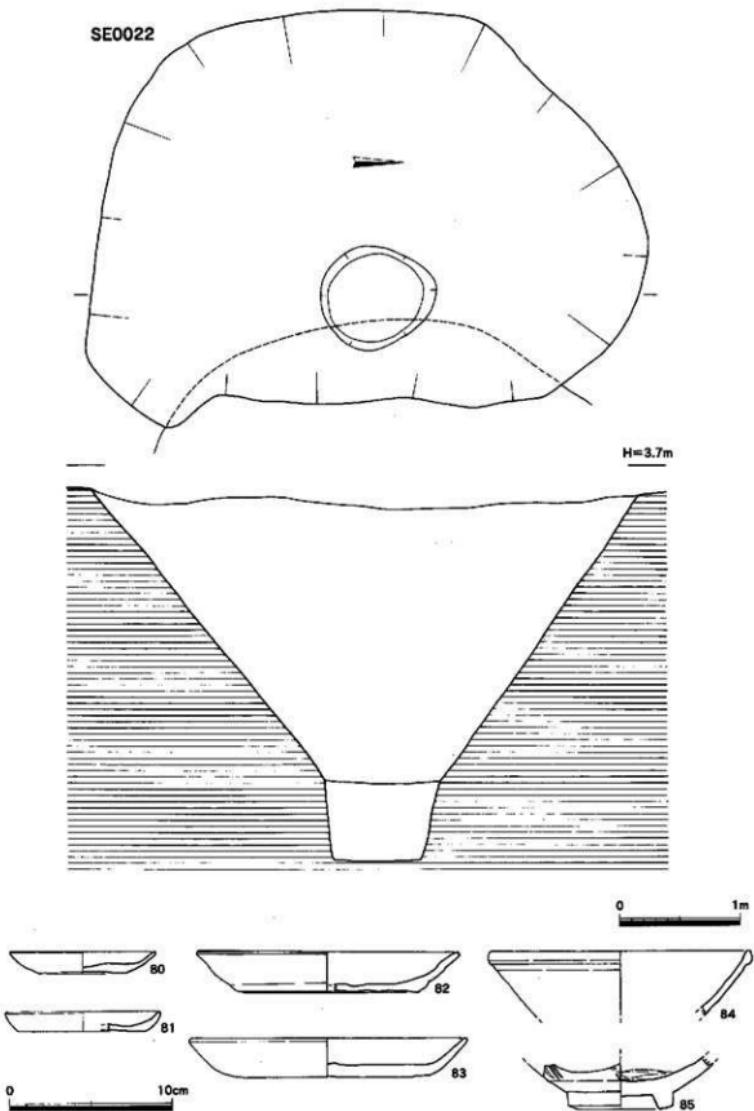
第22図 SE0015出土遺物実測図 (78は1/4、他は1/3)

り底で、板状圧痕を有する。74・75は土師器碗である。74は低い直立する高台を有し、外底部には回転ヘラ切り痕を残す。75の高台は外方に開き、器面には粗いヘラ研磨を施す。76・77は白磁である。76は碗IV-1a類で、内面には光沢のない黄白色の釉が掛けられる。77は皿VI-1a類で、体部中位で屈曲し、その内面には弦線が巡る。薄い施釉を行うが、体部下半以下は露胎である。78は須恵質の暗灰色を呈する平瓦で、凹面には細かい布目が認められる。凸面には格子目叩きを施す。79は砂岩製の砥石で、両端部を欠損するが、各面を砥面として使用している。他の出土遺物として高麗陶器、滑石製品等の細片がある。以上から12世紀前半から中頃の井戸に位置付けられる。

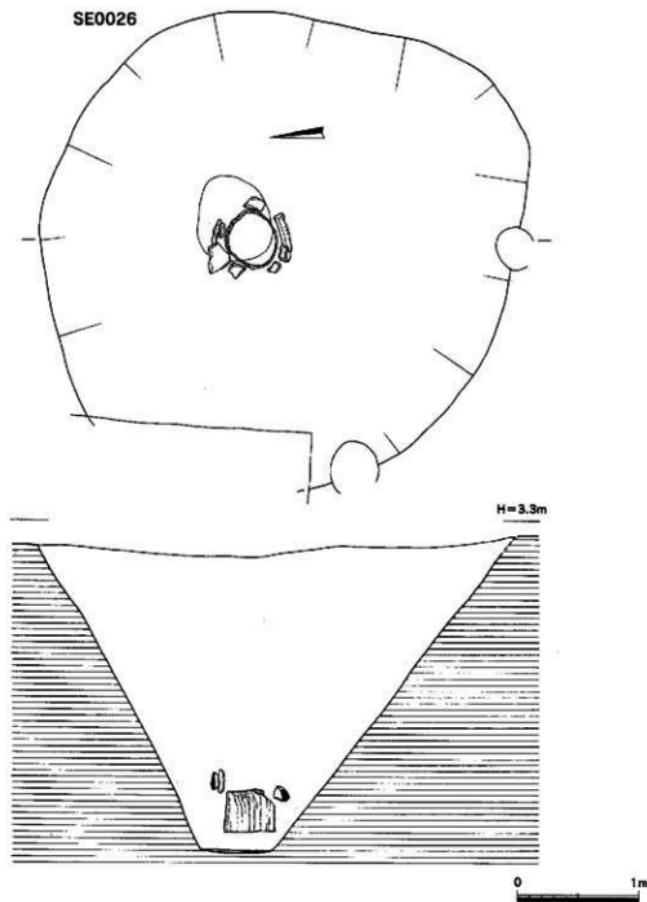
SE0022(第23図) B-C-6・7区で検出した井戸で、SE0014に東側を切られる。現況で平面プランは不整な梢円形を呈し、長径4.5m、短径3.2mを測る。上面からの深さ2.4mまで漏斗状にすばみ、そこから壁面は直立する。その深さは0.65mで、底面の標高は0.46mを測る。0.15m上位で湧水が認められた。その内部には木質の腐食した径0.7mを測る円形の輪郭が確認できた。水溜に用いた木桶等の痕跡であろう。

- 出土遺物(第23図) 80・81は回転糸切り底の土師器小皿で、共に板状圧痕はない。復元口径は順に8.8、9.4cmを測る。82・83は土師器碗で、復元口径は順に16.1、17.0cmである。外底部は回転糸切りで、83には板状圧痕が認められる。84は白磁碗IV類で、小振りな玉縁状の口縁部を呈する。85は同安窯系青磁碗III-2類である。見込みの釉を輪状に掻き取り、目跡が付着している。黄灰色で硬質な胎土に、発色の鈍い施釉を行う。外面は露胎で、櫛状工具による施文を有する。他に中国陶器、白磁碗V類、龍泉窯系青磁、瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の井戸と考えられる。

SE0026(第24図) 調査区西端際のB-C-5・6区に位置し、北西部の一部は調査区外に延びる。現況での平面プランは不整な円形を呈し、径は3.9～4.2mを測る。上面から底面まで漏斗状に一気に



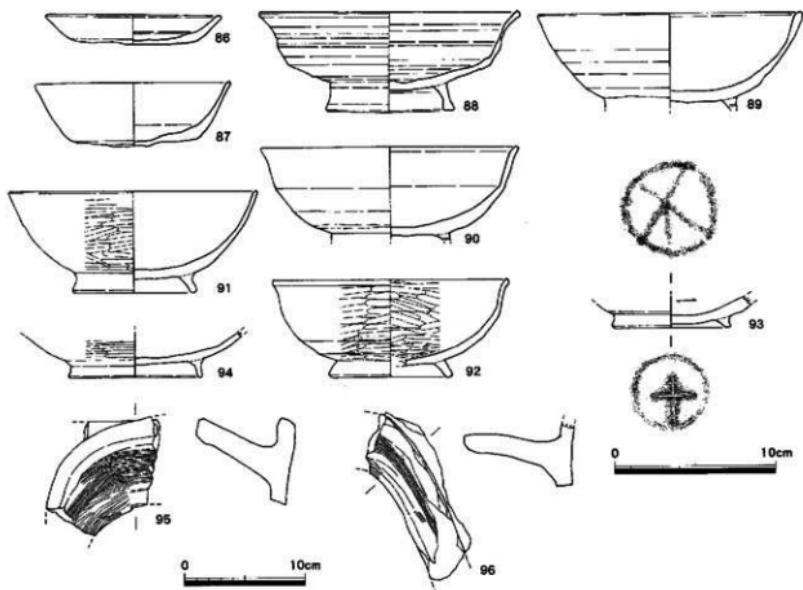
第23図 SE0022実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



第24図 SE0026実測図 (1 / 40)

すばみ、深さは約2.6mを測る。上層には拳大から人頭大の礫が認められ、井筒に投棄したものであろう。径0.6~0.7mの不整な梢円形を呈する底面の標高は0.59mを測り、湧水が認められた。下層には径約40cmの丸太割り抜き材を水溜として据え付けるが、土圧により上部が変形する。また、その周囲には角礫9個が設置されており、固定を図る石材であると考えられる。

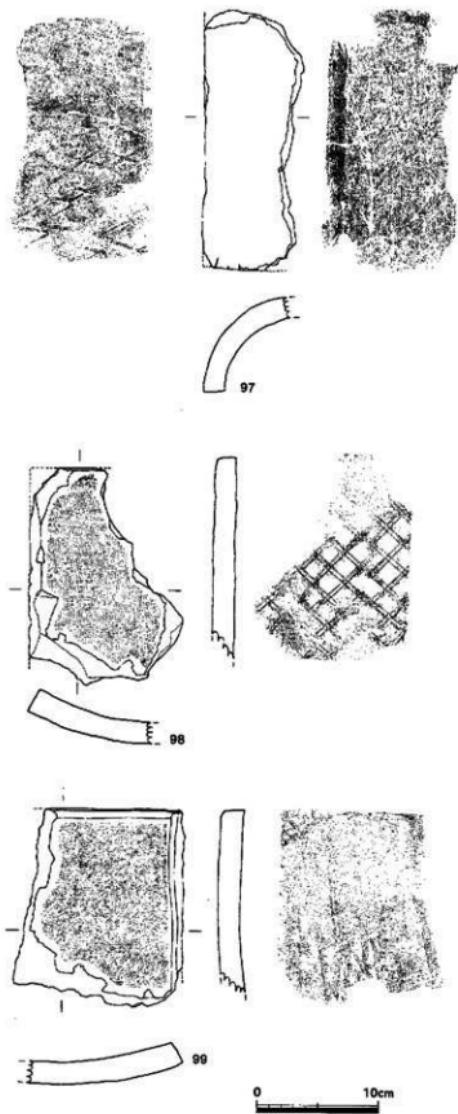
出土遺物(第25・26図) 86は口径10.8cm、器高1.9cmを測る完形の土師器小皿である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。87は土師器坏で、口径12.0cm、器高は3.9cmを測り、深みが



第25図 SE0026出土遺物実測図（1）（95・96は1/4、他は1/3）

ある。外底部には粗いナデを加える。88～90は土師器楕である。88は端部に平坦面を有する高い高台を貼付する。体部には明瞭な穂をもって屈曲し、外反する口縁部へと続く。外底部の中心部のみをナデるが、他はヨコナデを施す。橙色の色調を呈する。89の体部は丸味を有する。高台端部を欠失している。90は体部中位で緩く肩出し、外面の上半には煤が付着する。89同様に高台の端部を欠損する。後2点の色調は淡黄褐色を呈する。91～93は黒色土器A類楕で、体部の内外面にヘラ研磨を施す。いずれも外方に開く高台を有するが、93は低い。93の見込みおよび外底部にはヘラ記号が認められる。94は黒色土器B類の楕である。直立気味の高台に丸味のある体部を有し、内外面にヘラ研磨を施す。95・96は移動式窯で、同一個体と考えられるが、直接の接合面はない。窯体および窯外壁はヨコナデもしくはナデを行い、窯内面は刷毛目調整を施す。97～99は瓦で、いずれも色調は黄白色を呈し、凹面に布目が認められる。97は丸瓦で、凸面は斜格子目叩きを行うが、ナデを加えている。98・99は平瓦で、98の凸面は二重格子目叩き、99はヘラナデを加えているが、文字銘「佐」（左字）の一部が残る。他にも土師器、黒色土器、瓦の細片や白磁片1点が出土した。これらの出上遺物から10世紀後半から11世紀中頃の井戸に位置付けられる。

SE0027(第27図) 調査区西貢際のB・C-5区で検出した井戸で、壁面の南側および東側の一部は搅乱される。また、造構の西側は調査区外に位置するが、現況では円形の平面プランを呈するものと考えられ、径は2.7m前後に復元できる。壁面の傾斜は急で、上面から底面まで漏斗状にすばみ、深さは2.7mを測る。底面の標高は0.48mである。また、底面付近の壁面際では井筒の一部と推定され



第26図 SE0026出土遺物実測図（2）（1/4）

る円形状の木質の痕跡を確認し得たが、腐食により構造等は不明である。

出土遺物(第28図) 100は回転ヘラ切り底の土師器壊である。復元口径は11.4cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。101～105は土師器碗で、外底部にはヨコナデを施す。101-102-105には回転ヘラ切り痕を残す。104は細い高脚の高台であるが、他は低い高台を貼付する。104の内底部はヨコナデ、105はヘラ研磨を行うが、他は器面が風化しており、調整は不明瞭である。なお、103の内面の一部には黒色物が認められ、黒色土器A類の可能性がある。106は土師器壺である。口縁部を外反させ、ヨコナデを行う。体部外面には指オサエ、内面には縦方向のヘラ削りを施す。107は白磁皿I-7類の口縁部片である。白色の硬質な胎土に淡青白色の透明釉が施され、貫入が認められる。

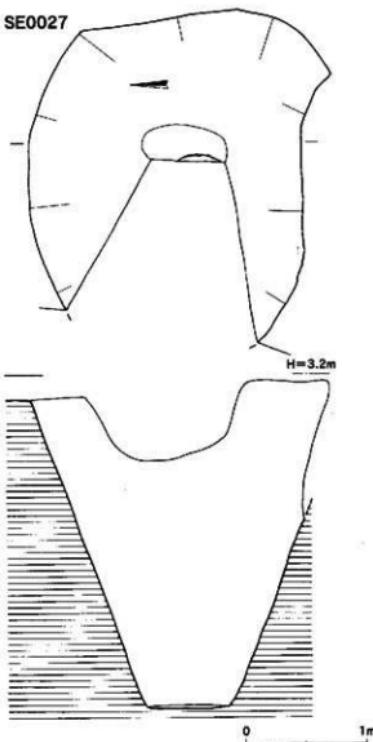
外面には押圧縞線、内面には堆線を有する。108は越州窯系青磁碗I-2aウ類である。輪状高台の疊付きは露胎で、鈍い赤色に発色する。高台および見込みには目跡が残る。胎土は獨った黄灰色で、釉はオリーブ黄色を呈する。109-110は平瓦である。共に凹面には布目が認められるが、109には粗いナデを加えている。凸面の叩きは109が格子目、110が二重の斜格子目である。以上の出土遺物から10世紀後半から11世紀中頃の遺構と考えられる。

SE0030(第29図) D-7区で確認した井戸で、南側をSX0023-0024に、また、北側を攪乱に切られている。現況では径2m前後を測る不整な円形を呈する。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。壁面の傾斜は急で、直立気味に底面まで掘り込む。上面からの深さは2.6mで、底面の標高は1.03mを測る。

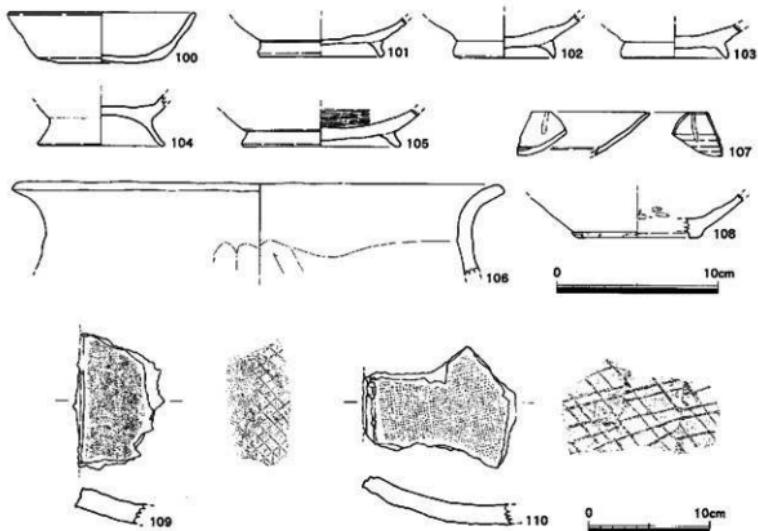
出土遺物(第29図) 111-112は回転ヘラ切り底の土師器坏で、板状圧痕はない。順に復元口径は14.0、15.0cmを測る。体部外面はヨコナデ、内面は研磨を施す。111の外底部には爪状の刺突が円形に巡る。113は口径17.2cmを測る土師器碗である。断面三角形の低い高台を貼付する。口縁部を僅かに外反させ、その内面はヨコナデを加えている。体部の内外面にはヘラ研磨を施す。他に瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から11世紀後半から12世紀前半の造構に位置付けられる。

SE0031(第30図) 調査区西壁際のB-C-4・5区で検出した井戸で、径4.9~5.1mを測る円形の平面プランを呈する。上面からの深さ約2.1mに狭い平坦面を設け、さらに井筒の下部を据えるため、径0.8mの円形の掘り込みを行っている。その深さは0.6mで、底面の標高は0.57mを測る。その内部には土圧により変形するものの、径約50cm前後の丸太割り抜き材を水溜めとして設置していた。その下端付近では湧水が認められた。

出土遺物(第31図) 114~123はいずれも回転ヘラ切り底の土師器小皿である。口径は9.6~10.9cmを測り、平均は10.2cmである。122を除いて外底部には板状圧痕が認められる。121・122は完形品である。124は高台を付す小皿cで、口径は12.2cmを測る。全面にヨコナデを施すが、外底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。125~129は土師器坏で、外底部はいずれも回転ヘラ切りである。126・129には板状圧痕がない。口径は10.8~11.9cmで、平均は11.3cmを測る。130・131は土師器丸底坏である。共に外底部は回転ヘラ切りで、130には板状圧痕が認められない。内面には研磨を施し、コテ当て痕が残る。順に復元口径は13.8、14.8cmを測る。132~134は黒色土器A類碗で、内外面にヘラ研磨を施すが、口縁部および高台部にはヨコナデ調整を行う。132は深味のある体部に直立気味のやや高い高台を貼付する。133・134は外開きの低い高



第27図 SE0027実測図 (1/40)



第28図 SE0027出土遺物実測図 (109・110は1/4, 他は1/3)

台を有し、口縁部を僅かに外反させる。135～137は越州窯系青磁碗I-2a類で、全面に施釉するが、輪状高台を呈する疊付きの釉は粗く削り取る。見込みおよび覺付には日跡が残る。胎土は淡黄灰色で、釉は135・136が黄緑色、137は茶黄色を呈する。138・139は須恵質の瓦である。138は丸瓦の玉縁部で、凸面はヨコナデ、凹面には布目が残る。139は平瓦片で、凹面には布目が認められ、凸面には細かい格子目叩きを施す。140は古式土師器で、破片接合の結果、全周約1/3が復元できた。該期の遺構を井戸掘削時に被壊したものと想定される。なお、ほぼ同時期の遺構であるSX0035が南東側に隣接して位置している。復元口径24.8cm、器高49.5cmを測る二重口縁壺で、丸底の底部に長脚のナデ肩の脚部を有する。短い頸部から口縁下部に統き、外方にやや開く口縁上部がのる。調整は外底部が板状工具によるナデ、体部外面から口縁部にかけては刷毛目調整を行うが、口縁下部および口縁端部にはヨコナデを施す。また、内面は口縁部にヨコナデを加えるが、体部には横方向の刷毛目を残す。下半部は器面の風化が進む。体部内面の上半には粘土帶の接合痕が認められる。他にも占式土師器の細片が出土している。以上の出土遺物から10世紀後半から11世紀中頃の遺構と考えられる。

SE0038(第32図) 調査区北西隅のC-1で検出した井戸で、SE0039を切る。北側の一部は調査区外に位置する。径3.6～3.8mを測る円形の平面プランを呈し、深さ2.4mを測る。標高0.57mの底面まで漏斗状にすばみ、僅かに湧水が認められた。覆土は暗褐色砂と黄褐色砂を主体とし、中央の井筒部分は暗褐色粘性土である。底面上には幅10cm前後、厚さ1～2cmの板材を用いた木桶が高さ約50cm遺存していた。一部は腐食するが、桶の径は約70cmを測る。

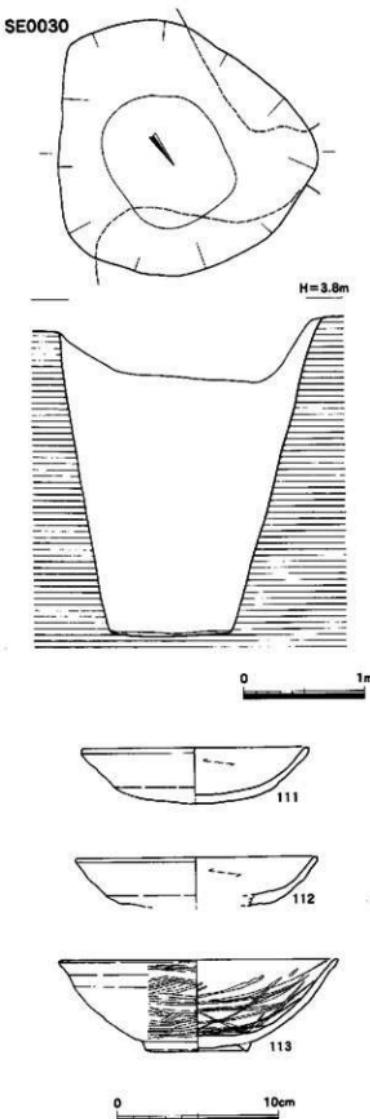
出土遺物(第33図) 141～145はいずれも板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿で、復元

口径は8.6～10.7cmを測る。145は深味のある器形である。146～151は土師器小皿cで、口径は10.2～12.4cmを測る。内底部を除き、ヨコナデを加える。149の内底部には「X」のヘラ記号を有する。152は復元口径14.4cmの土師器丸底坏である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕は認められない。内面にはヘラ研磨を施す。153は土師器碗である。断面三角形状の細い高台を貼付する。外面はヨコナデを行うが、外底部には回転ヘラ切り痕が残る。内面は平滑に仕上げる。154は須恵質土器の東播系鉢で、復元口径は26.0cmを測る。口縁部は玉縁状を呈し、内外面共にヨコナデを施す。155は同安窯系青磁碗I-1b類である。外面には櫛目文、内面には櫛状工具によるジグザグ状文を有する。口縁部下で緩く屈曲し、その内面には沈線を配する。156は丸瓦である。凸面には繩目叩きに粗くナデを加え、凹面には布目が残る。色調は暗灰色を呈する。他に中国陶器や白磁等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀前半の遺構に位置付けられる。

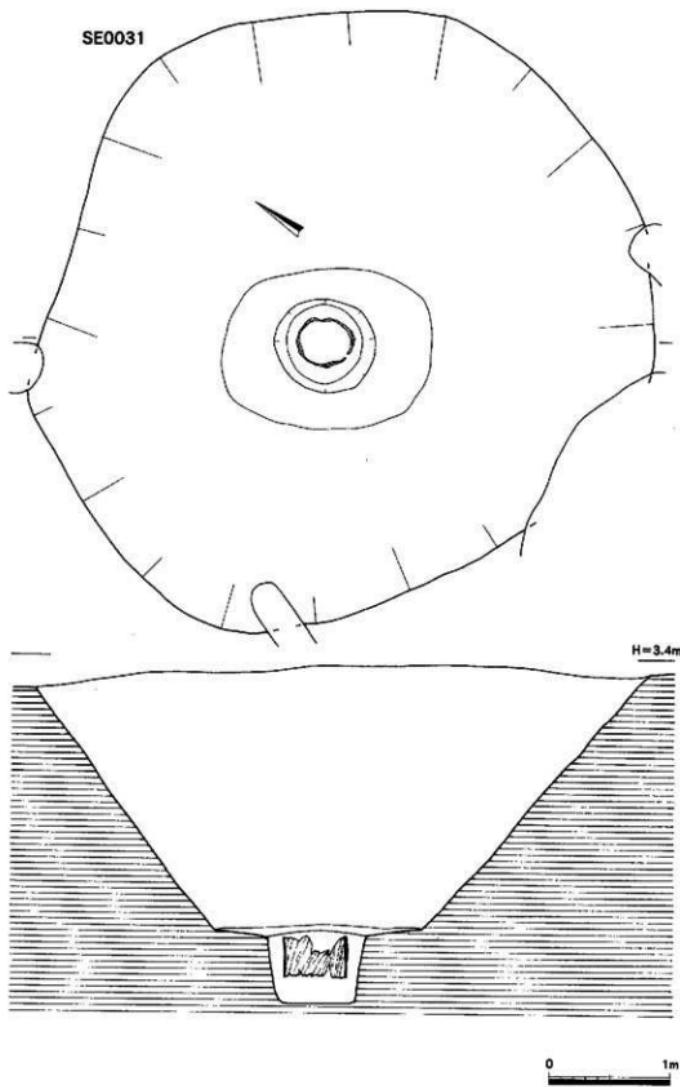
SE0039(第34図) C-1区に位置し、北東側の一部をSE0038に切られる。また、SE0045を切っている。現況での平面プランは不整な椿円形状を呈し、長径約3.5m、短径約3mを測る。上面から底面まで漏斗状にすぼむが、壁面中位の東側には狭いテラスを有する。底面の標高は0.66mを測り、湧水は認められない。底面から0.4m上部では遺存状況の悪い木質が確認できた。横棟材を一辺0.6～0.7mの方形に組んだ井側の一部と考えられる。また、その内部には径45cm前後の木質の腐食した痕跡のみが認められた。水溜に用いた曲物等であろう。

出土遺物(第34-35図) 157は口径9.4cmを測る土師器小皿である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕はない。ヨコナデ調整を施すが、内底中央部にナデを加える。158は土師器丸底坏で、復元口径は16.8cmを測る。外底部は回転ヘラ切りである。口縁部は緩く外反し、やや尖り気味に收める。内面にはコテ当て痕が認められ、研磨を行う。

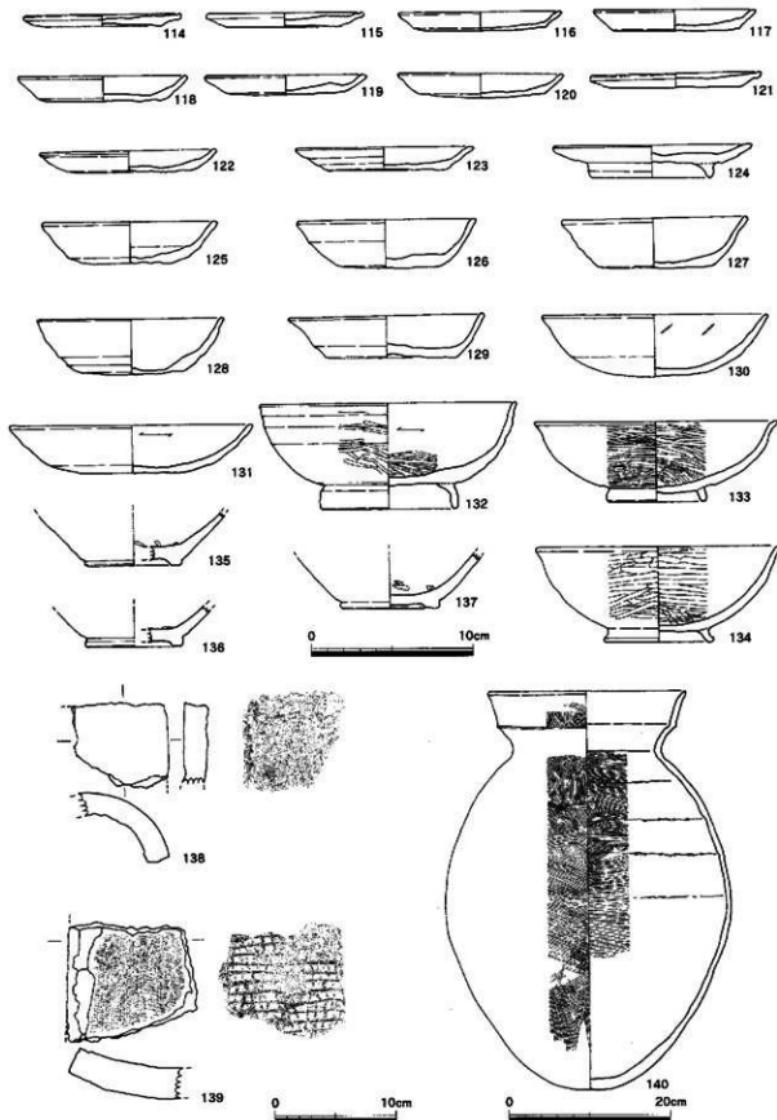
159は土師器碗で、断面方形形状の細い高台を開いており、



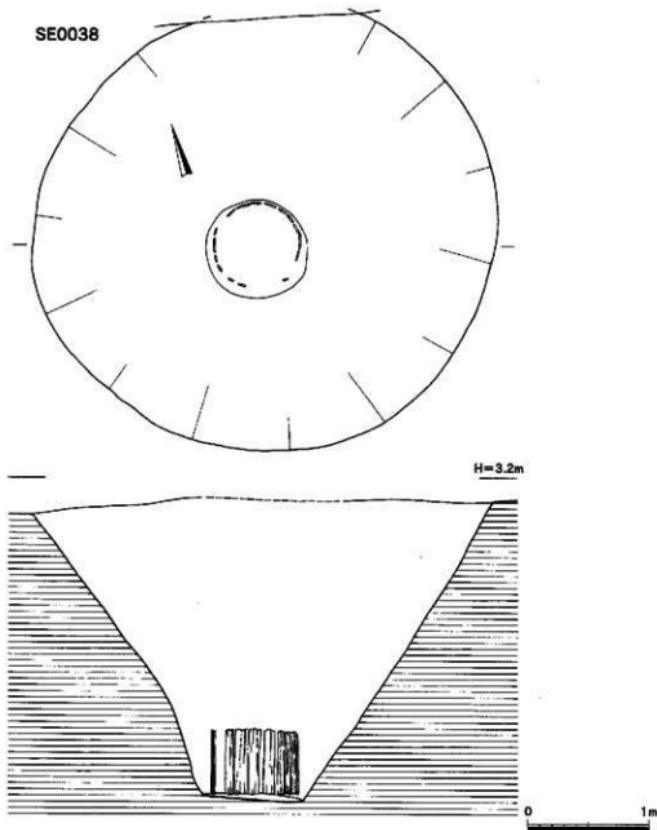
第29図 SE0030実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



第30図 SE0031実測図 (1 / 40)



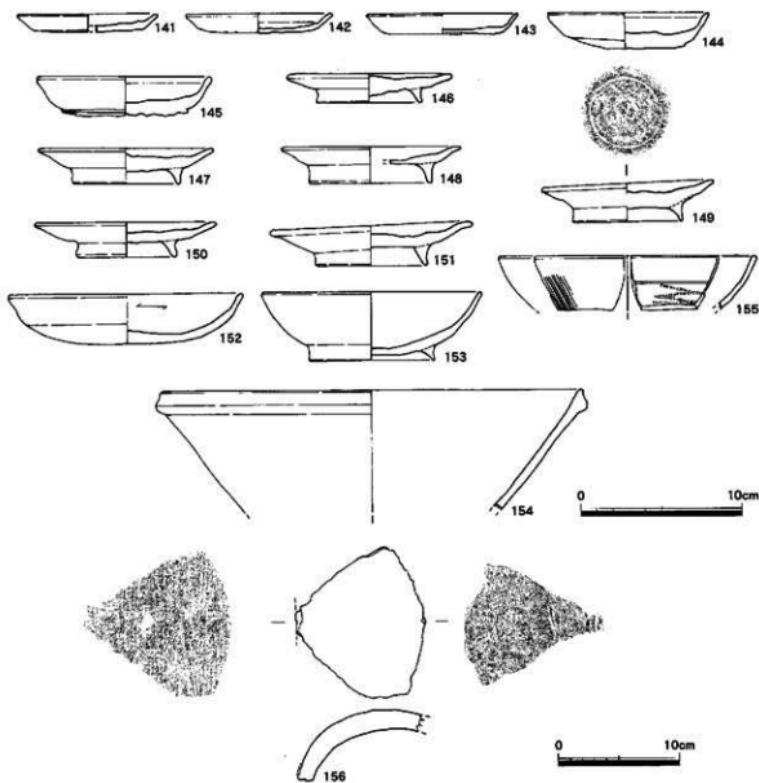
第31図 SE0031出土遺物実測図 (138・139は1/4、140は1/6、他は1/3)



第32図 SE0038実測図（1 / 40）

て付く。160・161は黒色土器A類である。160は外面上半まで彫られる。161の内底部は横方向のヘラ研磨調整を施す。162は越州窯系青磁碗I-2 a A類である。壺付きの軸は掻き取り、目跡が残る。また、見込みにも細長い目跡が環状に認められる。163～165は須恵質の丸瓦である。いずれも玉縁部の凸面はヨコナデもしくはナデを施し、凹面には細かい布目が残る。胴部凸面は163・165が斜格子目の叩き、164は格子目叩きを行うが、粗くナデを加えている。他に土師器等の細片や白磁片1点が出土している。これらの遺物から10世紀後半から11世紀中頃の井戸に位置付けられる。

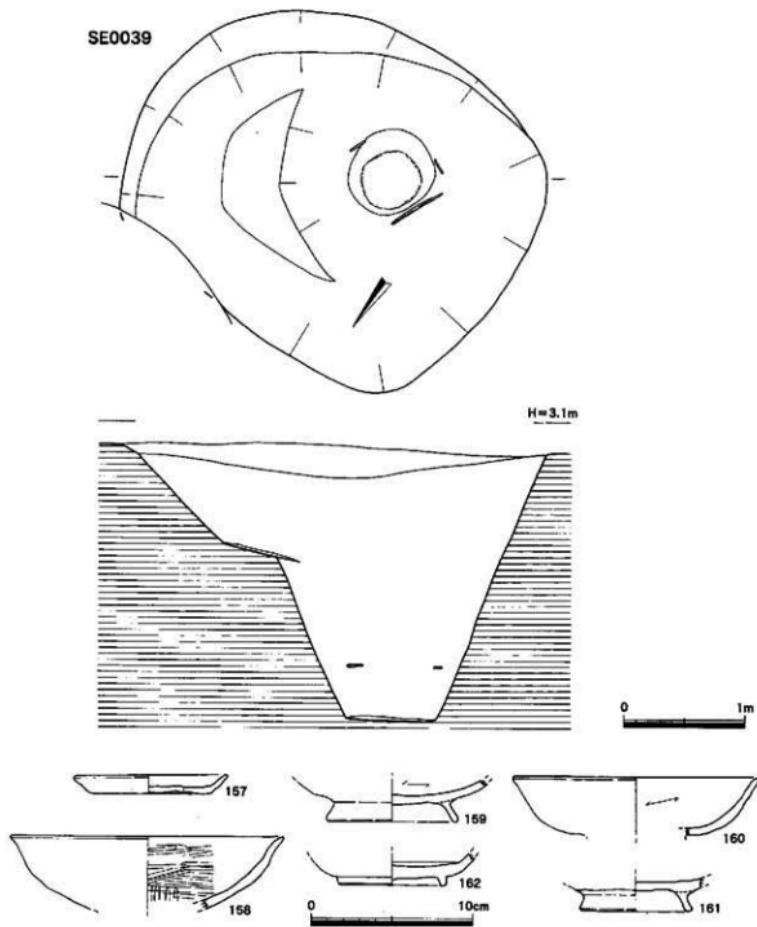
SE0042(第36図) 調査区北西際のC-1・2区で確認した井戸で、SE0043・0045を切る。掘り方の大半は西側の調査区外に延びているが、現況からは、径約5.6mに復元し得る。上面からの深さ約



第33図 SE0038出土遺物実測図 (156は1/4、他は1/3)

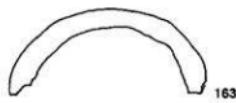
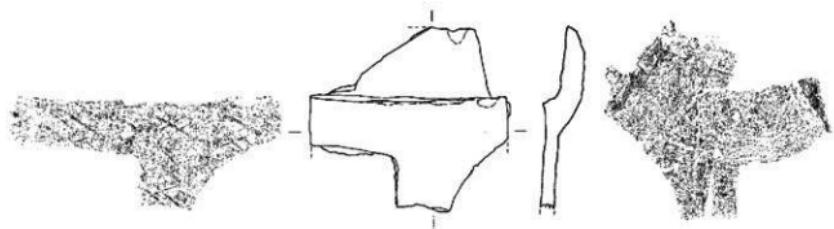
1.9mに平坦面を設け、その北端部の壁面に寄った位置に井筒の下部を掘えるための深さ0.4mを測る円形と推定される掘り込みを有するが、西半部は調査区外に位置している。なお、その上面では木質の腐食した痕跡を確認した。水溜に用いた木桶等が設置されていたものと考えられる。底面の標高は0.7mを測る。

川土遺物(第37図166~180) 166~172は土師器小皿である。いずれも外底部は回転糸切りで、168を除いて板状圧痕を有する。復元口径は8.8~9.8cmを測り、平均は9.2cmである。173~175は回転糸切り底の土師器坏で、175には板状圧痕が認められない。復元口径は順に12.0、13.8、14.0cmを測る。176・177は中国陶器である。176は壺底部で、断面方形の高台が付く。胎土は灰色を呈し、白色砂粒が目立つ。淡オーリーブ灰色の釉を施すが、外面下半以下は露胎で、施釉境界部には目跡が認められる。177は玉縁状の口縁部を呈する盤である。黄灰色の釉が内面から口縁部にかけてかけられる

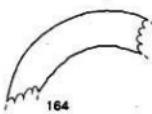
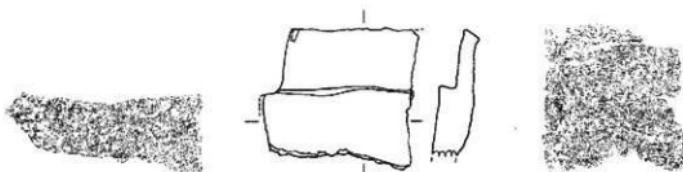


第34図 SE0039実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（1/3）

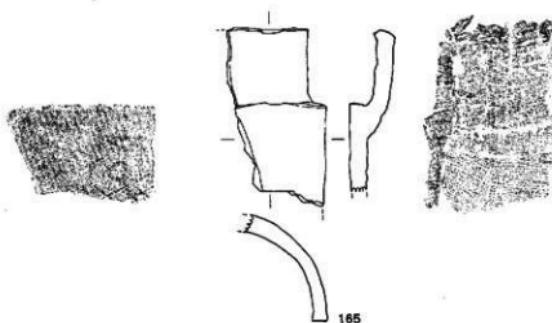
が、口縁部の釉は拭き取り、目跡が残る。体部外面は露胎で、赤褐色を呈する。灰色の胎土には赤褐色および白色の砂粒を多量に含む。178は龍泉窯系青磁碗 I - 1 b類で、口縁部に輪花を有する。緑色の釉を内外面に施す。179は滑石製石錠で、復元口径は25.8cmを測る。口縁下には断面台形の鋸を削り出し、それ以下には煤が付着する。体部外面はノミによる縦方向の削痕が認められ、内面は研磨を施す。180は滑石製の石錠で、端部を欠損する。基部は摘み状に削り出し、縦方向に溝を設けて



163



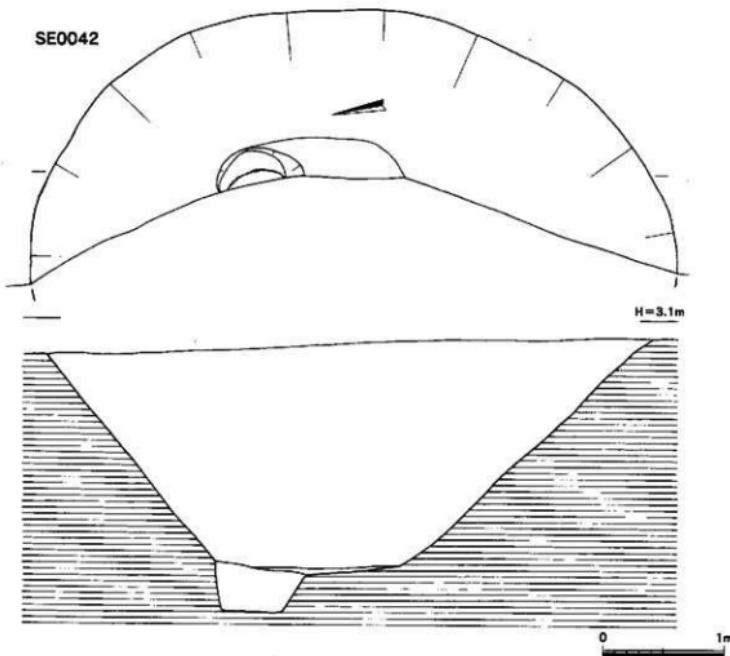
164



165



第35図 SE0039出土遺物実測図（2）（1/4）



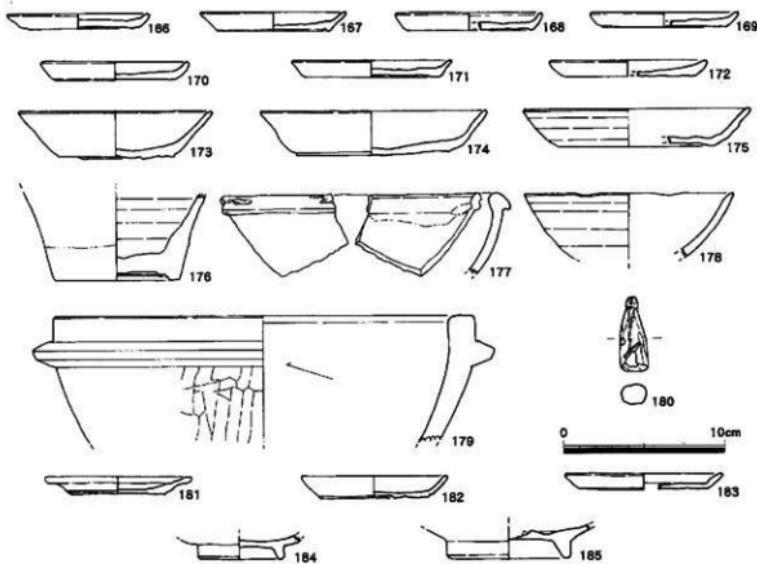
第36図 SE0042実測図 (1 / 40)

いる。他に瓦器、白磁碗類、龍泉窯系青磁碗II類、瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。

SE0043(付図) C-1区の壁面際に位置し、SE0042に切られるため、北東側の一部を確認したにとどまる。また、SE0045を切っている。覆土を0.5m程度掘削し得たが、底面には至らなかった。壁面の傾斜やその規模から井戸と判断した遺構である。

出土遺物(第37図181~185) 181~183は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれにも板状圧痕が認められる。復元口径は順に8.8、8.6、9.6cmを測る。181のみ体部が内湾し、口縁部は肥厚する。184・185は土師器碗である。直立する低い高台を貼付している。外底部はヨコナデ、内底部はナデを施す。他に中国陶器や龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、瓦等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃から後半の井戸に位置付けられる。

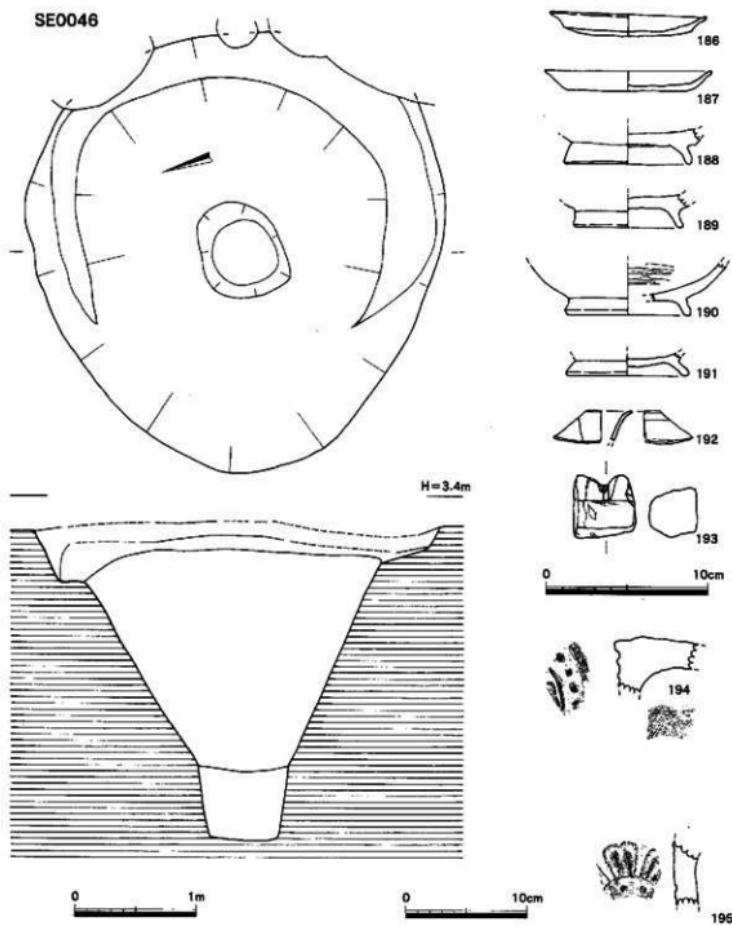
SE0045(付図)C-1・2区で検出した井戸と考えられる遺構であるが、その大半をSE0039-0042-0043に切られ、詳細は不明である。現況からは径約3.5~4mの稍円形プランを呈するものと考えられる。出土遺物はいずれも細片で凶化し得ていないが、回転ヘラ切り底の土師器や格子目叩きの瓦片等がある。各遺構との重複関係から10世紀後半から11世紀中頃以前の遺構に比定される。



第37図 SE0042・0043出土遺物実測図（1/3）

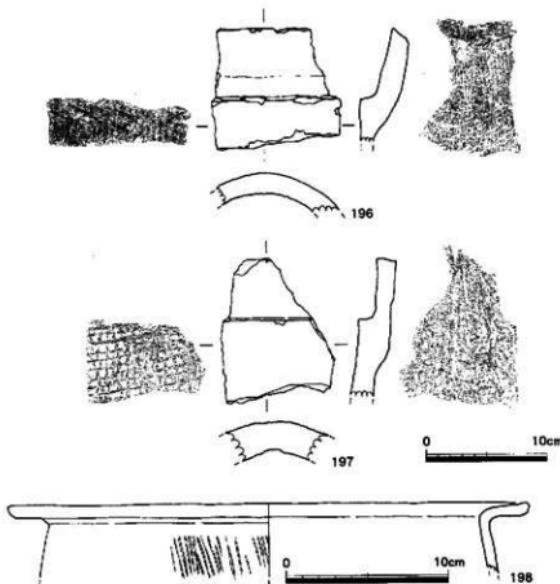
SE0046(第38図) D-2区で確認した円形プランの井戸で、径は3.4~3.6mを測る。壁面上位の東半部に狭いテラスを設け、漏斗状にすばみ、下部で壁面を直立させて掘り込む。その掘り込みは径0.65~0.8mを測る不整な円形を呈し、底面の標高は0.59mである。なお、その内部に木質等は確認できなかった。上面からの深さは2.6mを測る。

出土遺物(第38・39図) 186・187は土師器小皿である。共に回転ヘラ切り底で、板状圧痕を有する。順に口径は9.7、10.2cmを測る。186は完形品である。188・189は土師器碗である。190・191は黒色土器A類碗で、外開きの低い高台を貼付する。内底部にはヘラ研磨が認められる。192は青磁片で、淡緑色釉が施される。器壁は薄く、口縁部が外反する。内面には毛彫の文様の一部が認められる。越州窯系青磁であろうか。193は滑石製の石錠と考えられ、溝状の抉りを有する。194~197は丸瓦で、このうち194・195は軒丸瓦片である。194は幅狭の低い外縁を有し、外区には珠文が巡る。内区との境界には圓線を配し、その内側には複弁蓮華文の先端部が遺存する。凸面は粗い指ナデ、凹面には布目が認められる。195は瓦当の一部で、内区には外側から圓線、複弁蓮華文が配され、中房には細い圓線を挟み、低い珠文が認められる。内面はナデを加えている。196・197は丸瓦片で、共に玉縁部凸面をヨコナデし、凹面に布目が残る。胴部凸面は196では斜格子目の叩きを行った後、横方向ナデを加えているが、197は格子目叩きを残す。198は混入した弥生土器蓋で、「L」字状の口縁部を呈する。胴部外面には刷毛目、口縁部はヨコナデを施す。以上の出土遺物から10世紀後半から11世紀中頃の井戸と考えられる。



第38図 SE0046実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（194・195は1/4、他は1/3）

SE0047(第40図) 調査区の北東側、D-E-2区で検出した井戸で、SX0050を切る。不整な楕円形プランを呈し、長径5.35m、短径4.7mを測る。上面からの深さ2.3mに平坦面を設け、更にそのほぼ中央部に井筒下部を据えるための径0.85m、深さ0.65mの円形の掘り込みを行っている。底面の標高は0.46mを測り、水が僅かに染み出す。その内部には水溜に用いたと考えられる木桶が確認できた。桶は厚さ1～2cm、幅10数cmの板材を22枚組み合わせた径約70cmのもので、高さ約60cmが遺存



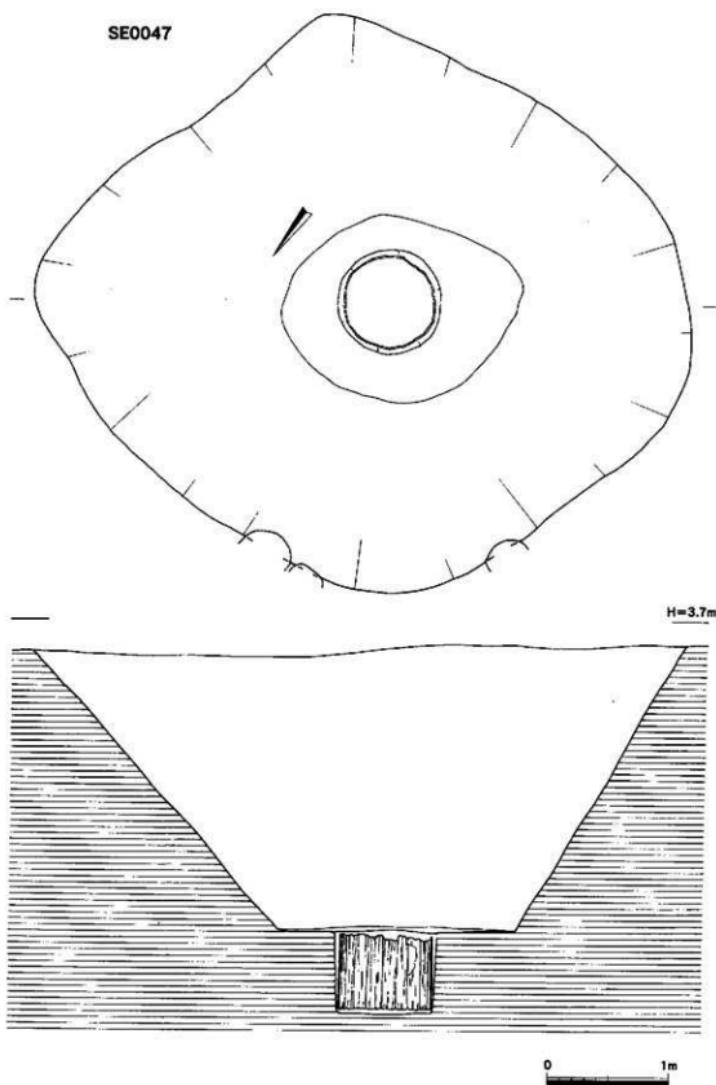
第39図 SE0046出土遺物実測図（2）（198は1/3、他は1/4）

していた。

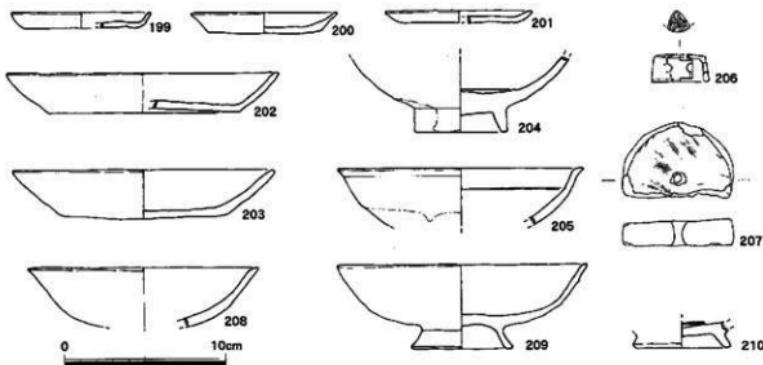
出土遺物(第41図199～207) 199～203は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。199～201は小皿で、復元口径は順に8.5、9.0、8.9cmを測る。202・203は壺で、順に復元口径は16.5、16.0cmを測る。204は白磁碗V類である。胎土は灰白色で、内面および体部外面に施釉され、一部は高台まで垂れる。見込みには段状の沈線が巡る。205は同安窯系青磁碗II類で、内面の口縁下に沈線を配する。胎土は堅緻な灰色で、釉色は光沢のある暗緑色である。体部外面の下半は露胎で、淡赤茶褐色を呈する。206は青白磁の合子蓋である。天井部には壓押しによる円文と草花文を有する。体部には二対の焼成前の穿孔が認められる。釉は外面のみに施されるが、口縁部は口禿で、淡赤褐色を呈する。207は滑石製の円盤状の石鉢で、復元径6.9cm、孔径0.9cmを測る。片面には炭化物の付着が認められる。他に中国陶器、白磁碗IV・IX類、龍泉窯系青磁碗II類等の細片が出土した。以上の出土遺物から13世紀中頃から後半の井戸に位置付けられる。

SE0057(第42図) B-4区の調査区際に確認した井戸で、西半部は調査区外に位置する。現況では径2.5m前後の円形もしくは橢円形プランを呈するものと考えられる。上面からの深さ約1.8mに平坦面を設け、井筒の下部を据えるための円形の掘り込みを有するが、調査区壁面にかかり、詳細は不明である。底面の標高は0.8mを測る。

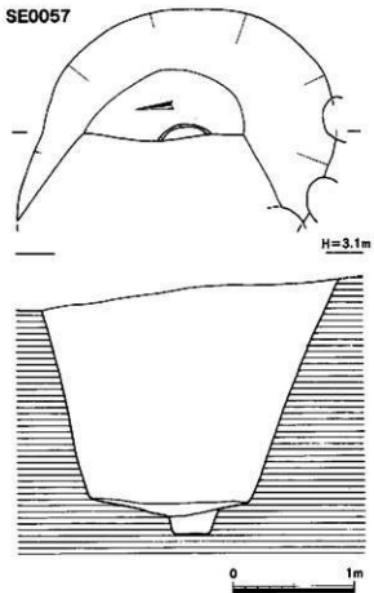
出土遺物(第41図208～210) 208は土師器壺で、復元口径は14.0cmを測る。外底部には回転ヘラ切り痕が残る。209は土師器壺で、径の小振りな高台は細く、外方に開く。210は瓦器楕の底部であ



第40図 SE0047実測図 (1/40)



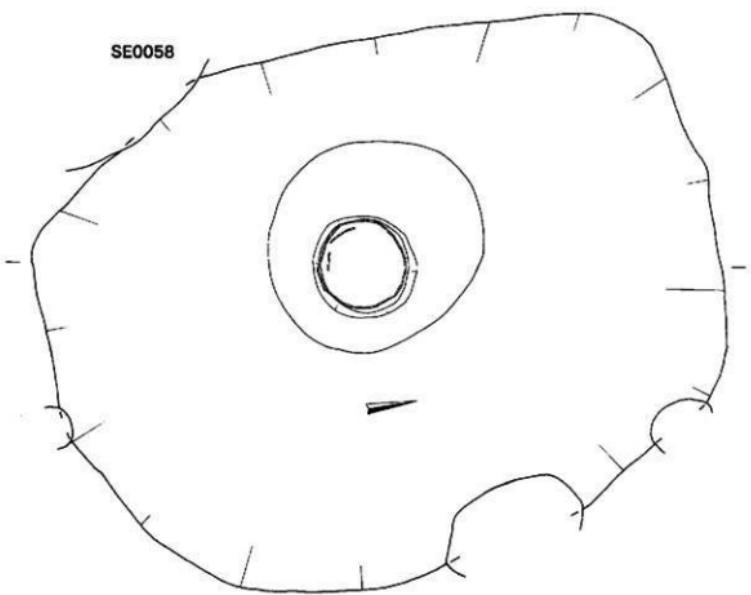
第41図 SE0047・0057出土遺物実測図（1 / 3）



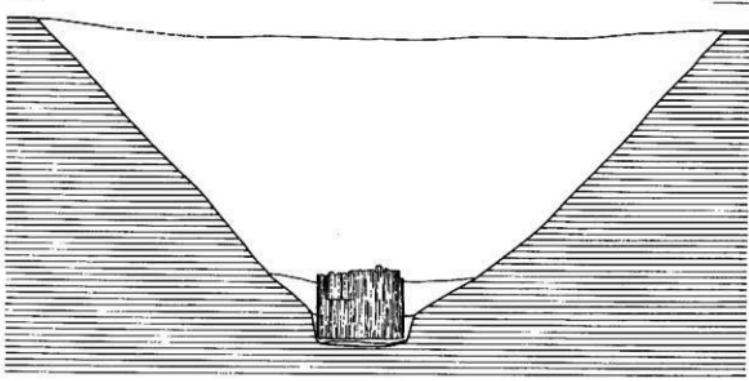
第42図 SE0057実測図（1 / 40）

る。他に土師器小皿や瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から11世紀後半から12世紀前半の井戸と考えられる。

SE0058(第43図) C-3・4区に位置し、SE0060・0062・0063を切る。周辺は本調査区内で井戸の重複が最も著しい。当初の遺構検出時には、西側に複数切り合う井戸群との重複関係が不明瞭であったため、井戸群全体を掘り下げながら、前後関係の把握に努めた。その切り合い関係から本井戸は最も新しい遺構に位置付けられる。平面プランは南北方向に長い梢円形を呈し、長径5.5m、短径4.4mを測る。壁面は漏斗状にすぼみ、底面付近で直立して掘り込まれる。その掘り込みは径0.85m、深さ0.25mを測り、その内部には木桶が上下二段にわたり確認できた。下段の外側に据え付けられた水溜用の桶は厚さ2cm前後、幅10数cmの板材23枚を用いたもので、径は約70cmを測る。また、幅数cmのタガが上下2箇所に認められた。上段の内側の桶は厚さ約1cmの板材が4枚しか遺存していないかった。なお、底面の標高は0.56mを測り、湧水は認められなかった。

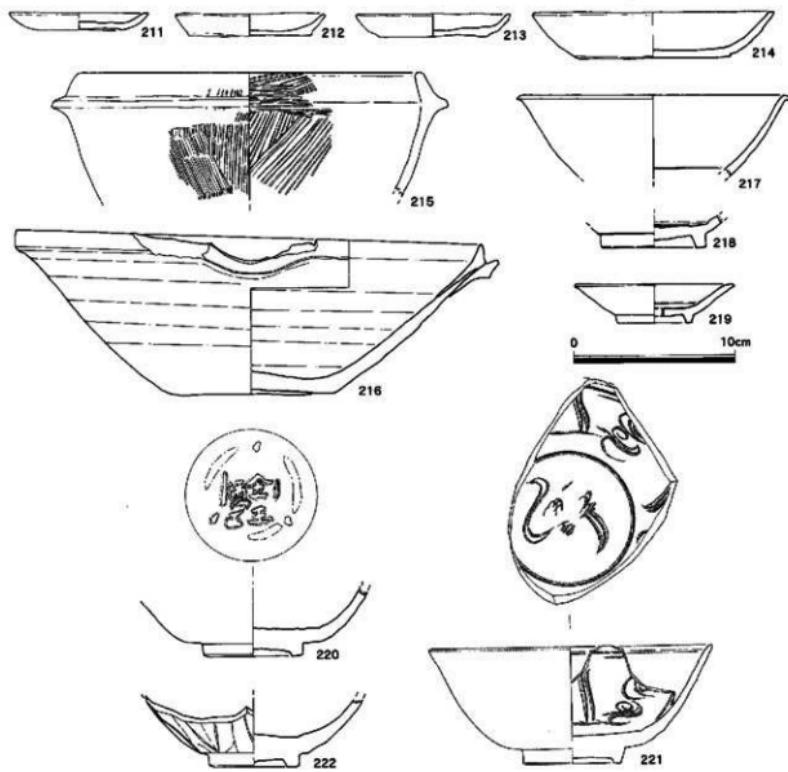


H = 3.4m



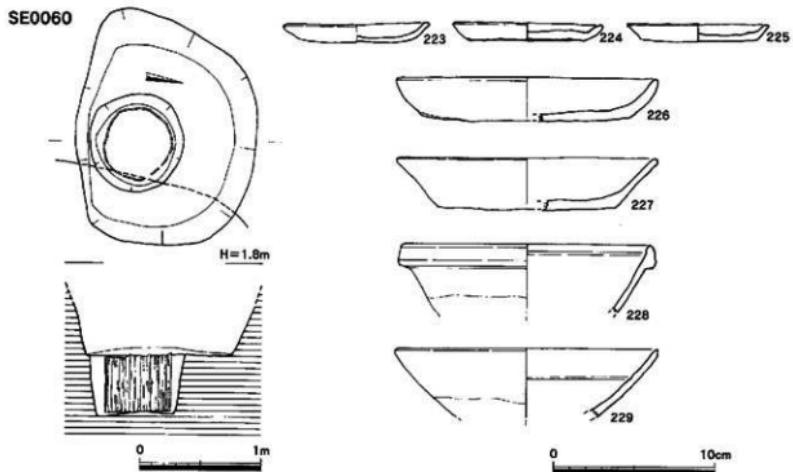
0 1m

第43図 SE0058実測図 (1 / 40)



第44図 SE0058出土遺物実測図（1/3）

出土遺物(第44図) 211～213は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕を有する。復元口径は順に8.5、9.2、9.4cmを測る。214は復元口径14.8cmを測る土師器坏で、外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。215は土師質鍋で、体部上半に断面台形状の鉗が巡り、口縁部は内傾する。鉗から口縁部外面にはヨコナデを加えるが、他は刷毛目調整を行う。鉗以下には煤が付着する。216は東播系の須恵質片口鉢で、口径は28.5cmを測る。大きく開く体部に、尖り気味に直立させる口縁部が付く。器面にはヨコナデを施し、内面には凹凸が認められる。外底部にはナデを行うが、回転糸切り痕が残る。217～219は白磁である。217は碗V-4 aもしくは皿I-1(3)類で、短く屈折する口縁部を呈する。外面にビンホールが多い。218は見込みの釉を輪状に掛けた碗V-2(3)類で、目跡を残す。外面は露胎で、釉は綠味がある。219は皿III-1類で、体部外面の下半以下には施釉されない。220～221は龍泉窯系青磁で、内面および高台外面に施釉される。220は碗I-1 c類で、見



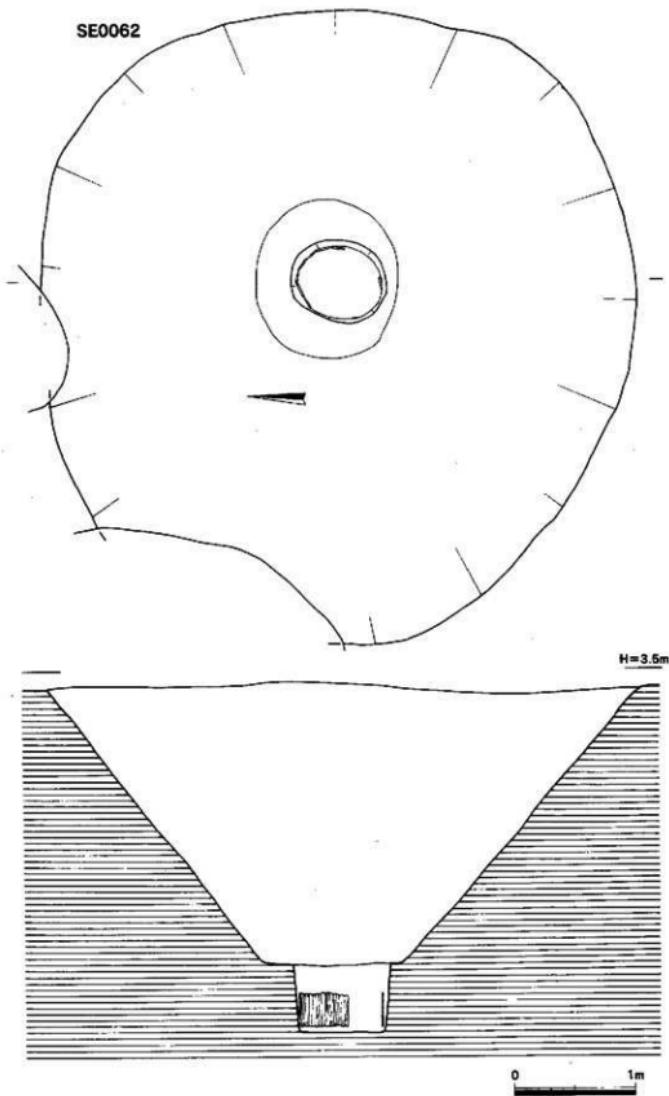
第45図 SE0060実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

込みには不鮮明であるが、「金玉満堂」の文字印が陰刻でスタンプされる。221は片彫りによって、内面に縦方向の区分線を設け、文様を施す碗Ⅰ-4類である。222は碗Ⅱ-b類で、外面に錦蓮弁文を有し、見込みには幅広の沈線が巡る。他に瓦器、中国陶器、白磁碗IV類等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀前半の遺構に比定される。

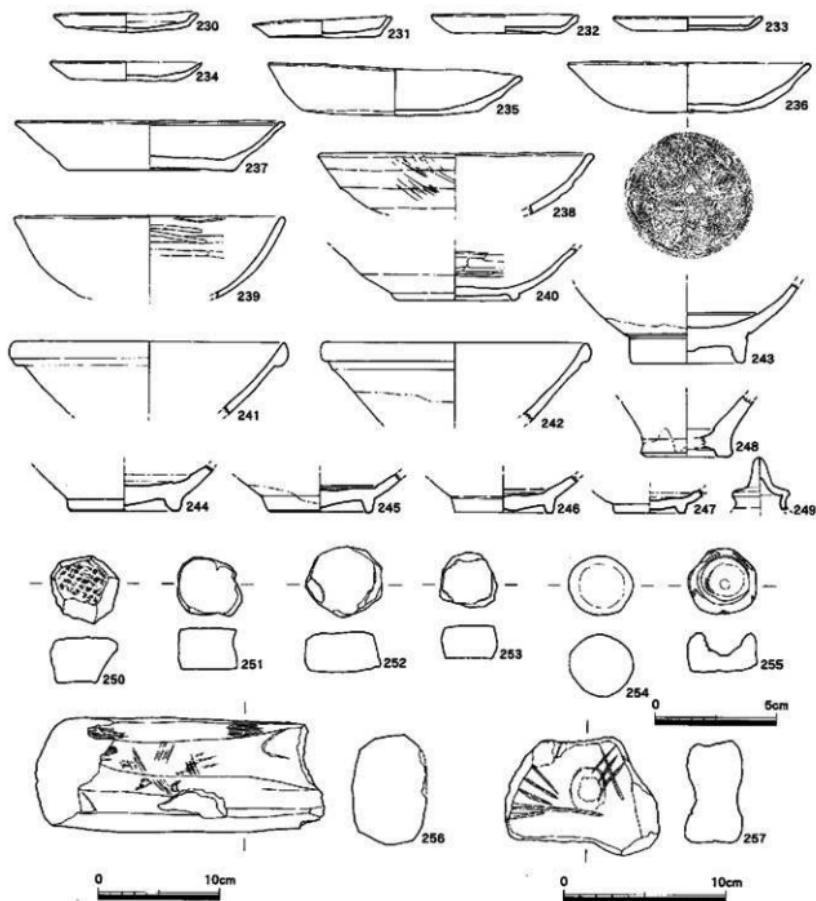
SE0060(第45図) C-3・4区に位置する井戸で、SE0058に切られ、SE0063・0066・0067を切る。南接するSE0063と同一遺構であるとの認識で遺構の掘り下げを進めたが、底面近くで、両者は切り合ひ関係にあることが判明した。よって、遺構の平面プランや規模は不明で、また、凶化は重複が判明したレベルで行っている。底面付近に設けた狭い平垣面の南側寄りに、井筒の下部を据える径約0.8m、深さ0.5mの円形の掘り込みを有し、その内部には厚さ約1cm、幅10cm前後の板材を用いた径約55cmの木桶を検出した。底面の標高は0.58mを測り、湧水は認められなかった。

出土遺物(第45図) 223～225は同転糸切り底の土師器小皿である。順に復元口径は9.0、9.2、8.7cmを測り、223を除いて板状圧痕を有する。226・227は七師器坏で、外底部は回転糸切りである。227には板状圧痕が認められる。復元口径は共に16.0cmを測る。228は白磁碗IV類で、体部外面の下半以下は露胎である。229は同安窯系青磁碗I類で、内面の上位に細い沈線が巡る。他に瓦器や瓦等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE0062(第46図) C-D-4区で検出した。SE0058に切られ、SE0068を切る。遺構検出当初は東接するSE0068との前後関係が判然とせず、両遺構を同時に遺構面から0.3m程度下げた面で前後関係を把握した。平面プランは円形を呈し、径約5.0mを測る井戸で、上面からの深さ2.3mのほぼ中央部に狭い平坦面を設け、更に径0.7～0.8m、深さ0.55mの円形の掘り込みを行っている。その内部には厚さ約1cm、幅10cm前後の板材を用いた木桶の一部が高さ約30cm遺存しており、径は60～70cmに復元し得る。なお、底面の標高は0.52mを測り、湧水は認められなかった。

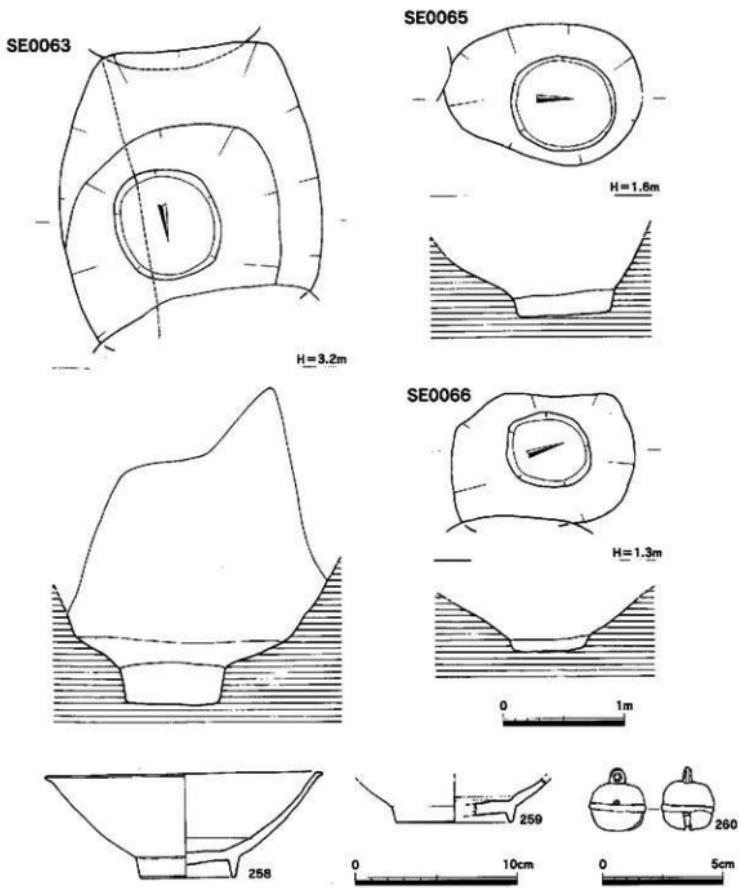


第46図 SE0062実測図 (1 / 40)



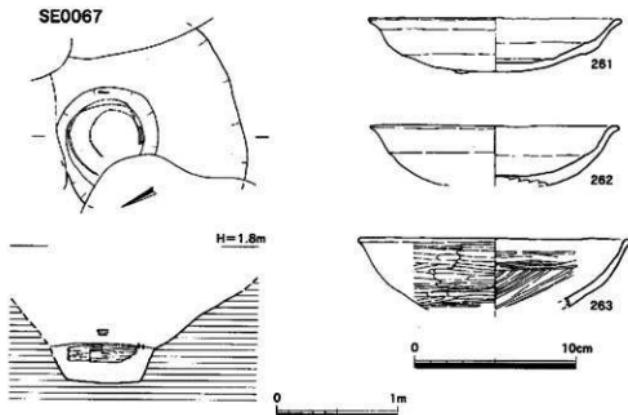
第47図 SF0062出土遺物実測図 (250~255は1/2.256は1/4、他は1/3)

出土遺物(第47図) 230~234は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径は8.4~9.3cmを測り、平均は8.9cmである。235~238は土師器壺である。復元口径は14.8~16.9cmで、平均は16.0cmを測る。235・237の外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。236の外底部にはナデを加え、爪状の工具により放射状および弧状に施文がなされる。238の外面にはヘラ状工具による斜方向の沈線が複数認められる。239・240は瓦器楕で、共にヨコナデ、ヘラ研磨により平滑な器面を呈する。240には断面台形状の低い高台を貼付する。241~248は白磁で、この



第48図 SE0063-0065-0066実測図（1/40）およびSE0063出土遺物実測図（260は1/2、他は1/3）

うち241～246は碗である。241・242は正縁状の口縁を呈する碗IV類で、242の内面には綫方向の帯状に暗赤褐色を呈する箇所が認められる。243は碗V類で、見込みには沈線を施す。釉は黄白色を呈し、高台際まで施釉される。244・245は見込みの釉を輪状に搔き取る碗Ⅵ類で、245の釉色は紺味がある。246は碗Ⅶ類で、小振りな見込みの外周には沈線上の段が巡る。高台まで施釉がおよぶ。247は皿III-1類で、見込みの釉を輪状に搔き取っている。248は蓋皿類で、高台端部外面は斜方向に削りを行う。高台まで、オリーブ灰色の釉がかけられる。249は円錐形の摘みを有する中国陶器の小形蓋である。緻密な胎土は灰色を呈し、外面にはにぶいオリーブ灰色の釉が施される。250～253は井



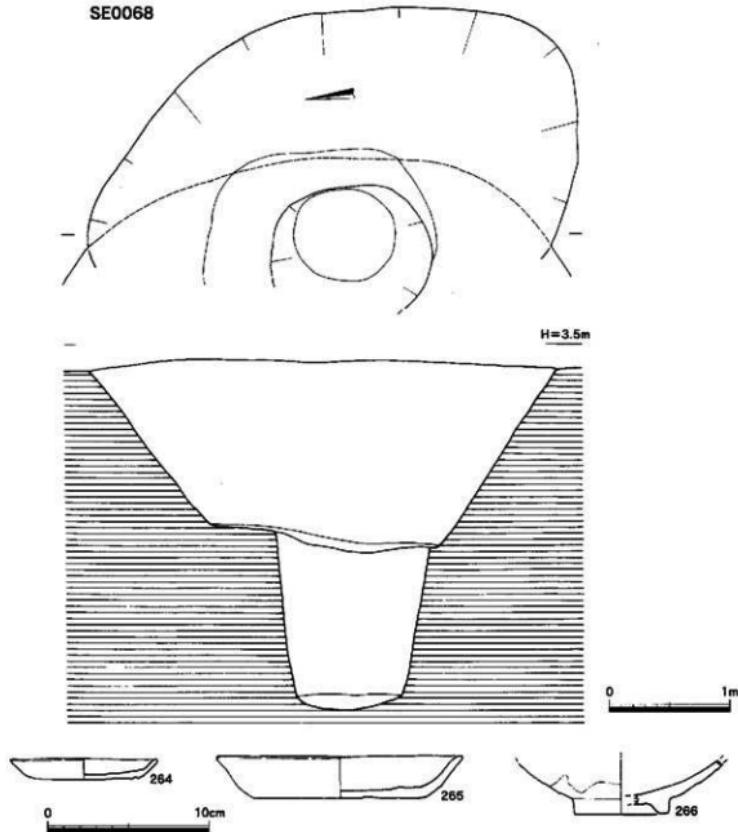
第49図 SE0067実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

筒から出土した瓦豆で、平瓦を打欠き、整形したものである。250・253は灰褐色、他は黄橙色を呈する。254は径2.5cm前後を測る土球である。255は滑石製の小形容器で、粗い削りを行った後、研磨を施している。口径2.0cm、器高1.6cmを測る。256は滑石の素材であろう。面取りがなされ、横断面は多角形を呈する。ノミによる削痕が認められるが、緩く研磨を加えている。裏面は火受けによる破損がみられる。257は砂岩製の砥石で、溝状の削痕が残る。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸に位置付けられる。

SE0063(第48図) C-4区で確認した井戸で、SE0058・0060に切られ、SE0067を切る。SE0060の項で前述したが、調査当初は北接するSE0060と同一構造であるとの認識で構造の掘り下げを進めた。しかし、底面近くで、両者は切り合い関係にあることが判明したことにより、従来の構造平面プランや規模は不明である。また、固化は重複が判明したレベルで行っている。上面から漏斗状に掘り込まれるものと推測されるが、底面付近に段を有し、更に井筒の下部を据え付けるための径0.9m、深さ0.35mの円形の掘り込みをもつ。その内部に木質等は確認できなかった。底面の標高は0.46mを測り、湧水はない。

出土遺物(第48図) いずれも底面の井筒掘り込み内から出土した遺物で、このうち258・259は白磁である。258は完存する碗V-4a類で、口縁部上面は水平な面をなす。見込みには沈線が巡り、体部の内外面には釉垂れが認められる。259は碗V-2もしくは3類である。見込みの釉を輪状に抜き取っている。260は完形の青銅製鉢で、高さ2.5cmを測る。頭部には偏平な鉢を有し、径0.3cmの円形の孔をもつ。体部中央部に1条の鈍い突帯を鋲出し、突帯下には鉢と平行する方向に幅0.2cmの切口を有する。体内には長径0.7cm、短径0.5cmの楕円形を呈する鳴玉を入れている。他に回転糸切り底の土器飾や龍泉窯系青磁等の細片が出土した。これらの遺物や重複関係から12世紀中頃から後半の井戸と考えられる。

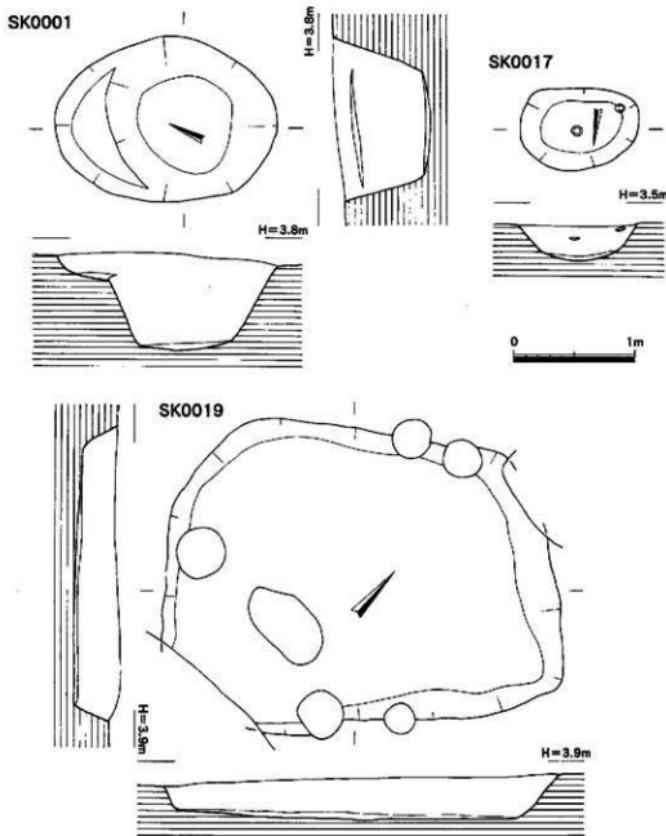
SE0065(第48図) C-3区に位置する井戸で、検出当初は隣接するSE0066・0067と同一構造であると考え、全体の掘り下げを進めた結果、底面付近で3基の重複であることが判明した。よって、



第50図 SE0068実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

従来の遺構平面プランや規模は不明で、個別の図化もそのレベルで実施した。SE0066とは平面的な位置関係から重複関係にあるものと考えられるが、前後関係は判然としなかった。上面から漏斗状に掘り込まれるものと考えられ、底面には井筒の下部を据えるための径0.8m、深さ0.2mの浅い円形の掘り込みを有する。底面の標高は0.6mを測り、湧水は認められなかった。出土遺物には土師器や瓦器、白磁等の細片が少量あるのみで、図化し得なかった。

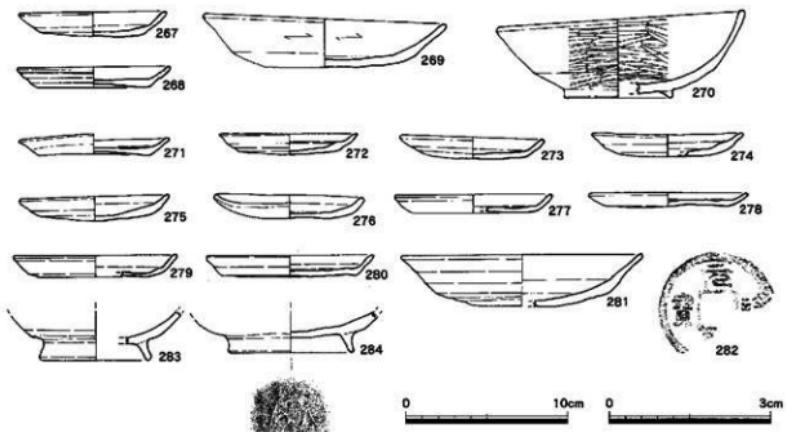
SE0066(第48図) C-3区で検出したSE0060に切られる井戸である。確認状況は前述のSE0065の項とのおりである。上面から漏斗状にすばむ断面形態を呈するものと考えられ、底面には井筒下部を据える径0.6m、深さ0.1mの浅い円形の掘り込みが認められた。底面の標高は0.56mで、湧水はない。



第51図 SK0001・0017・0019実測図（1/40）

い。出土遺物には回転ヘラ切り底の土師器、黒色土器等が少量あるが、図化し得ない細片である。

SE0067(第49図) C-3・4区に位置する井戸で、確認状況は前述したSE0065の項のとおりである。SE0060・0063・0066および西側のコンクリート製井戸に切られ、切り合い関係から、周辺の井戸群中で最も古い時期に位置付けられる。上面から漏斗状にすばみ、底面には径0.9m前後、深さ0.35mの不整な円形の掘り込みを有する。その内部には保存状況不良ながら、板材および曲物が2段分遺存していた。出土状況から水溜である曲物の周囲を横桟材で方形に囲み、縦板材で固定する構造の井側であると考えられる。曲物は内側が径約40cm、外側が径約60cmを測る。なお、底面の標高は0.65mを測り、湧水は認められなかった。



第52図 SK0001-0017-0019出土遺物実測図 (282は1/1. 他は1/3)

出土遺物(第49図) 261・262は土師器壊である。261は回転ヘラ切り底で、板状圧痕を有する。体部中位に緩い稜をもち、口縁部を外反させる。口径は15.5cmを測る。262も261と類似した器形を呈し、復元口径は15.2cmを測る。外底部は火受けによると推定される破損が認められる。また、口縁部外面には幅約2cmの帯状に煤が付着する。263は黒色土器A類で、口縁部を緩く外反させ、端部は丸く納める。内外面に丁寧なヘラ研磨を施す。これらの川土遺物から11世紀代の井戸と考えられる。

SE0068(第50図) D-4区で検出したSE0062に西側を切られる井戸である。壁面の中位に平坦面を設け、その南側寄りに径1.3m、深さ1.5mの円形の掘り込みを有する。その内縁は淡黒褐色砂質土を主体とし、木質は遺存していない。底面の標高は0.57mを測り、湧水しない。

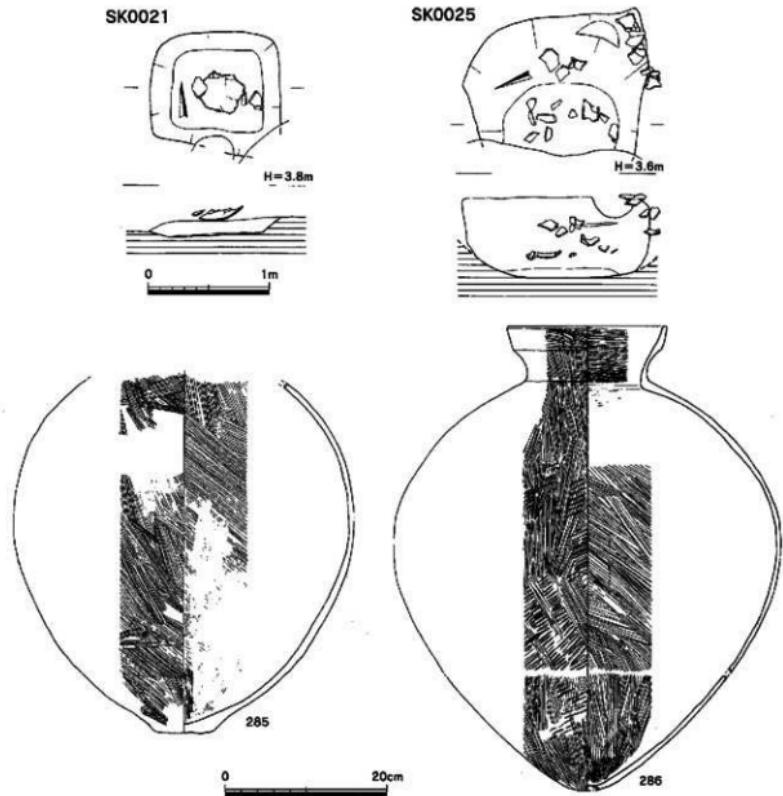
出土遺物(第50図) 264・265は共に回転糸切り底の土師器で、板状圧痕を有する。264は小皿で、口径は9.0cmを測る。265は復元口径15.0cmを測る壊である。266は白磁碗で、体部下半まで淡緑白色の釉が薄く施される。他に回転ヘラ切り底の土師器や瓦器、龍泉窯系青磁等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の井戸に位置付けられる。

(4) 土坑 (SK)

検出した土坑の時期は弥生時代後期から古墳時代前期、古代末、中世の3時期に大別される。

SK0001(第51図) 調査区南東端のB-C-9区に位置する。橢円形の平面プランを呈し、長径1.8m、短径1.3mを測る。北側にテラスを有し、断面形は逆台形をなす。深さは0.8mを測り、覆土は暗灰色砂質土を主体とする。

出土遺物(第52図267~270) 267・268は土師器小皿である。267は回転ヘラ切り底、268は回転糸切り底で、共に板状圧痕を有する。口径は順に9.0、9.4cmを測る。269は復元口径14.9cmを測る土師器壊で、外底部は回転ヘラ切りで板状圧痕がある。270は上師器柄で、断面台形状の低い高台を貼付する。体部の内外面にはヘラ研磨を施す。他に瓦器、白磁等の細片が出土した。これらの出土遺物

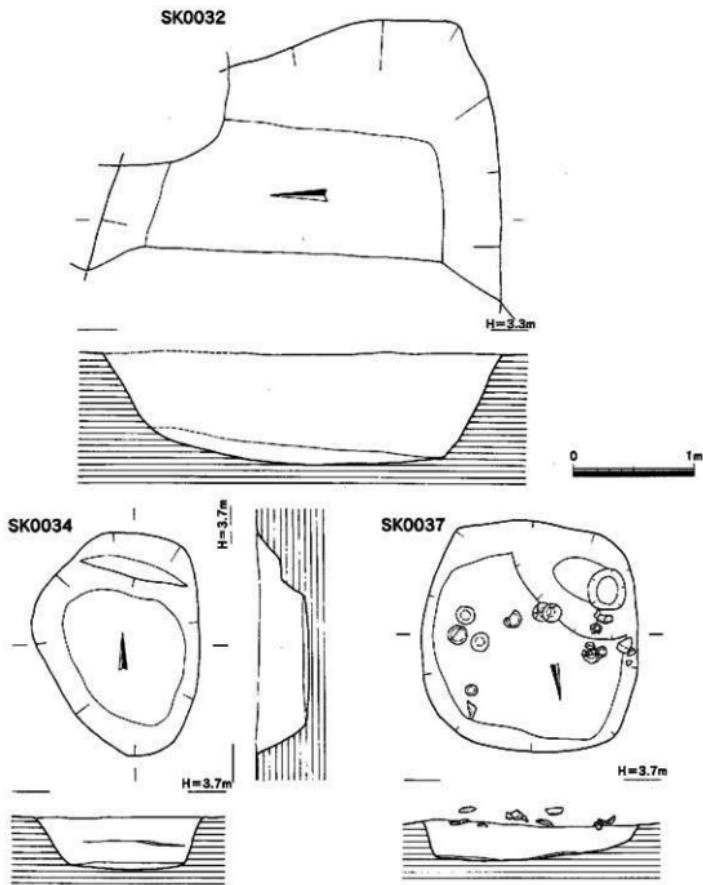


第53図 SK0021・0025実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/6）

から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK0017(第51図) B-6区で検出した小形の不整隅丸方形の土坑で、SD0016を切る。長さ0.95m、幅0.7m、深さ0.3mを測り、断面は船底形を呈する。上層では完形の土師器小皿2点(271・273)が出土した。覆土は黒味のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第52図271～282) 271～280は土師器小皿である。外底部は271のみが回転糸切りで、他は回転ヘラ切りである。また、280のみ板状圧痕が認められない。口径は8.4～10.2cmを測り、平均は9.4cmである。281は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器坏で、復元口径は14.8cmを測る。282は一部を欠損するが、北宋代の銅錢「元祐通寶」(初鑄年:1086年)である。他に瓦器や白磁等の細片が出土した。以上から12世紀中頃の土坑に比定される。

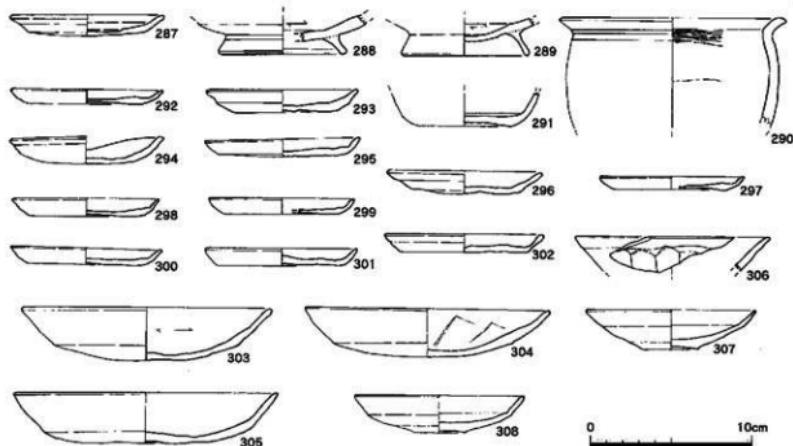


第54図 SK0032・0034・0037実測図 (1 / 40)

SK0019(第51図) D-7・8区で検出した。SE0011およびSX0018に壁面の一部を切られる。隅丸方形プランの竪穴状の土坑で、長さ3.2m、幅2.4m測り、底面はほぼ平坦である。深さは0.35mを測る。底面上ではこの土坑に伴うピット状の遺構は確認できなかった。

出土遺物(第52図283・284) 共に上師器柄で、断面方形形状の細い高台を貼付する。284の外底部には「×」のヘラ記号を有する。他にも土師器が出土したが、いずれも細片である。11世紀代の遺構であろう。

SK0021(第53図) B-C-7に位置する隅丸方形の十坑で、SE0015南東端を切られる。一辺は約



第55図 SK0032-0034出土遺物実測図（1/3）

1.0mで、深さは0.1mと浅い。底面から浮いた状態で、底部および体部の1/3程度が残存する弥生土器壺(285)が確認できた。出土状況から水平埋設された十器棺の上半が削平された可能性がある。

出土遺物(第53図285) 頸部から口縁部を欠損する弥生土器壺で、直口もしくは外反する口縁部が付くものと考えられる。底部は狭い平底であるが、胴部との境界には明瞭な稜はない。卵形を呈する胴部の中位に最大径を有し、頸部に向かってすばむ。器面の一部には風化がみられるが、底部も含め刷毛目調整を施している。弥生時代後期中頃の遺構と考えられる。

SK0025(第53図) C-6・7区において確認した土坑で、SE0014に西側を切られる。壁面の南東部に小規模なテラスを有し、深さ0.65mを測る。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、炭化物を少量含む。また、土師器の複合口縁壺(286)が破片の状態で出土した。

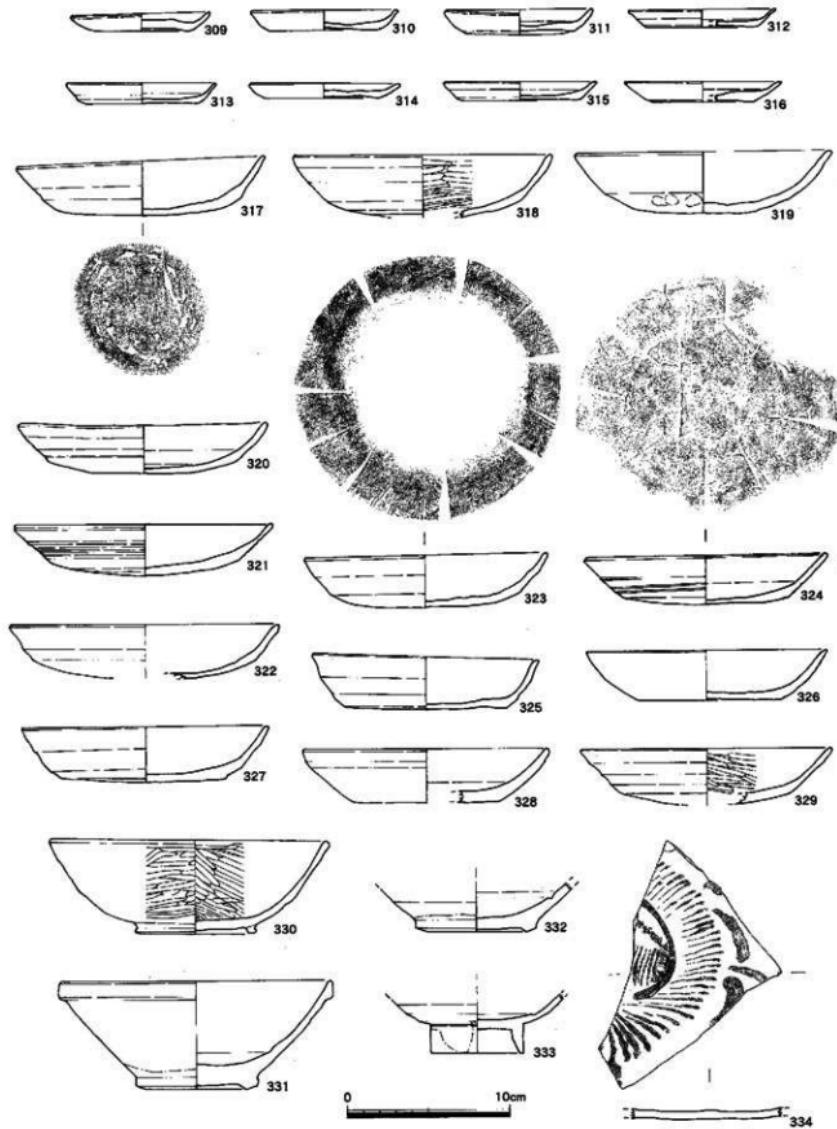
出土遺物(第53図286) 大半の破片が接合でき、個体の約2/3が遺存する。体部下半部には直接の接合面がないが、調整や胎土、色調等から同一個体と考えられることから図上での復元を行った。

口径19.6cm、推定器高58.1cmを測る。底部は尖底気味の丸底で、胴部最大部が大きく張る。頸部に向かって大きくすばみ、短い頸部に複合口縁部が付く。口縁屈曲部の外面の稜は緩く、上部は小さく聞く。内外面には刷毛目調整を行うが、胴部外面には斜方向の叩き目が残る。また、肩部内面は刷毛目をナデ消す。古墳時代前期の土坑に位置付けられる。

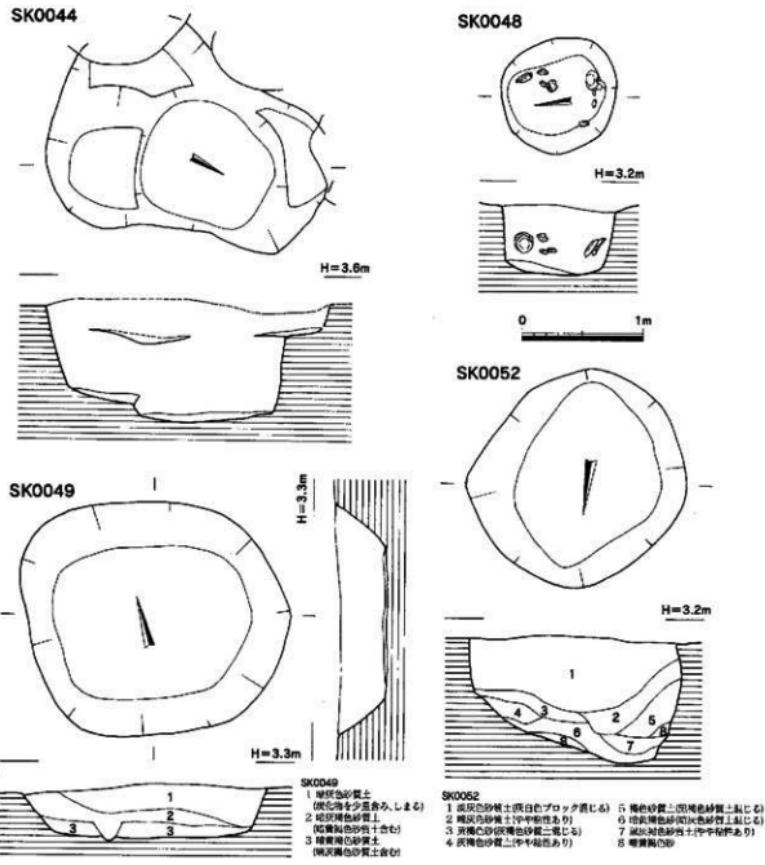
SK0032(第54図) B-5区の壁面際に位置するため、西側は調査区外に延びる。南北幅3.3m、深さ0.9mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は淡褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第55図287~291) 287は口径9.4cmを測る土師器小皿である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。288・289は黒色土器A類の椀で、共に細い高台を付す。290は土師器壺で、外面の上半には煤が付着する。291は白磁皿で、外底部の釉を削り取る。貴人が認められる。他に黒色土器B類、瓦等の細片が出土した。以上の川上遺物から11世紀中頃から後半に位置付けられる。

SK0034(第54図) D-4区で検出したSK0672を切る土坑で、不整な楕円形プランを呈する。長径



第56図 SK0037出土遺物実測図 (1 / 3)

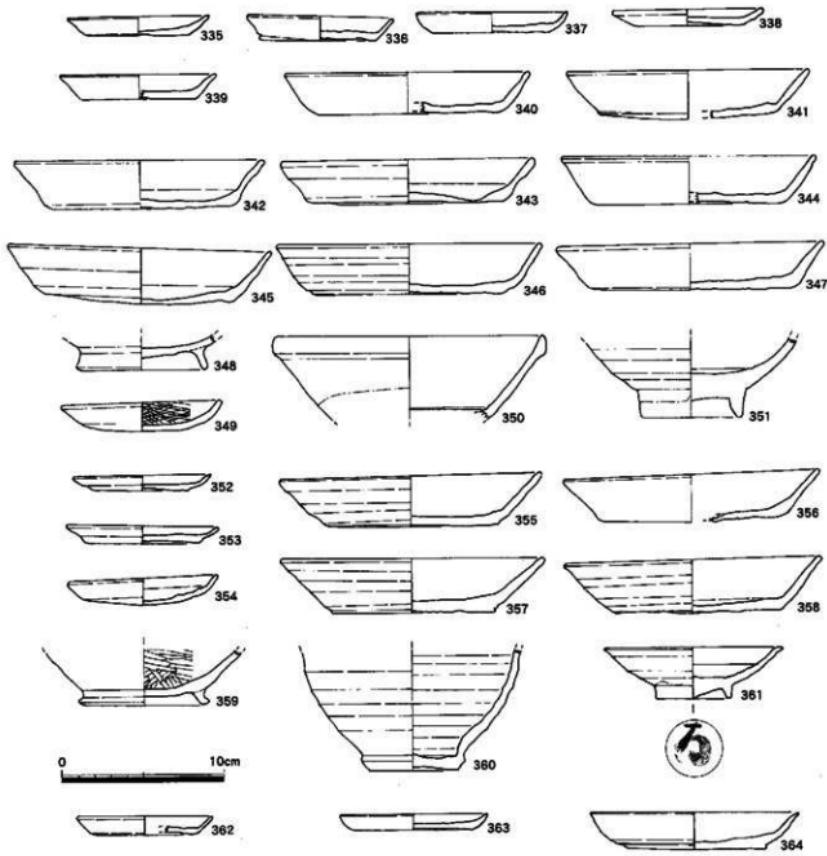


第57図 SK0044-0048-0049-0052実測図 (1 / 40)

1.8m、短径1.4m、深さ0.4mを測り、北側の壁面中位にテラスを有する。

出土遺物(第55図292~308) 292~302は土師器小皿である。口径は8.9~9.8cmを測り、平均は9.3cmである。外底部は292~296が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、いずれも板状圧痕が認められる。303~305は土師器坏で、口径は順に15.2、15.1、16.0cmを測る。303は回転ヘラ切り底で、他は回転糸切りである。303を除いて板状圧痕を有する。304の内面にはコテ当て痕が残る。306は青白磁の碗で、外面に蓮弁文を施す。307・308は白磁皿である。307は皿VI-1 a類、308は皿VII-1 a類で、共に体部外面の下半は露胎である。以上から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK0037(第54図) 調査区北東のE-1・2区で検出したSK0753を切る隅丸方形の土坑で、一辺約

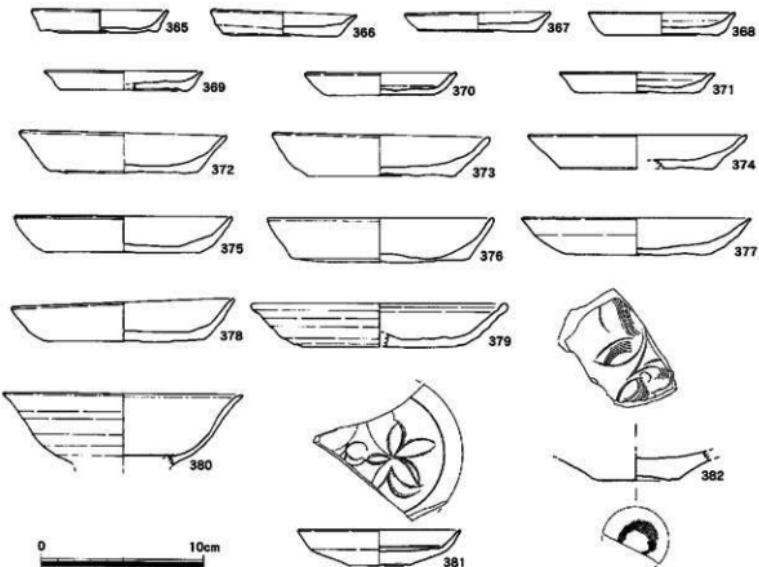


第58図 SK0044-0048-0049出土遺物実測図 (1 / 3)

1.8~1.9mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは0.3mを測る。南西コーナー部は0.1m程度一段下がり、更に深さ0.2mのピット状の掘り込みが検出された。覆土は黒褐色砂質土に黄褐色砂が混じる。上層は粘性のある砂質土で、完形に近い遺物群が出土した。

出土遺物(第56図) 309~316は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.6~9.7cmを測り、平均は9.2cmである。311・316を除いて板状圧痕を有する。317~329は土師器坏である。外底部は317~324が回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。口径は13.9~16.6cmで、平均は15.3cmを測る。

317の外底部には爪状の刺突が円形に巡る。323の体部内面にはヘラ描きによる文様を有する。324の内面には放射状のナデを施す。330は瓦器楕で、内外面にヘラ研磨調整を行う。331~333は白磁



第59図 SK0052出土遺物実測図（1/3）

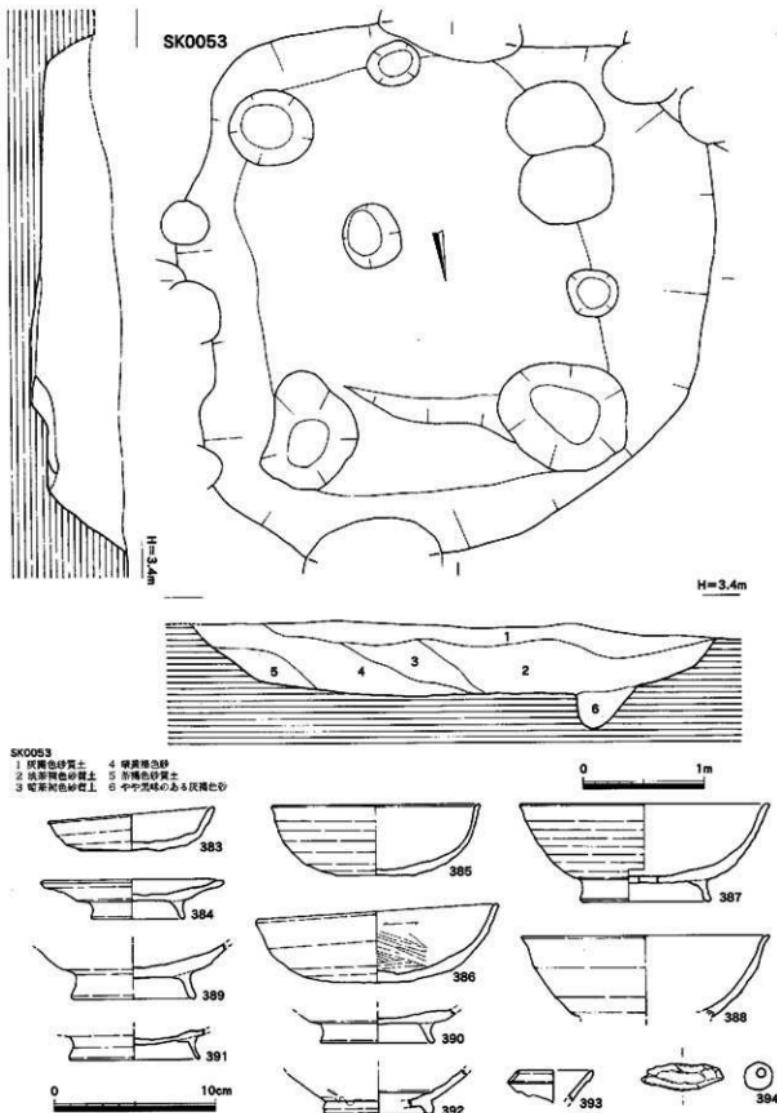
碗である。331・332は碗IV-1a類、333は碗V類である。334は中国陶器の盤で、内底部には黄釉を施し、鉄絵で花文を描く。胎土は粗く、灰色を呈する。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK0044(第57図) E-1・2区に位置する。壁面を攪乱やビット等に切られるが、不整な隅丸方形を呈するものと考えられ、長さ2.3m、幅1.6mを測る。壁面の3箇所にはテラスを有し、深さは1.0mを測る。覆土は粘性のある暗褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が網状に混じる。

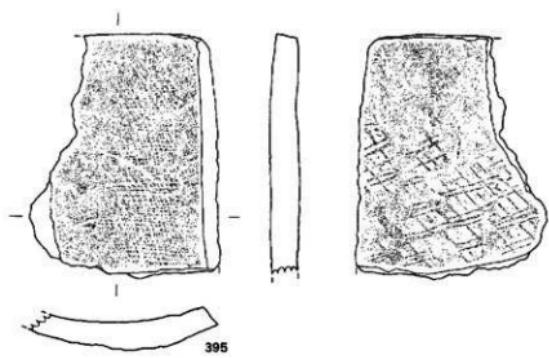
出土遺物(第58図335～351) 335～339は回転糸切り底の上師器小皿で、いずれも板状圧痕を有する。口径は8.7～9.6cmを測り、平均は9.2cmである。339の内面には赤色顔料が塗布される。340～347は土師器壺である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。口径は15.0～16.4cmで、平均は15.7cmを測る。348は土師器楕で、内面はヘラ研磨により平滑に仕上げる。349は瓦器皿で、外底部には回転糸切り痕を残す。350・351は白磁碗である。350は碗IV類、351は碗V類で、見込みには段状の沈線を配する。他に中国陶器、須恵質土器、少量の同安窯系青磁の細片が出上した。これらから12世紀後半の遺構と考えられる。

SK0048(第57図) C-1・2区で確認した小形の土坑で、不整な隅丸方形を呈する。長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。壁面は直立気味に掘り込まれる。土坑内には土師器を主体とする遺物が発見された状態で出土した。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、粘性がある。

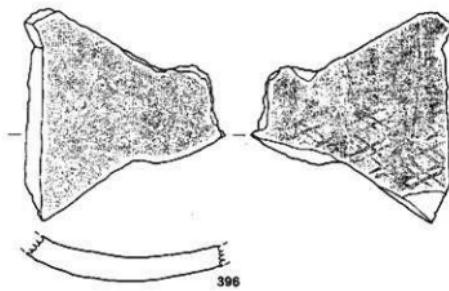
出土遺物(第58図352～361) 352～354は土師器小皿で、順に口径は8.5、9.4、9.3cmを測る。



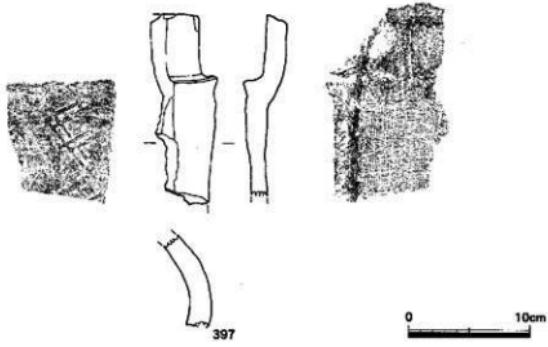
第60図 SK0053実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（1/3）



395



396



0 10cm

第61図 SK0053出土遺物実測図（2）（1/4）

352・353は回転糸切り底、354は回転ヘラ切りで、いずれも板状圧痕を有する。355～358は板状圧痕をもつ回転糸切り底の土師器坏である。口径は15.8～16.1cmを測り、平均は16.0cmである。359は黒色土器A類の碗である。内面にはヘラ研磨を施す。360は中国陶器の壺で、内外面共に施釉されない。胎土には白色砂粒を多量に含み、器面は暗赤褐色を呈する。361は白磁皿III-1類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。外底部には墨書きが記される。他に白磁碗IV類、瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構に比定される。

SK0049(第57図) C-2区で検出した。やや不整な隅丸方形を呈し、長さ2.2m、幅1.9m、深さ0.45mを測る。断面は逆台形をなし、底面がほぼ平坦である。覆土は築成に自然堆積する。

出土遺物(第58図362～364) いずれも板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。362・363は小皿で、復元口径は順に8.4、9.0cmである。365は口径12.8cmを測る壺である。他に白磁や龍泉窯系青磁等の細片が少量出土した。これらから13世紀代の土坑と考えられる。

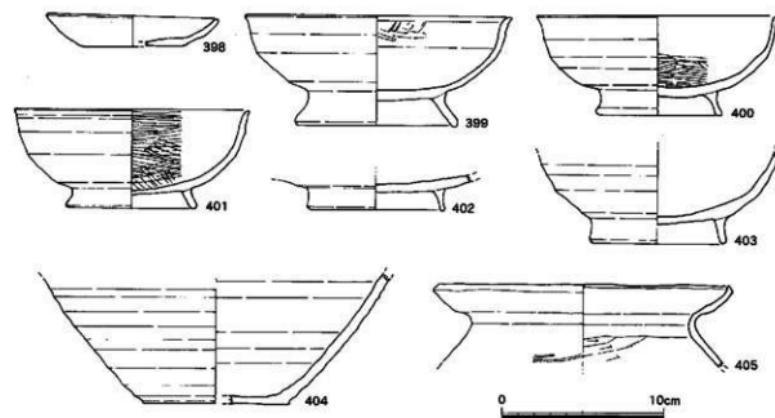
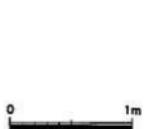
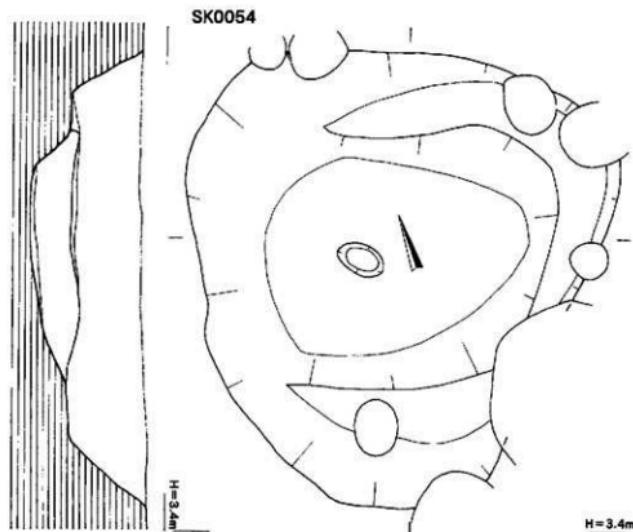
SK0052(第57図) 調査区西壁際のC-2区に位置する一辺1.6～1.7mを測る隅丸方形の土坑で、底面は西側に傾斜し、深さは1.0mを測る。

出土遺物(第59図) 365～371は回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は8.0～9.6cmを測り、平均は9.1cmである。368・369を除いて板状圧痕を有する。372～379は土師器坏で、いずれも外底部は回転糸切りである。379のみ板状圧痕がない。復元口径は12.7～15.6cmで、平均は13.8cmを測る。380は口縁部口禿げの白磁碗IX-1類で、見込みに沈線が巡る。381・382は龍泉窯系青磁皿である。381は皿I-1b類で、見込みに片彫りによる花文を施す。釉は緑白色で、外底部は露胎である。382は皿I-1c類である。底部は厚味があり、見込みにはヘラおよび櫛状工具による施文を有する。外底部には「〇」が墨書きで記される。他に中国陶器や白磁碗IV・V類が出土している。これらの出土遺物から13世紀後半の遺構に位置付けられる。

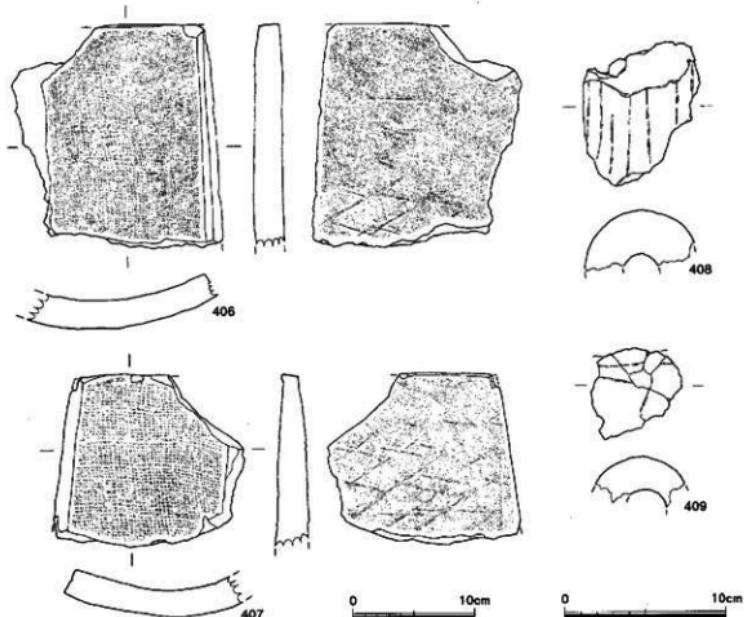
SK0053(第60図) D-2・3に位置し、SK0054に切られる。不整な隅丸方形を呈する堅穴状の土坑で、一辺は約4.5mを測る。壁面の傾斜は緩く、深さは約0.6mを測る。北側にはテラスを有し、深さ0.1～0.2mの浅いピット状の掘り込みが確認できた。また、底面上では深さ0.2～0.4mのピットを4基検出している。

出土遺物(第60・61図) 383は口径10.2cmを測る土師器小皿である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。384は高台を貼付する土師器小皿cである。385・386は回転ヘラ切り底の土師器坏で、共に板状圧痕はない。口径は順に12.8、14.9cmを測る。385は口縁部上面に平坦面を有する。387～390は土師器碗で、口縁部を緩く外反させる。高台はやや高日の細い形態を呈する。387の底部中央には焼成前の径約1cmの穿孔が認められる。391は黒色土器A類碗で、外底部には回転ヘラ切り痕を残す。内面はヘラ研磨を施し、「井」のヘラ記号を有する。392・393は白磁である。392は碗もしくはX-I類で、外面には短い押圧縦線を有する。高台際まで施釉され、露胎部との境界は淡赤褐色を呈する。見込みにはやや太目の沈線を配する。393は細片であるが、碗X-I-1類であろう。釉は水色味を帯びる。394は管状の十鍤で、端部を欠損する。器面は指オサエによる凹凸が著しい。395～397は瓦である。395・396は平瓦で、灰白色を呈する。共に凹面は布目、凸面には二重斜格子目の叩きが認められるが、凸面にはナデを加えている。397は土師質の丸瓦である。凸面の玉縁部はヨコナナ、脇部は二重斜格子目の叩きを施すが、ナデを行う。凹面には細かい布目が残る。以上の出土遺物から10世紀後半から11世紀中頃の土坑と考えられる。

SK0054(第62図) SK0053を切る土坑で、C-D-3区で確認した。また、南東側をSK1165に切られる。隅丸方形を呈するが、不整である。長さ3.7m、幅3.4mを測り、西側を除いた壁面には狭い



第62図 SK0054実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)

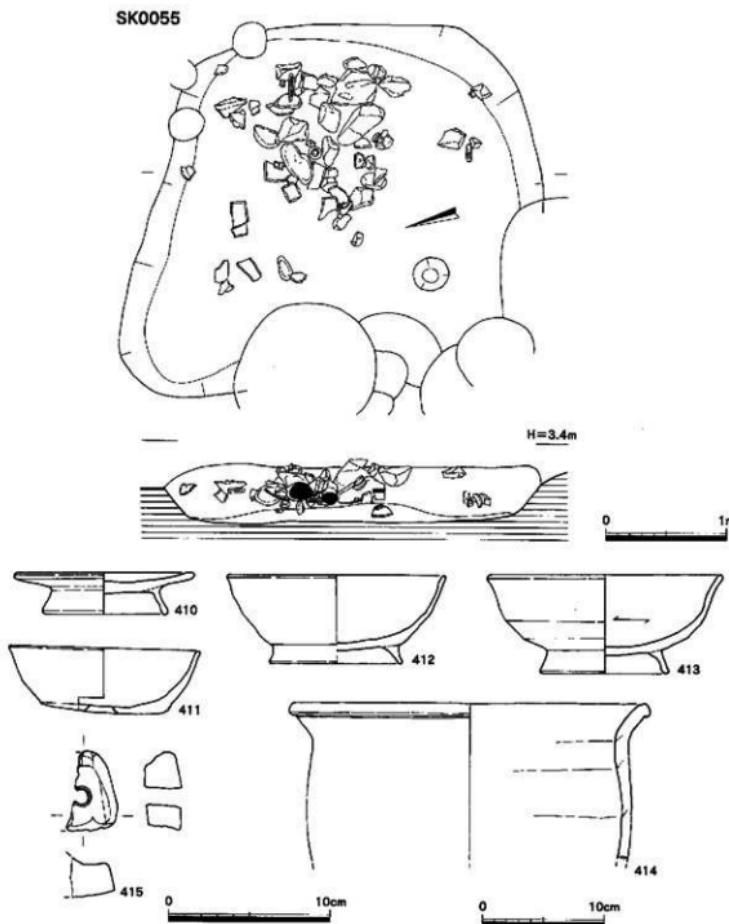


第63図 SK0054川土遺物実測図（2）（408・409は1/3. 他は1/4）

テラスを設ける。底面はほぼ平坦で、深さは約0.9mを測るが、ピット状の掘り込みは認められなかった。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

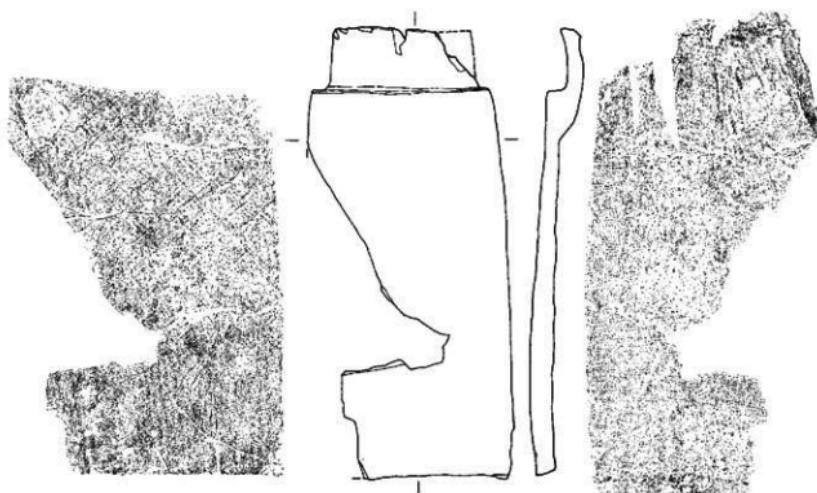
出土遺物(第62・63図) 398は口径10.5cmを測る回転ヘラ切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。399~404は上師器碗である。丸味のある体部を呈し、口縁部を僅かに外反させる。比較的高く、細い高台を貼付する。内面は研磨を行うが、399にはコテ当て痕が認められる。404・405は混入と考えられる遺物である。404は瓦質の鉢もしくは壺で、外底部は回転糸切りである。405は古式土師器の布留系甕で、口縁端部をつまみ出す。406・407は須恵質の平瓦で、側縁はヘラ切りを施し、凹面には布日が認められる。凸面の叩きは406が大きな斜格子目、407は二重斜格子目であるが、共にナデ調整を加えている。408・409は櫛羽口片で、端部は二次的加熱により灰色を呈し、409にはガラス質の付着が認められる。408の外面はヘラナデによる面取りが行なわれる。以上からSK0053と同時期の10世紀後半から11世紀中頃に位置付けられる。

SK0055(第64図) C-3区、SK0054の南西に接する。壁面の西側は搅乱や他遺構の重複が著しいが、平面プランは不整な隅丸方形を呈するものと考えられる。一辺約3.0m、深さ0.5mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とし、暗褐色砂質粘性土が縞状に堆積する。また、土坑内には東側を主体に土師器や瓦を混じえ、拳～人頭大の角礫が廃棄される。南西部の底面では深さ0.15mのピットを検出した。

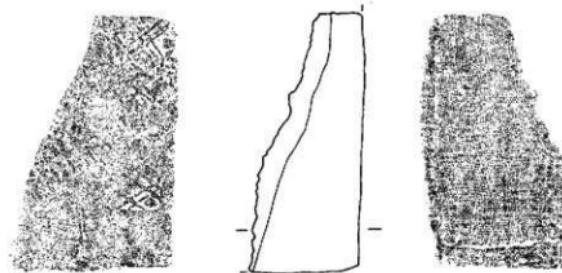


第64図 SK0055実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（414は1/4、他は1/3）

出土遺物(第64~67図) 410は土師器小皿cで、皿部は浅い器形を呈する。411は口径11.7cmを測る土師器壊である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕はない。底部の中央に焼成前の穿孔を有する。412・413は土師器碗で、口縁部を緩く外反させる。412の外底部には板状圧痕が残る。413の壊部下半には回転ヘラ削りを施す。414は土師器甕で、口縁部は丸く納める。外面には煤の付着が認められる。415は滑石製品の石錘であろう。径1cmの穿孔を有し、全面を粗い研磨で仕上げる。416~423



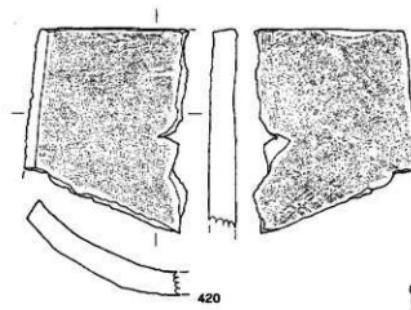
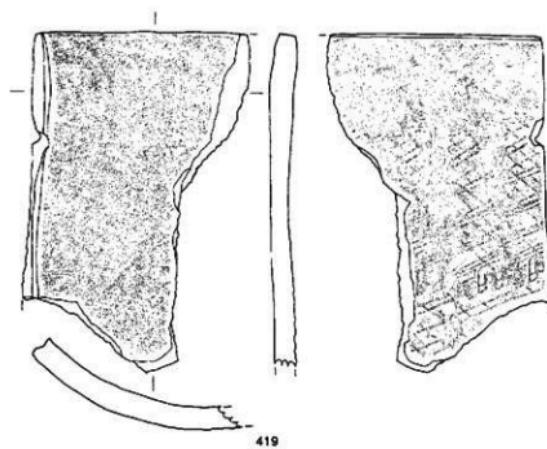
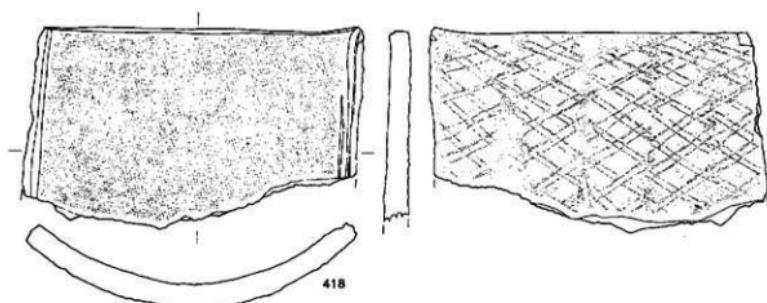
416



417

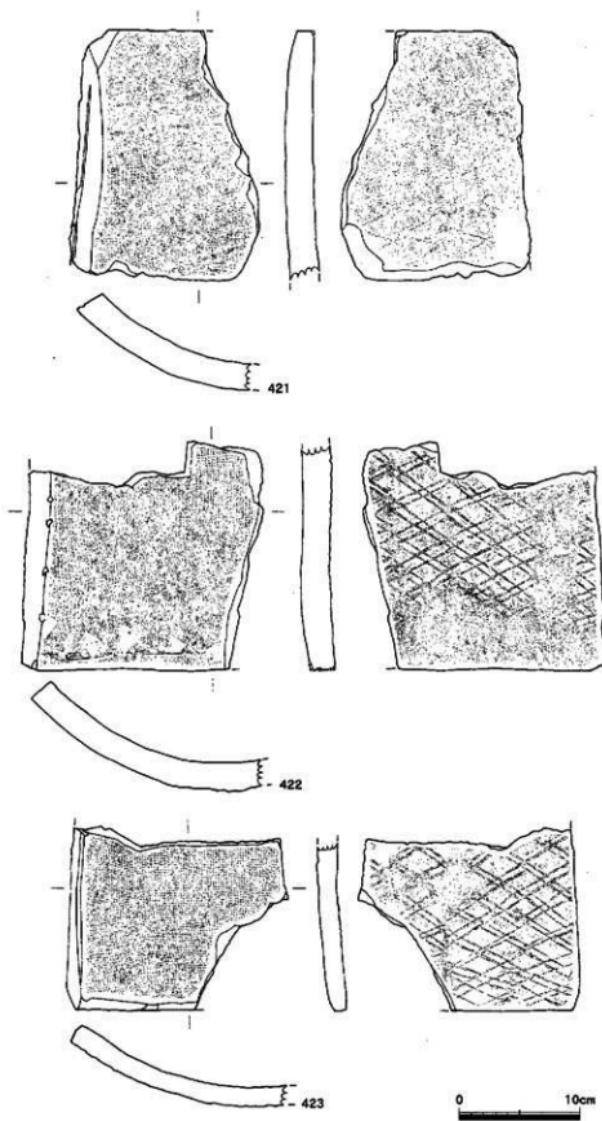
0 10cm

第65図 SK0055出土遺物実測図（2）（1/4）

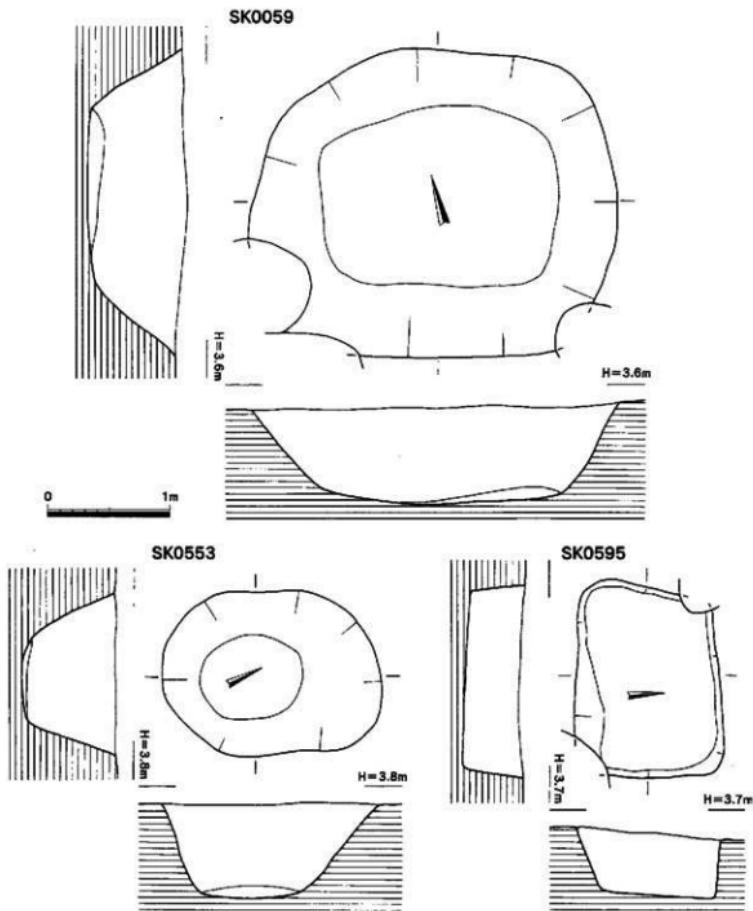


0 10cm

第66図 SK0055出土遺物実測図（3）（1/4）

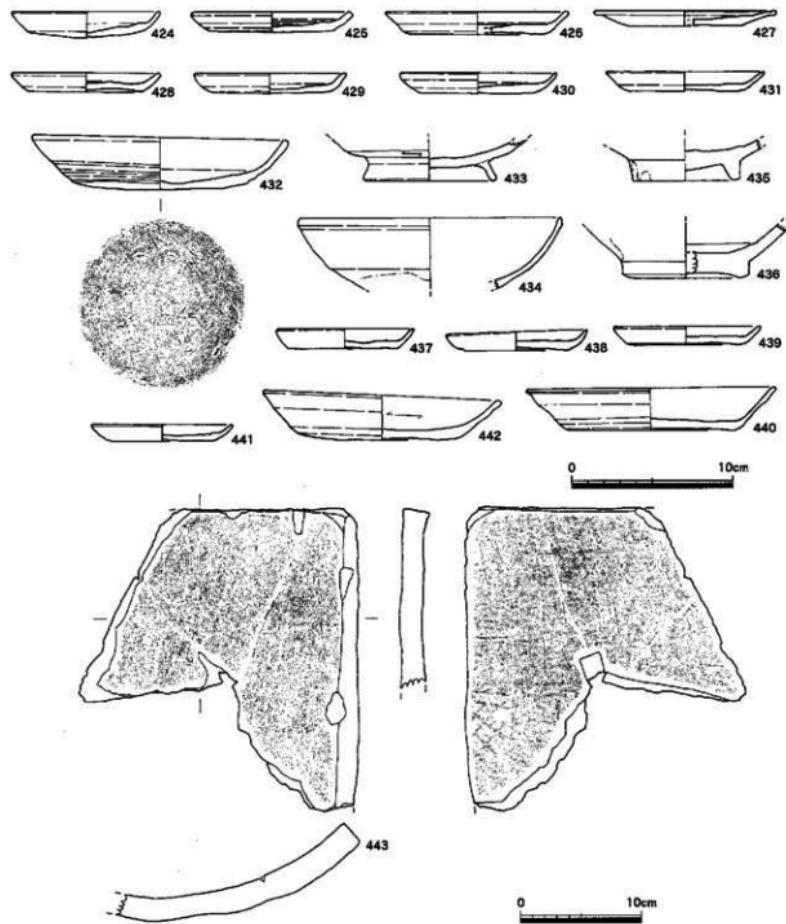


第67図 SK0055出土遺物実測図(4) (1/4)



第68図 SK0059・0553・0595実測図（1/40）

は瓦である。416・417は土師質の丸瓦で、凹面には細かい布目が認められ、417の端部には紐痕が残る。416の凸面は器面が荒れるが、胴部は二重格子目の叩きにナデを加えている。玉縁部は風化が著しく不明瞭である。417は二重斜格子目の叩きを施し、416同様にナデを行なっている。418～423は半瓦である。いずれも凹面には布目が認められるが、419はコビキの痕跡を残す。また、419・421はナデを加えている。凸面の叩きは421が大きな斜格子目、他は二重斜格子目であるが、419～421はナデ調整を行なう。また、419は銘入りの叩き具を用いている。他に黒色土器、白磁細片等が出土



第69図 SK0059・0553・0595出土遺物実測図 (443は1/4. 他は1/3)

した。これらの出土遺物から10世紀後半から11世紀前半の遺構に位置付けられる。

SK0059(第68図) D-4区で検出した隅丸長方形の土坑で、長さ3.0m、幅2.5m、深さ0.8mを測る。断面は逆台形を呈する。覆土は暗灰褐色砂質粘性土を主体とし、黄褐色砂が縞状に混じる。

出土遺物(第69図424~436) 424~431は土師器小皿で、復元口径は9.2~11.2cmを測り、平均は9.9cmである。外底部は424~427が回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。427を除いて板状圧痕

を有する。432は口径15.8cmを測る土師器坏である。板状圧痕を有する回転糸切りの外底部には爪状の刺突が円形に巡る。433は上師器楕である。434～436は白磁碗である。434は小振りな玉縁状の口縁部を呈する碗II-1類である。体部は丸味を帯び、口縁下まで回転ヘラ削りがおよぶ。オリーブがかった釉は体部外面の下半には施されない。435は碗V類、436は碗IV-1a類で、共に見込みに沈線を巡らせる。他に中国陶器、同安窯系青磁、滑石製石鍋等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK0553(第68図) D-E-5区に位置する。楕円形プランを呈し、長径1.8m、短径1.3mを測る。断面は逆台形をなし、深さは0.8mである。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第69図437～440) 437～439は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕が認められる。口径は8.4～9.2cmを測り、平均は8.8cmである。440は口径15.3cmの上師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。他に白磁等の細片が出土した。土師器の法量から13世紀前半の遺構と考えられる。

SK0595(第68図) D-5区で検出した隅丸方形の土坑である。長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.5mを測る。壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第69図441～443) 441は復元口径8.6cmを測る回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕がある。442は土師器坏で、口径は14.6cmである。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。443は凹面布目の平瓦である。凸面には格子目叩きが認められるが、大半をヘラナデによって消している。側縁側に文字鉢枠が認められるが、文字は不明瞭である。13世紀代であろうか。

SK0596(第70図) 円形プランを呈する小形の土坑で、D-5に位置する。径1.0～1.1m、深さ0.45mを測る。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第71図444～448) 444は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿である。復元口径は9.8cmを測る。445～447は土師器坏で、復元口径は順に14.8、15.0、15.8cmを測る。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。448は土師器楕で、外底部には板状圧痕が残る。他に瓦器や白磁等の細片が出土した。これらから12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

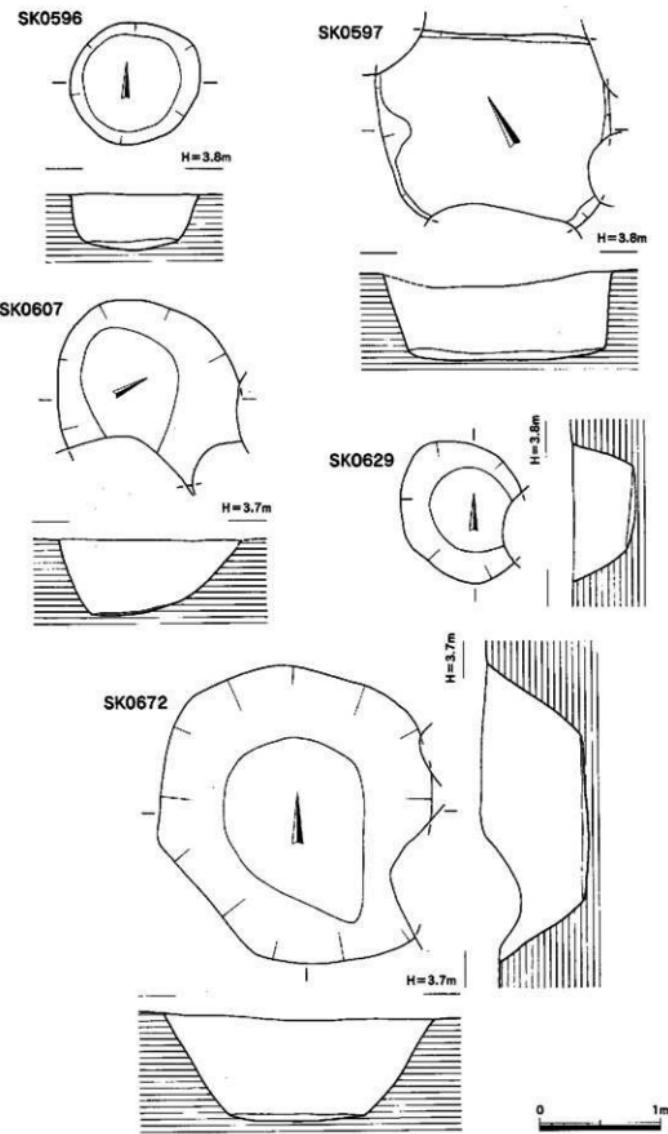
SK0597(第70図) D-5区で確認した隅丸方形の土坑で、SB0070の柱穴に切られる。一辺0.95～0.8m、深さ0.7mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、西側に張り出しが認められる。SK0596と同様の覆土を呈する。

出土遺物(第71図449～452) 449～451は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕を有する。前2点の口径は順に8.6、9.2cmを測る。451は細片であるが、内外の底部に墨書が認められる。452は土師器小皿cで、内底中央部には座みが認められる。他に白磁碗IV・VII類等の細片が出土した。これらから12世紀中頃から後半の遺構と考えられよう。

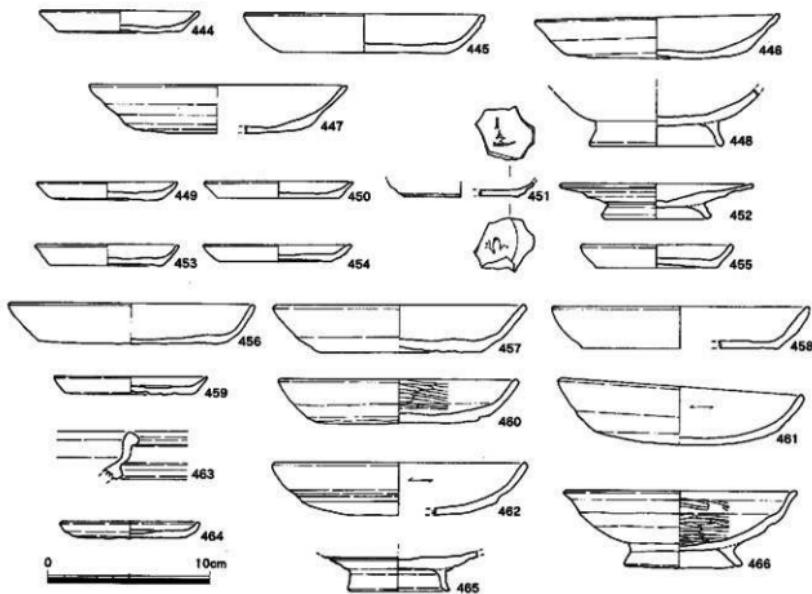
SK0607(第70図) 調査区のはば中央、C-5区で検出した。東側を擾乱等に切られ、平面プランは不明である。南北方向の幅約1.5m、深さ0.6mを測る。底面は南側に傾斜する。覆土は粘性のある灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第71図453～458) 453～455は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.8～9.4cmで、平均は9.1cmを測る。455を除いて板状圧痕がある。456～458は土師器坏で、外底部は回転糸切りで、458に板状圧痕は認められない。口径は15.1～15.8cmを測り、平均は15.5cmである。他に白磁や同安窯系青磁等の細片が出土した。12世紀後半の土坑と考えられる。

SK0629(第70図) D-5区に位置する円形プランの小形土坑で、径は1m前後を測る。深さは0.5mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を呈する。



第70図 SK0596・0597・0607・0629・0672実測図 (1 / 40)



第71図 SK0596-0597-0607-0629-0672出土遺物実測図（1/3）

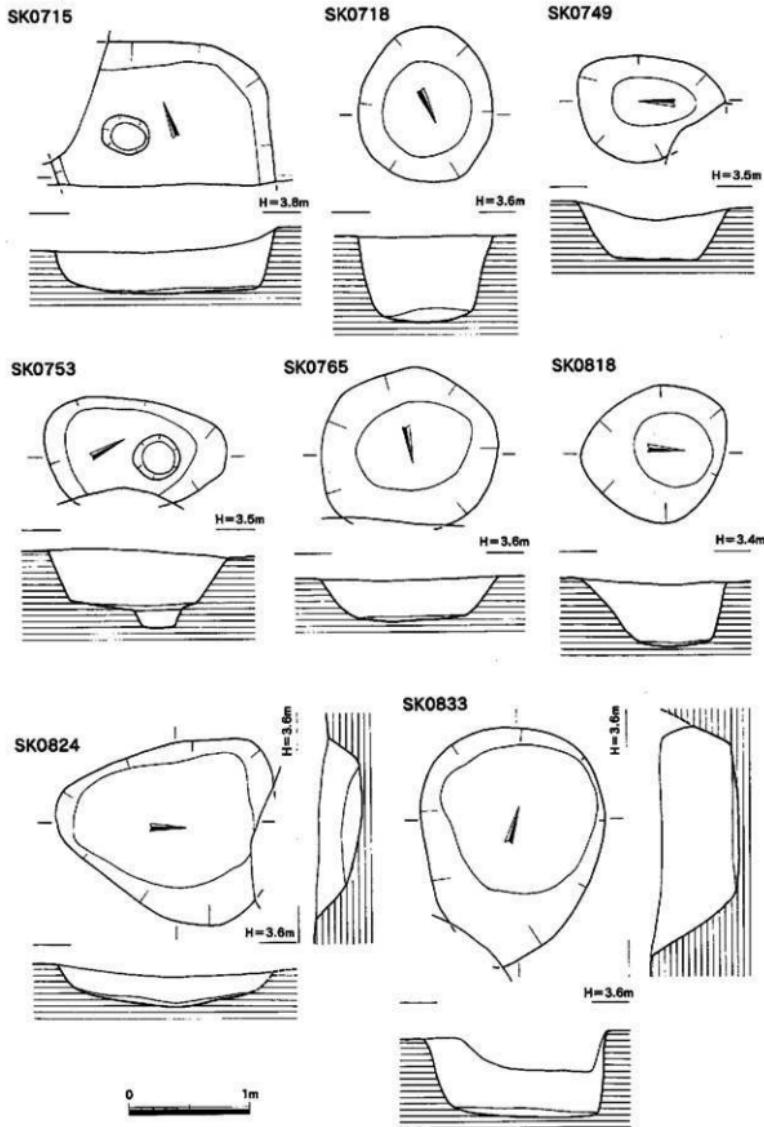
出土遺物(第71図459～463) 459は口径9.4cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。460～462は回転糸切り底の土師器坏で、462を除き板状圧痕がある。復元口径は14.8～15.6cmで、平均は15.2cmを測る。内面はヘラ研磨により平滑である。463は高麗陶器の細片で、壺もしくは蓋であろう。胎上は暗赤褐色で、器面は灰色を呈する。他に青白磁や白磁等の細片が出土した。以上から12世紀後半頃の遺構と考えられる。

SK0672(第70図) SK0034に切られる上坑で、D-4区で確認した。不整な梢円形を呈し、長径2.6m、短径2.2mを測る。断面は逆台形をなし、深さは0.8mである。覆土は暗灰褐色沙質土である。

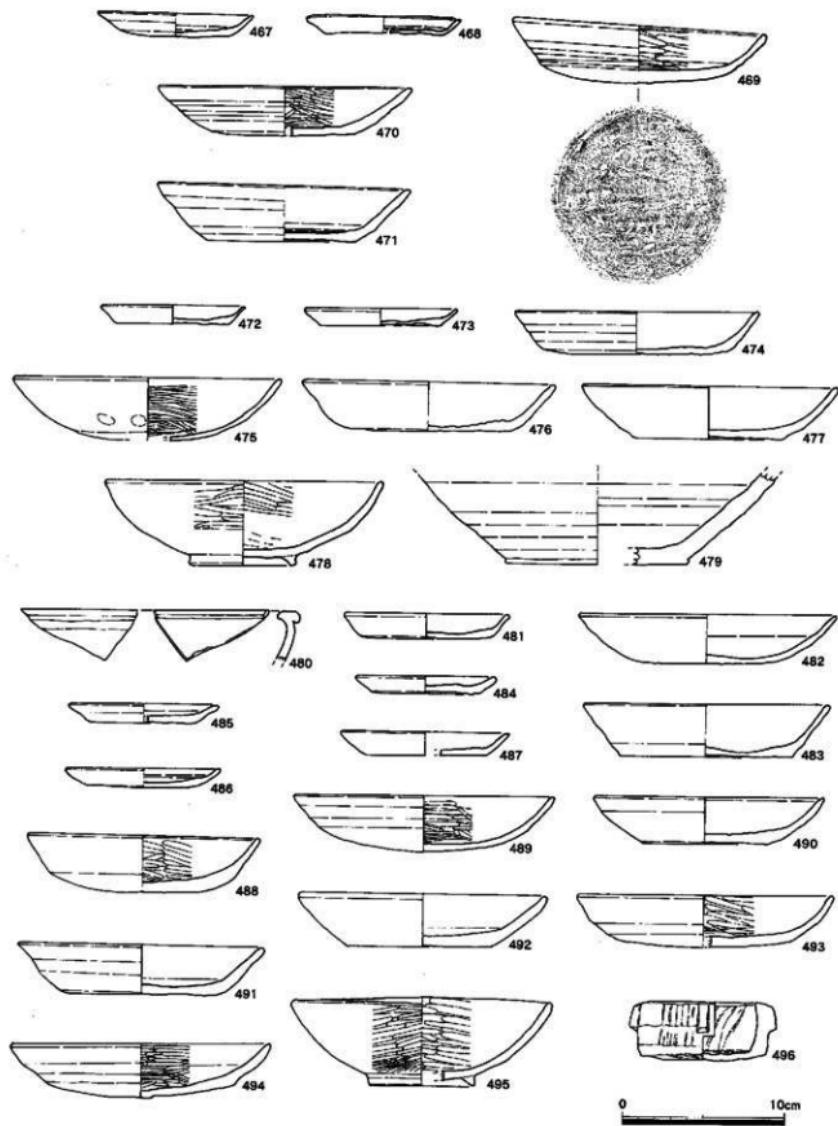
出土遺物(第464～466) 464は復元口径8.6cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。465・466は土師器碗である。465の高台端部は外反する。466は体部中位で鈍く屈曲し、口縁部を外反させる。内面にはヘラ研磨を施すが、口縁部はヨコナデを行う。他に回転ヘラ切り底の土師器や白磁、龍泉窯系青磁等が出土した。12世紀中頃の土坑に位置付けられる。

SK0715(第72図) E-3区の調査区間に位置し、南側は調査区外に延びる。また、西側をSK0824に切られるため、平面プランは不明である。東西方向の幅1.8m、深さ0.5mを測る。

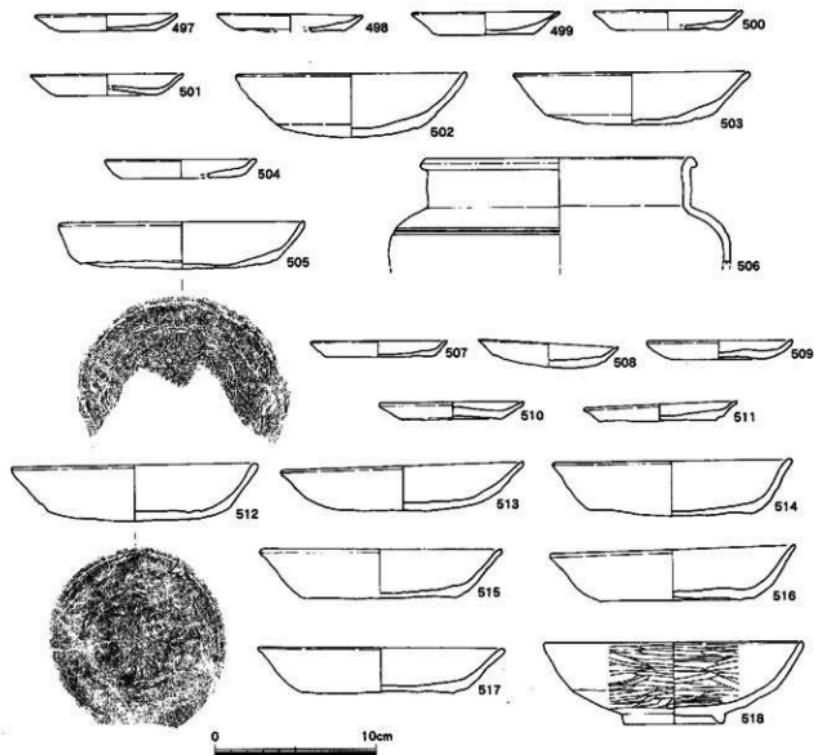
出土遺物(第73図467～471) 467・468は共に口径9.5cmの土師器小皿である。外底部は467が回転ヘラ切り、468は回転糸切りで、板状圧痕がある。469～471は土師器坏で、いずれも口径は15.6cmを測る。469・471は回転ヘラ切り底、472は回転糸切りで、いずれも板状圧痕が認められる。469の外底部には爪状の浅い刺突が放射状に巡る。以上から12世紀前半から中頃の遺構と考えられる。



第72図 SK0715・0718・0749・0753・0765・0818・0824・0833実測図（1/40）



第73図 SK0715・0718・0749・0753・0765出土遺物実測図（1 / 3）



第74図 SK0818・0824・0833出土遺物実測図（1 / 3）

SK0718(第72図) E-2区で検出した土坑で、径1.1～1.3mを測る不整な円形プランを呈し、深さは0.7mを測る。なお、SX0040を切る造構として調査したが、川土遺物から前後関係を誤認したものと考えられる。

出土遺物(第73図472～480) 472・473は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は順に8.4、9.4cmを測る。474～477は土師器坏で、474・475は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りで、いずれも板状圧痕がある。口径は15.0～16.4cmを測り、平均は15.6cmである。478は瓦器柄で、器面が風化するが、ヘラ研磨を施している。479は須恵質土器の鉢で、ヨコナデ調整を行なう。480は口縁部を折り返す中国陶器の鉢で、胎土は粗い。内外面共に露胎で、口縁部の上面には目跡が残る。他に白磁等の細片が出土している。これらから12世紀前半から中頃の土坑に比定される。

SK0749(第72図) 小形の楕円形プランの土坑で、E-2区に位置する。長径1.2m、短径0.9m、深さ0.45mを測る。覆土は黒味のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第73図481~483) 481は復元口径10.2cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。482・483は土師器坏で、復元口径は順に15.8、15.1cmを測る。482は回転ヘラ切り底、483は回転糸切りで、共に板状圧痕が認められる。他に白磁碗II類等が出土している。これらから12世紀前半から中頃の遺構と考えられる。

SK0753(第72図) E-1・2区で検出した。梢円形の平面プランを呈し、SK0037に切られる。長径1.5m、短径は推定で0.9mを測る。深さは0.5mで、北側に径約0.35mのピットを有する。覆土は黒灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第73図484~495) 484~487は土師器小皿で、485・486は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りである。484を除いて板状圧痕を有する。口径は8.7~10.4cmを測り、平均は9.5cmである。488~494は土師器坏である。488・489の外底部は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りである。口径は14.1~16.0cmで、平均は15.2cmを測る。内面にヘラ研磨を加えるものが多い。495は瓦器焼で、断面三角形状の低い高台を貼付する。内外面に研磨を施す。他に白磁等の細片が少量出土している。これらから12世紀中頃の土坑に位置付けられる。

SK0765(第72図) E-1区の調査区北壁際で確認した。径1.4m前後の円形プランを呈し、断面は逆台形をなす。深さは0.35mを測る。

出土遺物(第73図496) 小形の滑石製石鍋で、口径6.4cm、器高3.6cmを測る。口縁下に縦耳を削り出し、体部にはノミによる削痕が顕著に残る。全体に研磨を施している。他に回転糸切り底の上節器の細片が出土している。12世紀代の遺構であろう。

SK0818(第72図) D-1区に位置する径1.1~1.2mの小形の土坑で、深さは0.5mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第74図497~503) いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する土師器である。497~501は小皿で、口径は8.6~9.3cm、平均は8.9cmを測る。502・503は坏で、内面は研磨を施す。順に口径は14.0、14.4cmである。他に白磁や青磁、平瓦等の細片が出土した。土師器の法量から13世紀前半の遺構と考えられる。

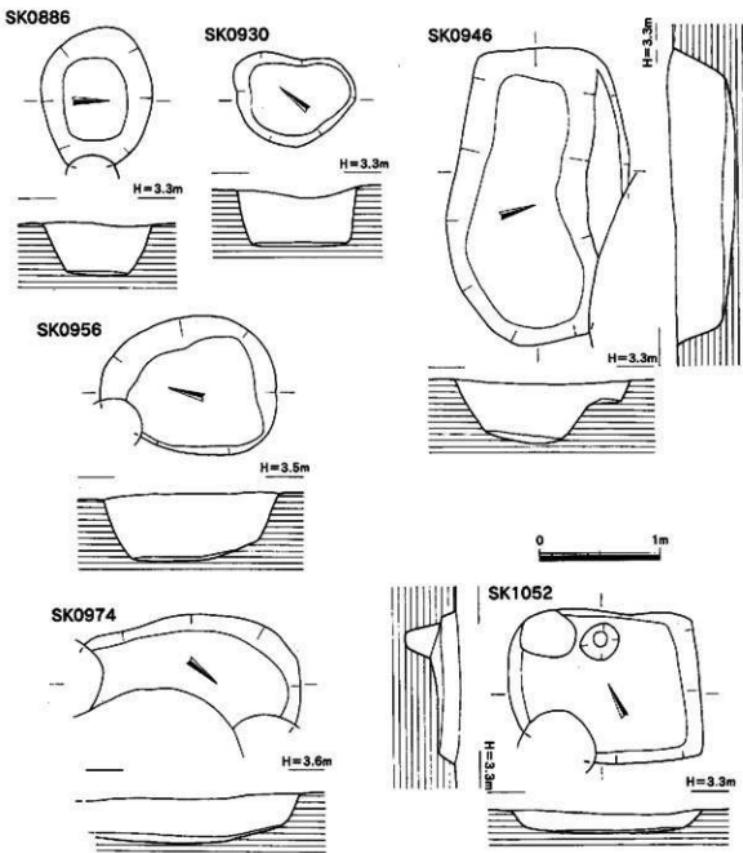
SK0824(第72図) E-2・3区に位置し、SK0715・0974を切る。隅丸の三角形状を呈し、長さ1.8m、幅1.5mを測る。断面は浅皿形をなし、深さは0.25mである。

出土遺物(第74図504~506) 504は口径9.1cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。505は土師器坏で、復元口径は14.4cmを測る。回転糸切り底の外底部には、爪状の刺突が円形に配される。506は白磁の蓋で、直立する短い頭部をもつ。肩部外面には沈線が2条巡る。他に白磁碗IV類、青磁等の細片が出土した。以上から12世紀後半頃の遺構と推定される。

SK0833(第72図) E-2区で確認した梢円形プランの土坑で、長径1.9m、短径1.5m、深さ0.6mを測る。覆土は黒味のある暗灰褐色砂質土である。

出土遺物(第74図507~511) 507~511は土師器小皿である。口径は8.3~9.5cmを測り、個体差が大きい。なお、平均は8.7cmである。508のみ回転ヘラ切り底で、口縁端部は尖り気味に納める。いずれにも板状圧痕がみられる。512~517は土師器坏で、口径は14.9~15.1cmを測り、平均は15.0cmである。512の外底部にはナデ調整を行い、爪状の刺突文を二重に施す。内側は放射状に、その外側には円形に配する。他の外底部の調整は513が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、514を除いて板状圧痕が認められる。518は土師器焼で、体部の内外面にヘラ研磨を施し、外面の中位で鈍く屈曲する。他に瓦器、白磁、同安窯系青磁等が出土した。12世紀前半から中頃の土坑と考えられる。

SK0886(第75図) D-1区に位置し、SB0701の柱穴を切る。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4

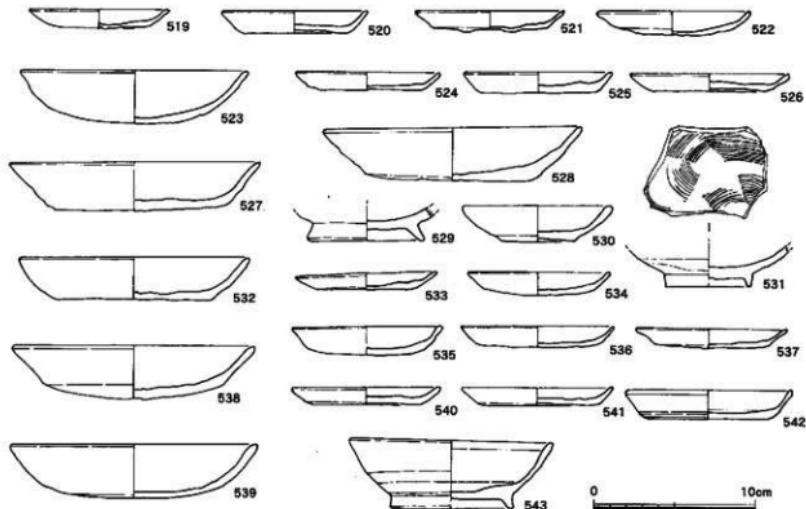


第75図 SK0886・0930・0946・0956・0974・1052実測図 (1 / 40)

mを測る小形の土坑である。覆土は粘性のある黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第76図519~523) 519~521は土師器小皿である。519~521は回転糸切り底、522のみ回転ヘラ切りであるが、いずれも板状圧痕を有する。口径は8.4~9.3cmで、平均は8.9cmを測る。523は口径13.8cmを測る上師器坏である。外底部は回転ヘラ切り底で、板状圧痕はない。内面は研磨を施す。他に中国陶器や白磁等が出土した。以上の川土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK0930(第75図) D-2区で検出した不整楕円形を呈する小形の土坑である。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.4mを測る。北西側の上層で土師器小皿や坏がまとまって出土した。



第76図 SK0886・0930・0946・0956・0974・1052出土遺物実測図（1/3）

出土遺物(第76図524～531) 524～526は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は順に8.9、9.1、9.7cmを測る。525を除いて板状圧痕がある。527・528は土師器杯で、順に口径は15.3、15.9cmを測る。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。529は土師器碗で、内面はヘラ研磨を施す。530は須恵質土器の皿で、復元口径は9.1cmを測る。口縁部を肥厚させ、丸く納める。調整はヨコナデで、外底部には回転糸切り痕を残す。531は白磁碗V-4 b類で、内面に櫛状工具による施文を有する。釉は灰白色を呈する。以上から12世紀後半の遺構に位置付けられる。

SK0946(第75図) D-2区に位置する。やや不整な隅丸長方形プランで、長さ2.4m、幅1.4mを測る。北側の壁面にはテラスを設け、深さは0.5mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

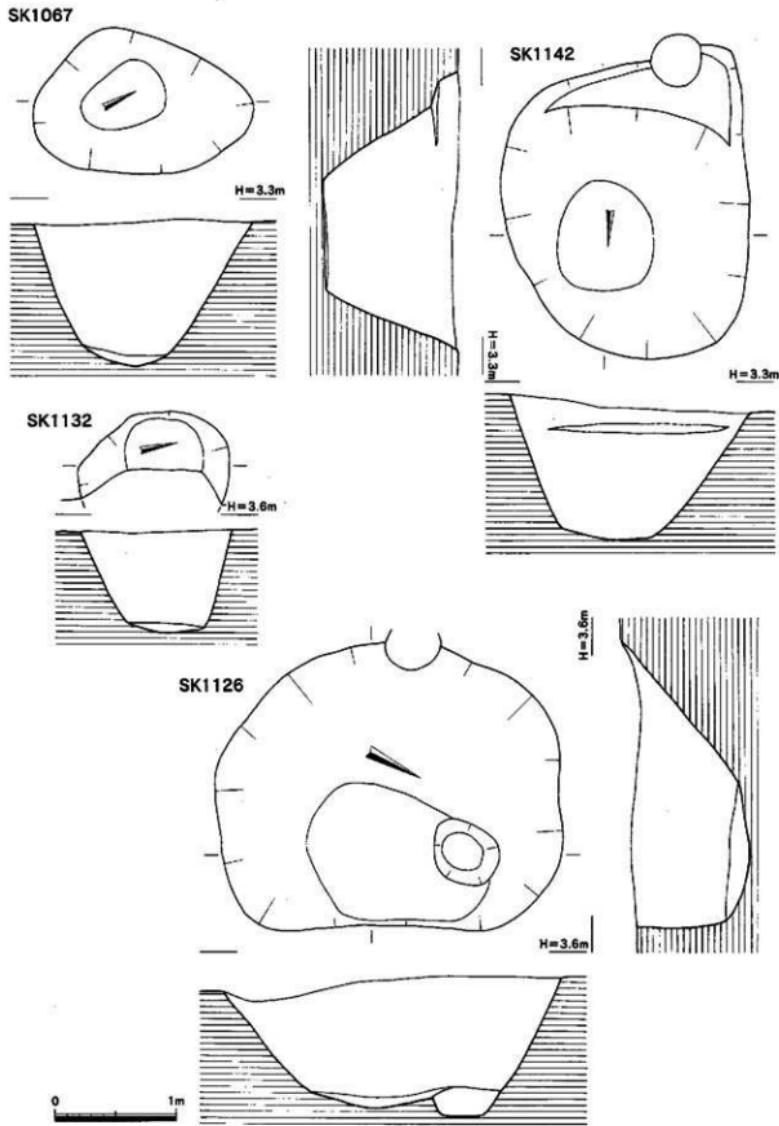
(第76図532) 上層出土の口径14.1cmの土師器杯である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。他に中国陶器、白磁等の細片が出土した。12世紀後半から13世紀前半の遺構であろう。

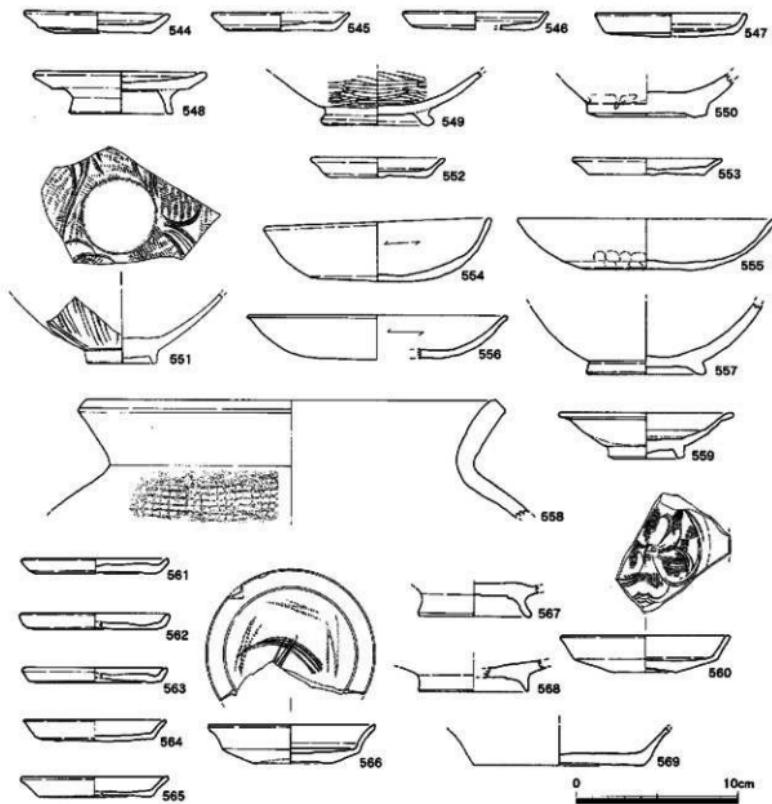
SK0956(第75図) 不整な梢円形プランを呈する土坑で、D-2区で検出した。長径1.5m、短径1.1m、深さ0.55mを測る。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土である。

出土遺物(第76図533～539) いずれも回転ヘラ切り底の土師器である。533～537は小皿で、口径は8.7～9.4cmを測り、平均は9.1cmである。714を除いて板状圧痕を有する。538・539は杯である。順に復元口径は14.8、15.2cmを測り、板状圧痕が認められる。他に白磁IV類や瓦等の細片が出土している。以上から12世紀前半の遺構と考えられる。

SK0974(第75図) E-2区で確認した土坑で、周囲をSK0824や搅乱等に切られるため、平面プランは不明である。長さ1.8m以上、深さ0.4mを測る。

出土遺物(第76図540～542) いずれも回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕が認められる。口径





第78図 SK1067・1126・1132・1142出土遺物実測図（1/3）

は順に9.2、9.3、10.3cmを測る。他に瓦器、中国陶器、白磁等の細片が少量出土した。12世紀後半の土坑と推測される。

SK1052(第75図) C-2・3区に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅1.2mを測る。断面は逆台形をなし、深さは0.2mである。北側にピット状の掘り込みを有する。

出土遺物(第76図543) 直線的な体部を呈する土師器柄で、底面からやや浮いた位置で出土した。ヨコナデ調整を行なうが、内底部にはナデを加える。他に土師器や丸瓦の細片が少量出土している。10世紀代の遺構であろう。

SK1067(第77図) C-2・3区で検出した不整楕円形プランの土坑で、長径1.8m、短径1.2m、深さ1.2mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第78図544～551) 544～547は土師器小皿である。544は回転ヘラ切り底で、他は回転糸切りである。復元口径は8.6～9.4cmを測り、平均は9.0cmである。546を除いて板状圧痕が認められる。548は口径10.6cmを測る土師器小皿cである。内底部はナデ、他はヨコナデを施す。549は瓦器柄で、高台端部が外側に張る。体部にはヘラ研磨を行なう。550は白磁碗IV-1a類で、見込みには段状の沈線が巡る。551は初期龍泉窯系・同安窯系青磁碗0類である。内外面に片彫りおよび櫛状工具による施文を有する。光沢のある灰オリーブ色の釉が高台外面まで施される。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK1126(第77図) D-E-3区に位置する不整隅丸方形の土坑で、長さ2.8m、幅2.3mを測る。壁面は北東側のみ傾斜が急で、直立して立ち上がる。底面の北西側には浅いピットを検出した。深さは1.0mで、覆土は粘性のある灰褐色砂質土を呈する。

出土遺物(第78図552～560) 552・553は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は順に8.3、9.2cmを測る。554～556は土師器壺である。554・555は板状圧痕のある回転糸切り底で、順に復元口径は14.0、15.8cmである。底部押出しの指オサエが残る。556の外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕はない。復元口径は16.0cmを測る。557は瓦器柄である。器面が風化するが、体部には研磨を施す。558は風化がすむ須恵質土器の甕である。口縁部は「く」字状に折れ、体部外面には格子目の叩きが認められる。559は見込みの釉を剥ぎ取る白磁皿III-1類である。外面の口縁下および見込みには沈線を有する。560は龍泉窯系青磁皿I-1c類で、外底部のみ露胎である。見込みには片彫りと櫛目による花文を施す。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK1132(第77図) E-3区の東壁際で検出した。東側は調査区外に延びる。断面は逆台形状を呈し、深さ0.8mを測る。

出土遺物(第78図561～566) 561～565は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕がある。復元口径は8.7～9.2cmを測り、平均は9.0cmである。566は同安窯系青磁皿I-1b類で、見込みに片彫りおよび櫛点描の文様を有する。釉は光沢のある淡緑色を呈する。他に白磁、龍泉窯系青磁等の細片が出土した。12世紀後半頃の土坑に位置付けられる。

SK1142(第77図) C-4区で確認した土坑で、SE0058-0063を切る。不整な隅丸方形を呈し、長さ2.5m、幅2.0mを測る。南側壁面の上位にテラスを有し、断面が逆台形をなす。覆土は暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層に堆積する。

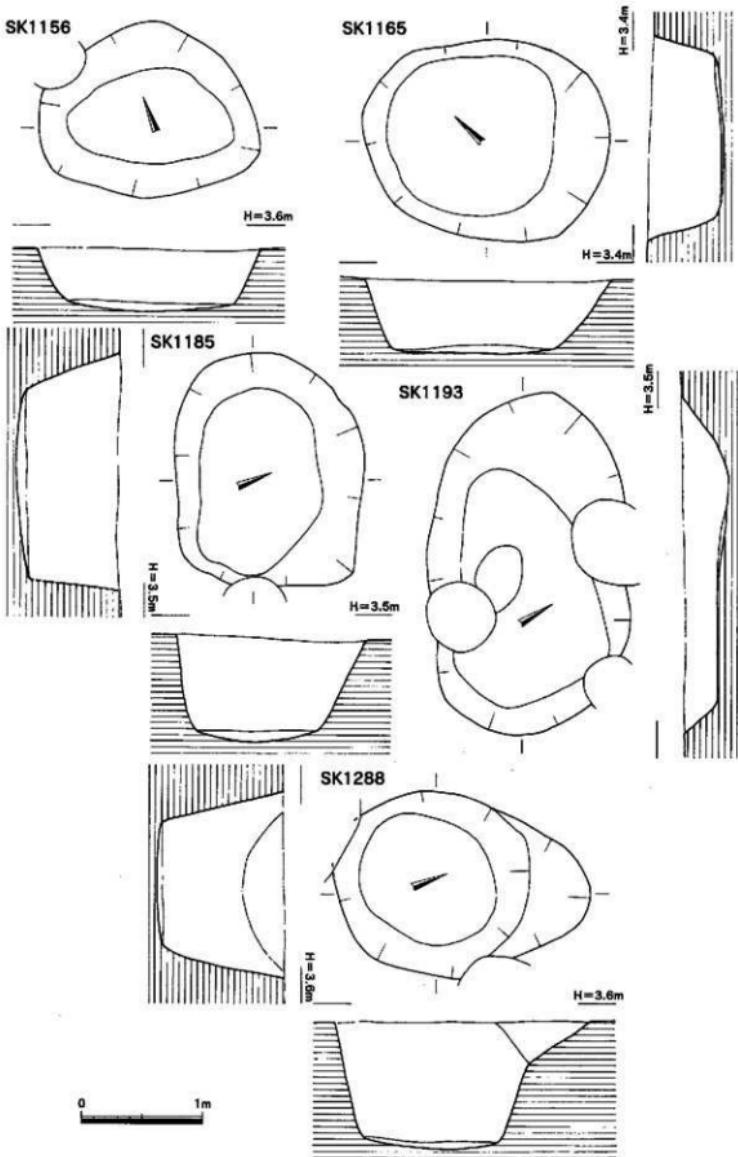
出土遺物(第78図567～569) 567・568は土師器壺である。569は回転糸切り底の土師器壺で、板状圧痕が認められる。他に青磁、瓦等の細片が出土した。井戸との重複関係から13世紀前半の遺構と推定される。

SK1156(第79図) D-4区に位置し、楕円形の平面プランを呈する。長径1.8m、短径1.4m、深さ0.5mを測る。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。

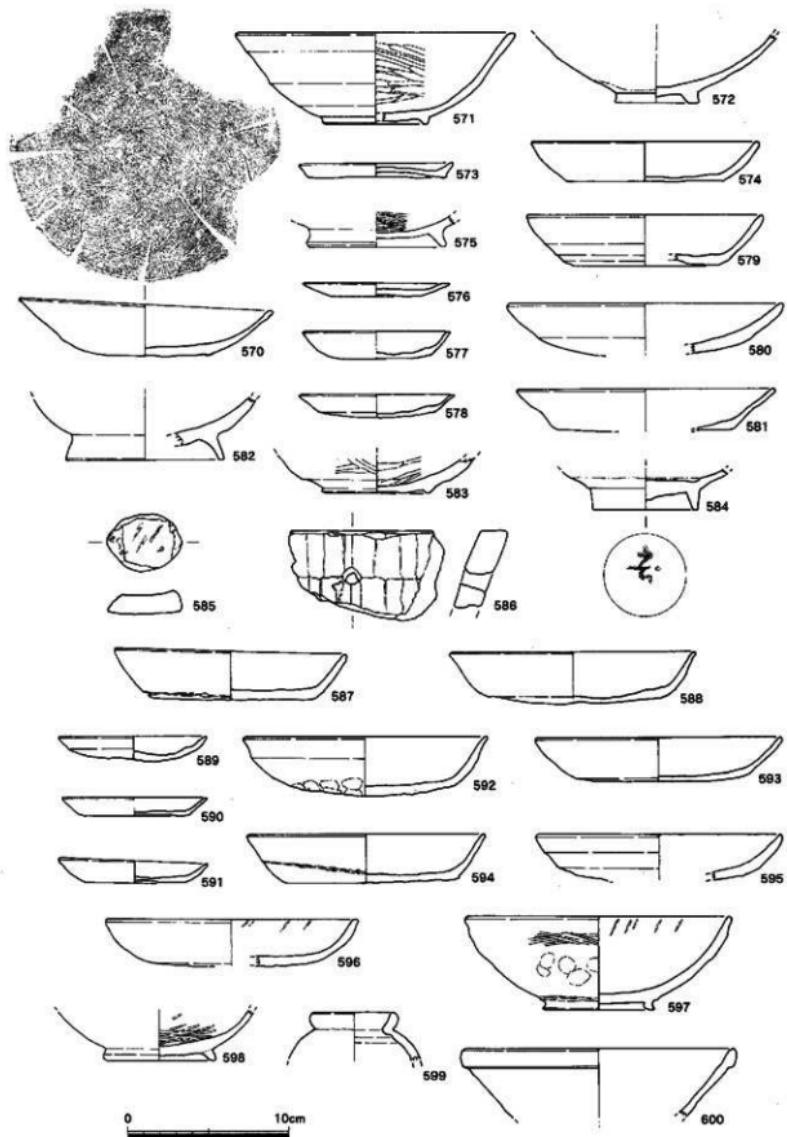
出土遺物(第80図570～572) 570は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器壺で、口径は15.6cmを測る。底部の径は小振りで、体部が大きく開く。内面は放射状に丁寧なナデを施している。571は瓦器柄で、断面台形状の低い高台を貼り付ける。内面にはヘラ研磨を行う。572は白磁碗VI類であろう。淡緑色を帯びた釉が高台近くまで施される。他に土師器壺や白磁碗IV類等が出土している。12世紀代の遺構と推定される。

SK1165(第79図) SK0054を切る隅丸方形の土坑で、D-3区で検出した。長さ2.0m、幅1.6m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈する。覆土は淡灰色砂質土を主体とする。

出土遺物(第80図573～575) 573・574は回転糸切り底の土師器で、共に板状圧痕を有し、上層で



第79図 SK1156・1165・1185・1193・1288実測図 (1 / 40)



第80図 SK1156・1165・1185・1193・1288出土遺物実測図（1 / 3）

出土した。573は完形の小皿で、口径は9.4cm、574は口径14.0cmを測る坏である。575は畿内産と考えられる瓦器楕で、内面には平行線状の研磨を密に施す。他に回転ヘラ切り底の土師器片や土師器楕等が少量出土した。以上から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK1185(第79図) D-3区で確認した不整な楕円形の土坑である。長径1.9m、短径1.5m、深さ0.9mを測る。覆土は暗灰褐色炒質土を呈する。

出土遺物(第80図576~586) 576~578は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿で、復元口径は順に8.8、8.8、9.4cmを測る。579~581は土師器坏で、順に復元口径は14.4、16.8、15.6cmを測る。579・580は回転ヘラ切り底で、579には板状圧痕がある。581の外底部は回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。582は土師器楕である。583は低い高台を貼付する瓦器楕で、高台はヨコナデ、他は研磨を加える。584は白磁碗Ⅱもしくは3類である。見込みの釉は輪状に剥ぎ取り、外底部には墨書きを有する。585・586は滑石製品で、石鍋の再加工品である。586には穿孔が施される。

他に中国陶器、白磁水注等の細片が出土した。これらから12世紀前半から中頃の土坑と考えられる。

SK1193(第79図) 楕円形の平面プランを呈する土坑で、D-3区に位置する。長径2.8m、短径1.6mを測る。断面は逆台形で、深さは0.35mを測る。覆土は淡灰褐色炒質土である。

出土遺物(第80図587・588) 共に上師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。口径は順に14.1、15.0cmを測る。他に土師器や青磁等の細片が少量出土した。以上から12世紀後半から13世紀前半頃の遺構と推定される。

SK1288(第79図) D-4区で検出した楕円形の土坑で、壁面の立ち上がりは急である。北側では傾斜に変化があり、段を有する。長径2.1m、短径1.5m、深さ1.0mを測る。

出土遺物(第80図589~600) 589~591は土師器小皿である。外底部は589が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、590には板状圧痕がない。口径は8.8~9.0cmを測る。592~596は土師器坏である。

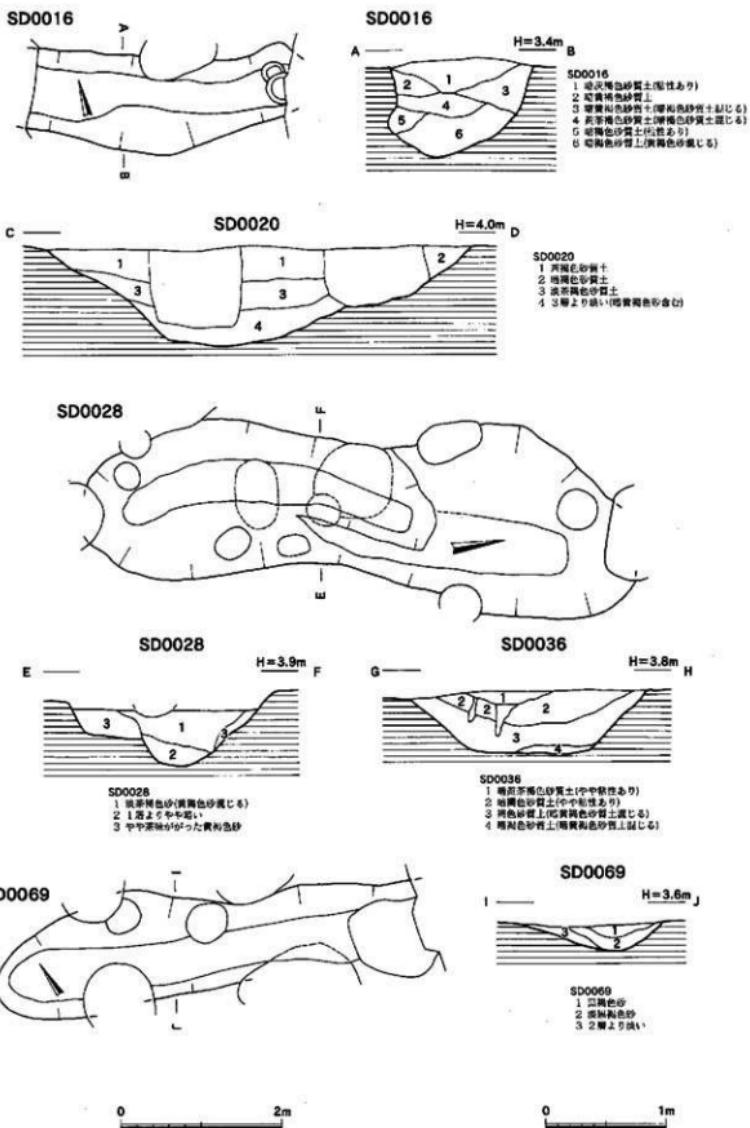
592の外底部には指オサエを行い、底部切り離し技法は不明であるが、板状圧痕が残る。完形品で、口径は14.8cmを測る。593は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底で、口径15.0cmを測る。594~596は復元口径14.4~15.4cmを測る。外底部は回転糸切りで、594を除いて板状圧痕がある。596の内面にはコテ当て痕が認められる。また、これら5点の坏の口径平均は14.9cmである。597~598は瓦器楕である。597の高台は低く、内面にはコテ当て痕、体部外面には指オサエが残る。598の内面には細かいヘラ研磨を施す。599は中国陶器の壺で、短い口縁部をもつ。灰色の胎土には薄く茶褐色の釉がかけられる。600は白磁碗IV類である。他に滑石製品や瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀前半から中頃の土坑に位置付けられる。

(5) 溝 (SD)

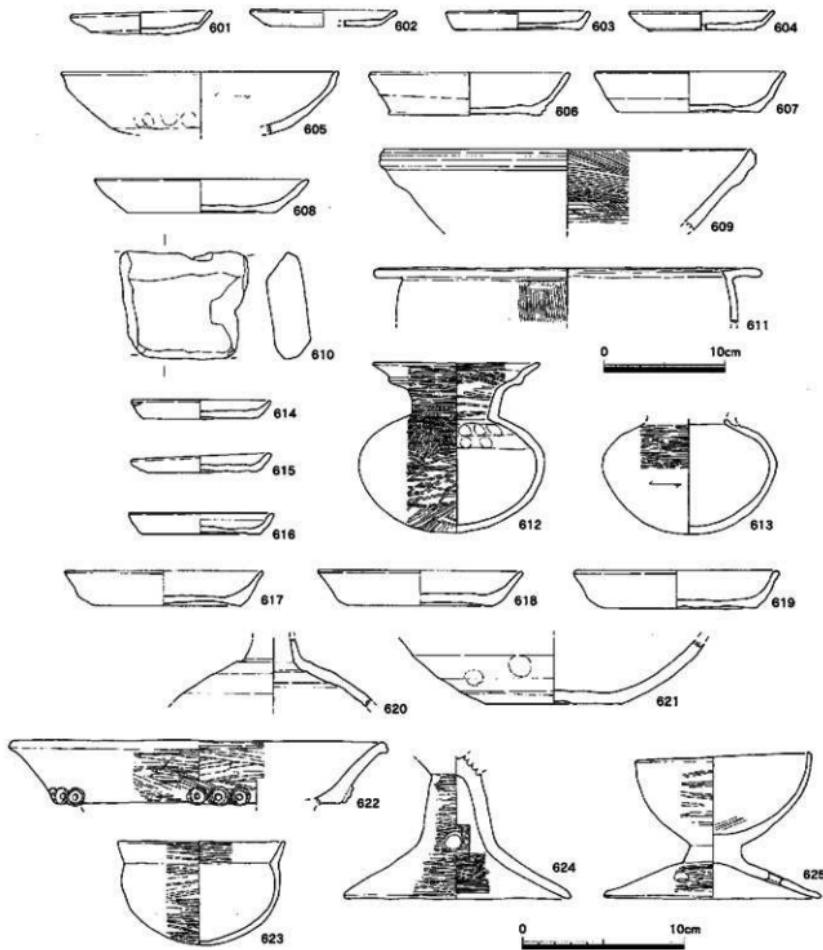
以下に報告する溝状遺構は古墳時代と中世の二時期に大別される。前者に属する溝はSD0028・0069、後者に相当するものはSD0016・0020・0036である。

SD0016(第81図) B-6区の西壁際に位置し、SK0017に切られる東西方向の溝である。東側は搅乱に切られ、西側は調査区外に延びる。幅0.8~1.1m、深さ0.5~0.8mを測り、底面は緩く西側に傾斜する。

出土遺物(第82図601~607) 601~604は口径8.6~9.0cmを測る土師器小皿である。外底部は601・602が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、いずれも板状圧痕を有する。口径の平均は8.8cmである。605~607は土師器坏である。605は復元口径17.0cmを測る回転ヘラ切り底の丸底坏で、体部下半に指オサエが認められる。606・607は口径が小振りで、やや新しい時期の遺物であろう。順に口径は12.2、11.6cmを測る。外底部は回転糸切りで、607には板状圧痕がある。他に瓦器、中国陶器、白磁、



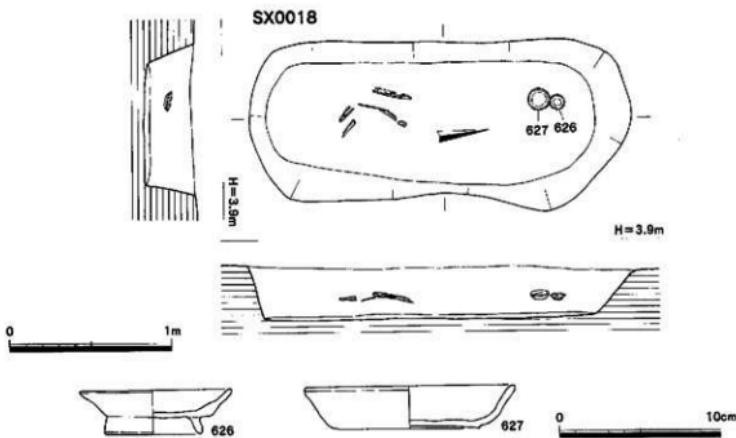
第81図 SD0016・0020・0028・0036・0069実測図（平面図およびSD0020土層図は1/60、他は1/40）



第82図 SD0016-0020-0028-0036-0069出土遺物実測図 (609・611は1/4、他は1/3)

龍泉窯系青磁等の細片が出土した。これらの出土遺物や重複関係から12世紀中頃の溝と考えられる。

SD0020(第81図・付図) 東壁際のD-6・7区で検出した東西方向の溝で、東側は調査区外へ延長する。現況での幅は約5m、深さ1.2mを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれ、自然堆積する。なお、出土遺物は少量であった。



第83図 SX0018実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

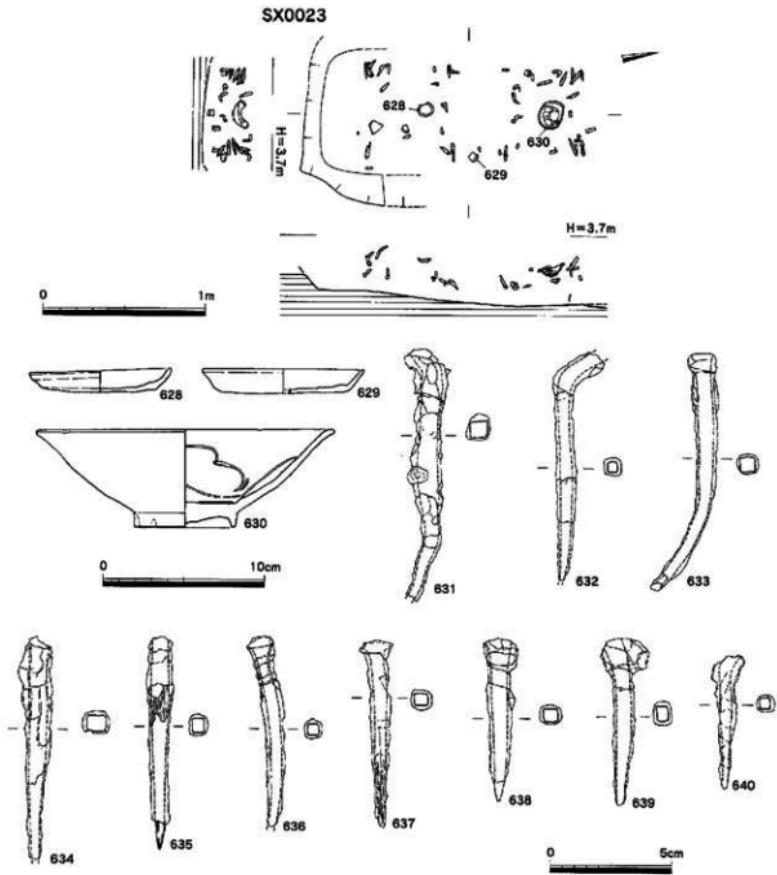
出土遺物(第82図608~611) 608は回転糸切り底の土師器坏で、板状圧痕を有する。復元口径は13.2cmを測る。609は土師質土器鍋で、口縁部は粘土を貼付し、ヨコナデにより低い玉線状を呈する。外面は指オサエ、内面には刷毛目を施す。610は砂岩製の砥石で、両端部を欠失する。611は混入遺物と考えられる弥生土器甕で、口縁部は逆「L」字状を呈する。体部外向には刷毛目調整を行なう。他に白磁、青磁、瓦等の細片が出土した。14世紀前半代の造構であろう。

SD0028(第81図) C-D-6・7区で確認した長さ6.9mの南北方向の溝状造構である。南半部では一段下がり、深さ約0.6mを測るが、土層観察によると掘り直しが行なわれていることが看取できた。全体的には僅かに蛇行し、幅は1.5~2.3mを測る。

出土遺物(第82図612・613) 溝の南東部で出土した畿内系上師器の小形壺である。612は二重口縁壺で、口径10.2cm、器高10.4cmを測る。扁球状の胴部に開き気味の頸部が付き、更に大きく外反する二重口縁がある。口縁屈曲部の稜は緩く、丸味をおびる。外面の調整は胴部上半に刷毛目が残るが、ヘラ研磨を行う。内面は胴部に接合痕を残し、指オサエおよびナデを施す。また、頸部から口縁部は刷毛目の後、ヘラ研磨を行っている。613は頸部上位を欠損するが、612と同様の器形を呈するものと考えられる。外面胴部下半の器向は風化するが、上半にはヘラ研磨、内面はナデを行う。胎土には金雲母片が多量に含まれる。他に土師器片が少量出土している。古墳時代前期の溝である。

SD0036(第81図・付図) F-E-1・2区に位置する南北方向の溝で、両端部は調査区外に延びる。幅は1.8~2.6mを測り、断面は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは約0.5mである。

出土遺物(第82図614~621) 614~616は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は順に8.5、8.6、8.8cmを測る。617~619は上師器坏である。外底部はいずれも回転糸切りで、板状圧痕はない。順に口径は12.1、12.5、12.6cmである。620・621は中国陶器である。620は壺もしくは漏斗であろう。内面のみに褐色の釉が施される。胎土には淡黒色の粒子が目立つ。621は鉢である。暗赤褐色の胎土にやや光沢のある暗茶褐色の釉が、外底部および体部外向下半を除き施される。また、体部外向には日跡が認められる。他に龍泉窯系青磁碗II類、白磁碗IV類等の細片が出土した。

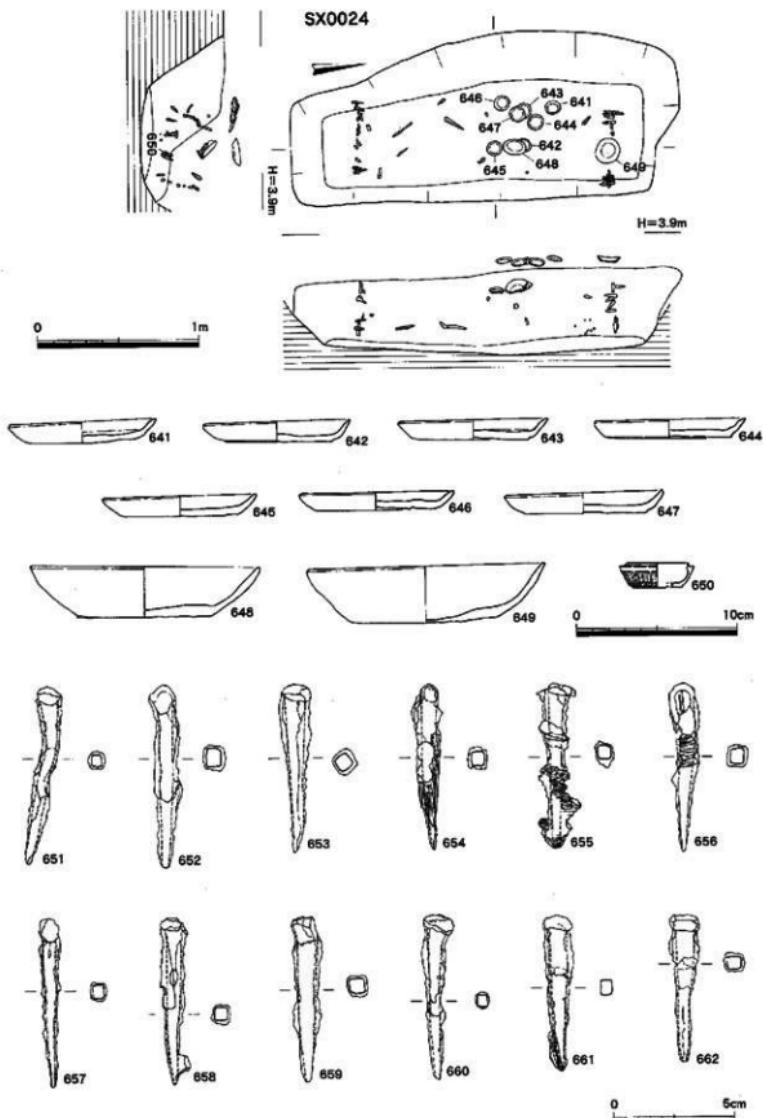


第84図 SX0023実測図（1/30）および出土遺物実測図（628～630は1/3.他は1/2）

以上から13世紀後半の遺構に位置付けられる。

SD0069(第81図) D-E-4区の西壁際で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外に延伸し、また周辺遺構が重複するため、詳細は不明瞭であるが、現況で幅1.0～1.3m、深さ0.2mを測る。

出土遺物(第82図622～625) いずれも畿内系の土器で、赤褐色系の色調を呈する。622は二重口縁壺の口縁上部で、端部は面取りを施す。外面の屈曲部には3個1組の円形浮文を貼付するが、剥落が多い。刷毛目調整後、ヘラ研磨を加えている。623は小形丸底壺で、短く折れる口縁部を有する。外面はヘラ研磨、内面は口縁部に刷毛目、胴部にはナデを行う。624・625は高杯である。624はエン



第85図 SX0024実測図（1/30）および出土遺物実測図（641～650は1/3. 他は1/2）

タシス状の脚部を呈し、外面にヘラ研磨、内面の裾部には刷毛目調整を行う。625は楕円形の深い坏部に短い脚部が付き、穿孔のある裾部が大きく開く。器面が風化するが、ヘラ研磨が認められる。これらの出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。

(6) 墓葬遺構 (SX)

以下報告する埋葬遺構8基は古墳時代と中世の二時期に大別される。前者に属する遺構はSX0029・0035の2基で、他の6基は後者の時期に帰属する。なお、中世埋葬遺構のうち、SX0023を除いた5基には保存状況不良ながら、人骨が出土しており、それらの考察については付論1を参照されたい。

SX0018(第83図) 調査区南東のD-7区に位置する土壙墓で、SK0019を切る。墓壙平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.35m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。壙内の南側には下肢の一部が遺存していることから、頭位方向は北側で、その方位はN-10°-Eを測る。また、頭部推定位置の北側には土師器2点(626・627)が副葬されていた。

出土遺物(第83図) 共に板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。626は口径9.3cmを測る小皿cである。627は土師器杯で、口径は12.9cmを測る。他に白磁や青磁等の細片が少量出土した。13世紀前半頃の遺構と考えられる。

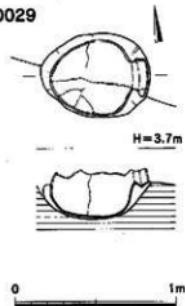
SX0023(第84図) D-7区で検出した。SX0018の北西側に近接し、SX0024とはほぼ並列する木棺墓で、SE0030を切る。墓壙の大半がSE0030の覆土中に掘り込まれることから、南側を除いて、平面プランを明確に把握できなかった。また、西接するSX0024との前後関係の有無についても不明瞭であった。なお、墓壙は長さ2m前後、幅1.1m前後と推定され、鉄釘の出土状況から木棺規模は長さ1.35m、幅0.6mに復元し得る。また、棺は底板上に側板を置き、小口板を挟み込む構造であったと考えられる。墓壙内に人骨が遺存していなかったことから頭位方向は不明であるが、白磁碗(630)の出土した北側を同方向と推定すると、その方位はN-12°-Eである。壙内出土の白磁碗(630)および土師器小皿(628)は出土状況から棺蓋上に供献された遺物で、蓋の崩壊に伴い、棺内に転落したものと考えられる。また、もう1点の土師器小皿(629)は小片であり、混入した遺物と推測される。

出土遺物(第84図) 628-629は土師器小皿である。628は回転糸切り底で、板状圧痕を有し、口径は8.6cmを測る。629は復元口径9.8cmを測り、外底部は板状圧痕のない回転ヘラ切りである。630は白磁碗V-b類で、口縁部には小さな輪花を有する。高台際まで淡灰オリーブ色の釉がかけられる。内面には片彫りによる草花文を施し、見込みには沈線が巡る。631~640は断面方形を呈する鉄釘で、頭部は短く折れる。以上の出土遺物から12世紀前半から中頃の遺構に位置付けられる。

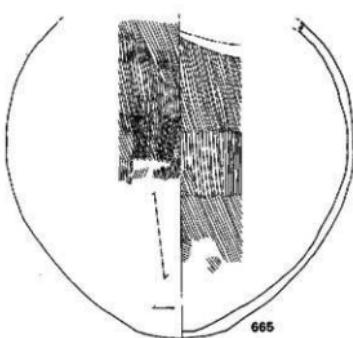
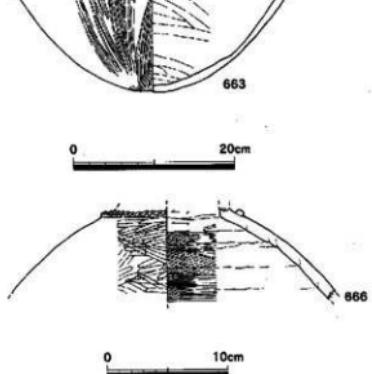
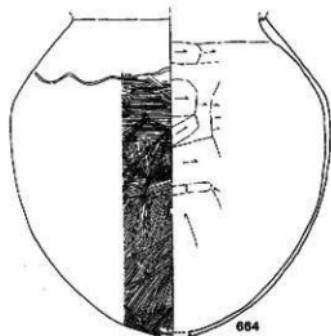
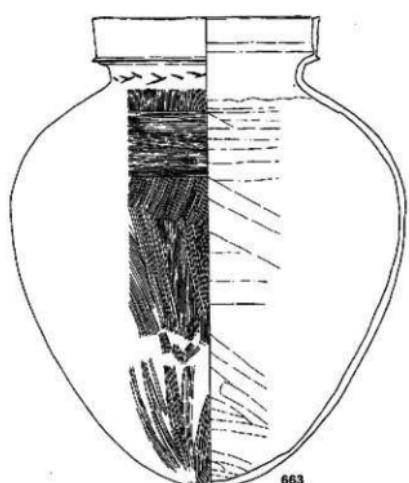
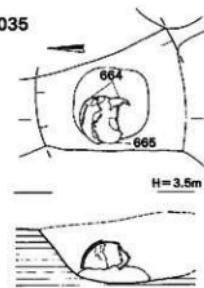
SX0024(第85図) SX0024にほぼ並列し、SE0030を切る木棺墓で、D-7区に位置する。墓壙の平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.4m以上、幅1.05m以上、深さ0.6mを測る。鉄釘の出土状況から長さ1.6m、幅0.5mの木棺規模が推定され、またその構造は底板上に小口板を置き、側板を挟むものであったと考えられる。出土人骨は少量であるが、南側に下肢骨が、北側に歯牙が確認できたことから、頭位は北側とみられ、その方位はN-7°-Eにとる。壙内北半上層で出土した土師器9点(641~649)は、棺蓋上の供献遺物と考えられる。なお、青白磁合子身(650)は細片であることから、混入した遺物とみられる。

出土遺物(第85図) 641~647は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。口径は9.0~9.7cmを測り、平均は9.3cmを測る。648~649は土師器杯で、外底部は板状圧痕のある回転糸切りである。口径は順に14.1、14.6cmを測る。650は青白磁の合子身で、体部外面には型押しによる施文を有する。受け部および外底部には施釉されない。651~662は鉄釘で、断面は方形である。頭部は「L」字状に短く折れる。これらの出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

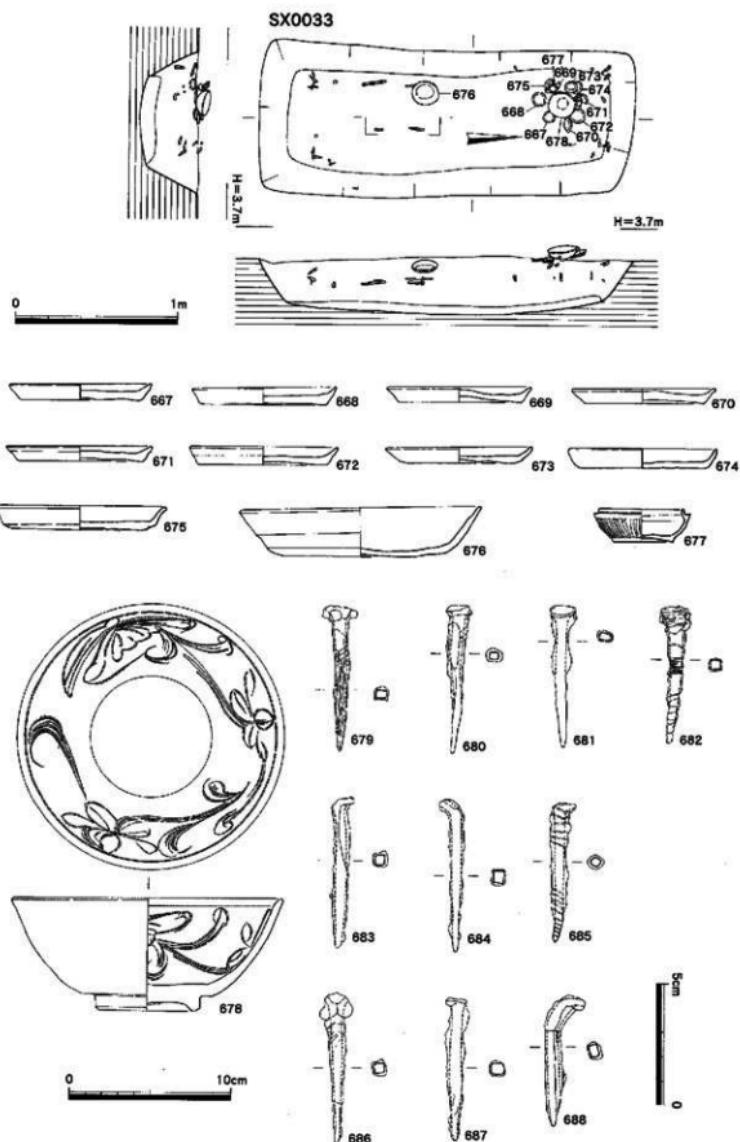
SX0029



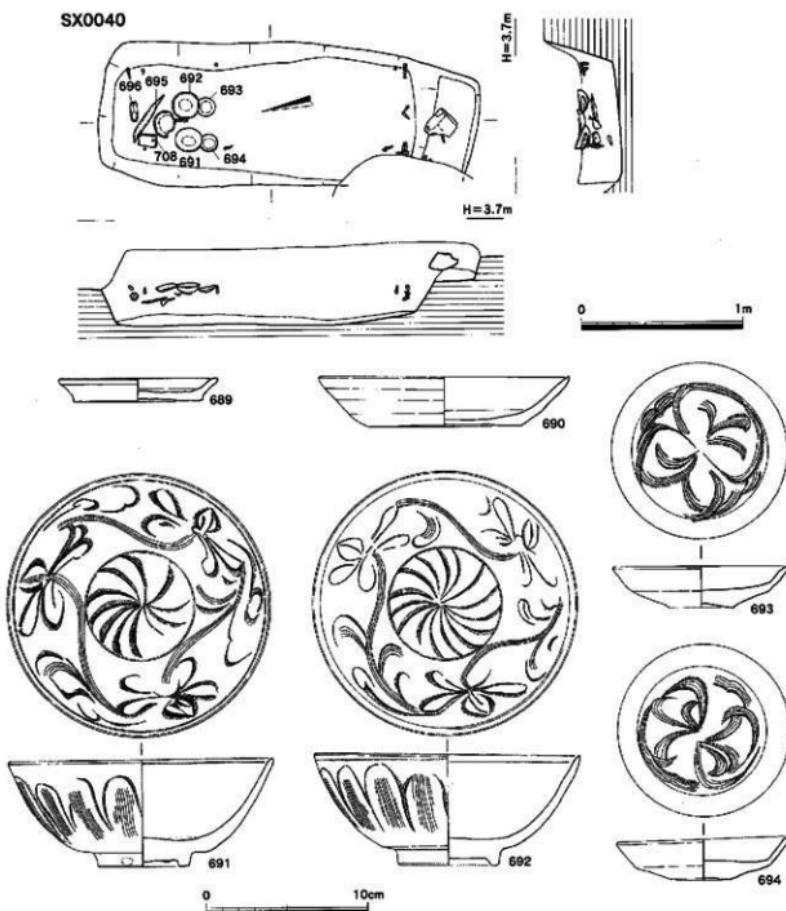
SX0035



第86図 SX0029・0035実測図（1/30）および出土遺物実測図（663は1/6、他は1/4）



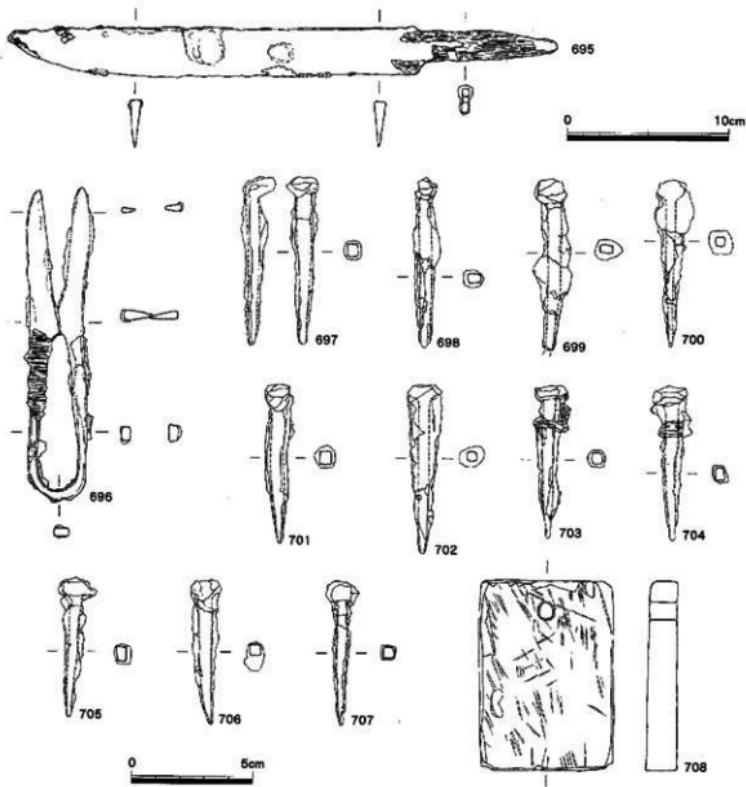
第87図 SX0033実測図（1/30）および出土遺物実測図（679～688は1/2、他は1/3）



第88図 SX0040実測図（1/30）および出土遺物実測図（1）（1/3）

SX0029(第86図) C-6区で確認した上器棺墓である。二重口縁壺を用いた単棺で、ほぼ水平に埋置されるが、上半部は削平を受けている。主軸方位はほぼ東西方向のE-4°-Sである。墓壙は現況で、棺より一回り大きい程度に掘られており、棺円形プランを呈する。

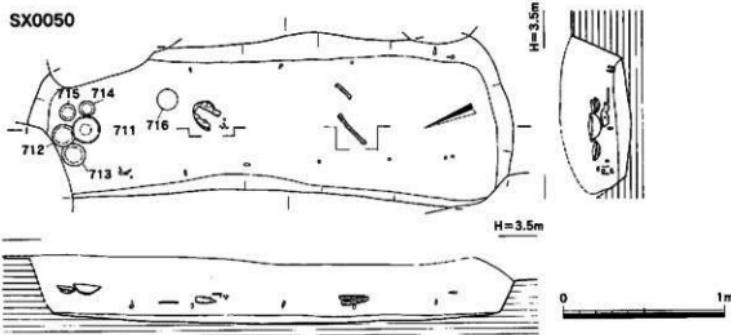
出土遺物(第86図663) 棺に用いられた山陰系土師器の二重口縁壺である。肩の張る体部を呈し、短い頸部に口縁部が付く。二重口縁の屈曲部はシャープな断面三角形状をなし、口縁部上面はヨコナデにより窪む。外底部は僅かに面を有する。体部外面は縱方向の刷毛目調整を行うが、頸部下には横



第89図 SX0040出土遺物実測図（2）（695・708は1/3、他は1/2）

方向の刷毛目を加える。頸部から口縁部の内外面はヨコナデを行い、頸部には刷毛目工具の押圧により羽状の文様を施している。体部内面はヘラ削り調整である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には金雲母、長石を含む。復元口径28.2cm、器高58.8cmを測る。古墳時代前期の所産である。

SX0033(第87図) C-5・6区に位置する木棺墓で、墓壇の平面プランは長方形を呈し、長さ2.3m、幅0.95mを測る。断面は逆台形を呈し、深さ0.3mが遺存する。鉄釘の出土状況から長さ1.8m、幅0.6mの木棺規模が推定され、その構造は底板上に側板を置き、小口板を挟むものであったと考えられる。川土人骨は少量であるものの、南側に下肢骨が、北側に歯牙が確認できたことから、頭位は北側とみられ、その方位はN-5°-Eにとる。頭位置の上位では土師器小皿9点(667~675)、青白磁合子身(677)、青磁碗(678)が一群で、また右大腿骨上では上師器坏(676)が出土した。これらは從来、棺蓋上の供獻遺物で、蓋の崩壊に伴い棺内に崩落したものと考えられる。



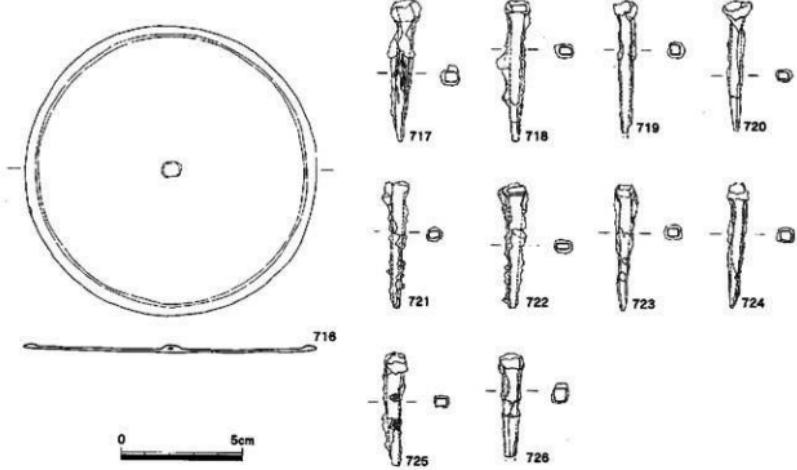
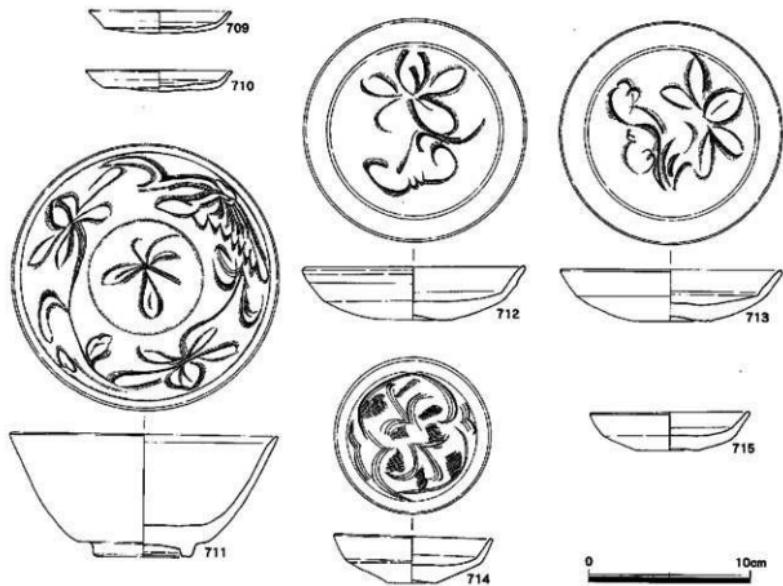
第90図 SX0050実測図（1/30）

出土遺物(第87図) 667～675は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.6～10.6cmを測り、平均は9.1cmである。669～672を除き、板状圧痕が認められる。676は口径14.8cmを測る土師器壺で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。677は青白磁の合子身で、体部外面には型押しにより文様を施す。受け部および外面の体部下端以下は磨胎である。678は龍京窯系青磁碗I-2 b類で、内面に片彫りによる蓮花文を配する。外底部には砂目が付着する。679～688は断面方形の鉄釘で、頸部を短く折り曲げる。以上の出土遺物から12世紀後半の木棺墓と考えられる。

SX0035(第86図) 遺物出土状況から土器棺墓と推定される遺構で、C-5・6区に位置する。東西両側を擾乱等に切られるため、掘り方の平面プランは不明であるが、壇内には土師器壺もしくは壺(665)の体部を半裁した個体の底部を北側に向け、伏せた状態で据え付け、その上に同様に体部を半裁した土師器壺(664)の底部を西側にし、覆っていた。なお、その破片の一部は南東側に崩落する。主軸方位はほぼ座標北である。

川土遺物(第86図664～666) 664は布留系土師器壺で、胴部外面は刷毛目調整を行う。肩部にはヘラ描きの波状文が施され、その直下には横方向の刷毛目がみられる。胴部内面のヘラ削りは上半部、横方向で、下半は縦方向に施される。器壁は薄く、器面は淡黄褐色を呈する。665は土師器の壺もしくは壺で、内外面の調整は刷毛目を主体とするが、胴部外面の下半には板状工具による粗いナデが認められる。666は墓壇内川土の土師器壺の肩部片で、頸部との境界には突帯を貼付し、刻目を施す。外面は叩きの後、ヘラ研磨を行う。内面には幅2cmの接合痕が顕著に認められ、刷毛目調整を行っている。以上から古墳時代前期の遺構に位置付けられる。

SX0040(第88図) E-2区で検出した木棺墓である。SK0718に切られる遺構として調査したが、出土遺物から前後関係を認めたものと考えられる。墓壇の平面プランは長方形で、長さ2.3m、幅0.85m、深さ0.45mを測る。南側壁面中位には幅0.2mのテラスを有し、角礫1個が確認できた。鉄釘の出土状況から長さ1.7m、幅0.55mの木棺規模が推定できる。北側で歯牙や頭骨片が確認できしたことから、頸位は北側とみられ、その方位はN-10°-Eである。頭位置では土師器壺(690)、青磁4点(691～694)、鉄製品2点(695・696)、滑石製品(708)が出土した。それらの出土状況から器類は棺蓋上の供獻遺物で、蓋の崩壊に伴い棺内に崩落したものと考えられ、他は棺内の頭部に置かれた副葬遺物と考えられる。なお、土師器小皿(689)は壇内南側覆土中から出土した小片である。



第91図 SX0050出土遺物実測図 (709~715は1/3. 他は1/2)

出土遺物(第88・89図) 689・690は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。689は小皿で、復元口径9.8cmを測り、690は口径15.3cmの壺である。691・692は龍泉窯系青磁碗I-6 a類である。外面に片彫りによる蓮弁文と櫛目を有し、内面には片彫りと櫛状工具による草花文を施す。釉調は691が暗緑色、692は黄緑色を呈し、共に貫入が多く認められる。693-694は龍泉窯系青磁碗I-2 b類で、見込みに櫛状工具による花文を有する。外底部は露胎である。共に淡緑色の釉が施される。695は鉄製の短刀である。柄木質が遺存し、茎には目釘穴が観察できる。全長33.7cm、刀身長25.0cm、身幅2.9cmを測る。696は鉄製の握り鉄で、鋒化するものの、握り部には横方向の木質が残る。全長12.8cm、刃部長6.0cmである。697-707は断面方形を呈する鉄釘で、鋒化が著しい。708は長さ11.6cm、幅8.2cm、厚さ1.8cmを測る滑石製品で、径約1cmの穿孔を有する。全面に煤が付着しており、温石と推測される。12世紀後半の遺構に位置付けられる。

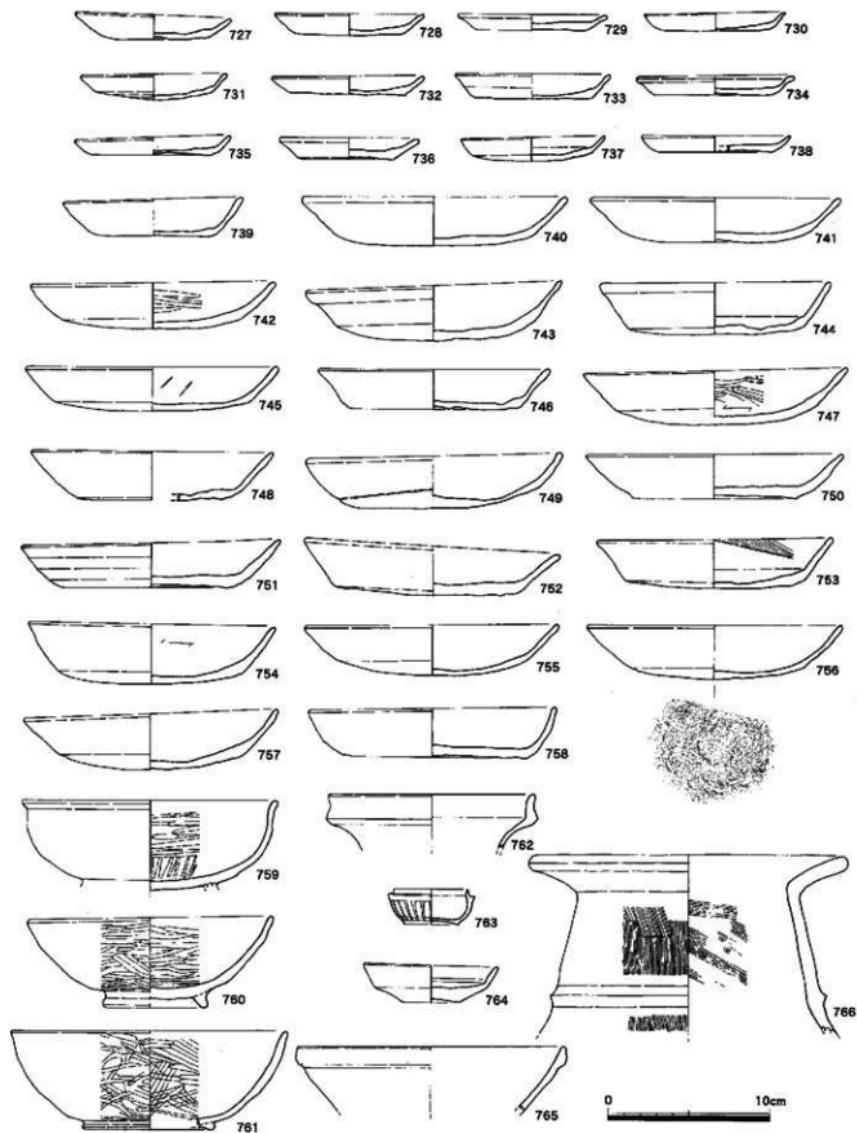
SX0050(第90図) E-2区で確認した木棺墓で、SE0047に西側壁面の上半部を切られる。墓塙はやや不整な隅丸長方形を呈し、長さ3.0m、幅1.0m、深さ0.40mを測る。鉄釘の出土状況から長さ2.0m、幅0.7mの木棺規模が推定できる。北側に頭骨や歯牙が、南側では下肢骨が出土していることから、頭位は北側で、その方位はN-22°-Eである。北端部の棺外では青磁5点(711-715)が、また棺内の頭骨北側では鏡面を上にした銅鏡(716)が出土した。この鏡は和紙にくるまれ、更に網織物に包まれた上で、木製箱に収められていた可能性が高い(付論2参照)。これらの出土状況から前者は墓塙内の棺外副葬、後者は棺内副葬遺物と考えられる。また、被葬者は熟年女性である(付論1参照)。なお、土師器小皿(709・710)は塙内覆土中から出土した破片資料である。

出土遺物(第91図) 709-710は板状圧痕をもつ回転ヘラ切り底の土師器小皿で、順に復元口径は8.8、9.0cmを測る。711-715は龍泉窯系青磁である。711は碗I-2 b類で、体部内面および見込みに片彫りによる草花文を施す。712-713は碗I-1 b類で、見込みに片彫り花文を有する。外底部は露胎で、赤色顔料の塗布が認められる。釉は青味を帯びる。714は皿I-2 c類である。見込みに片彫りおよび櫛目による花文を描き、外底部には前二者同様に赤色顔料を塗布する。715は見込みの釉調りが著しく、文様が不鮮明である。皿I-2類であろう。同様に露胎の外底部に赤色顔料が認められる。716は銅鏡で、先に述べた網織が背面に付着している。直径12.0cm、鏡胎の厚さは0.1cmと薄手のつくりである。鏡背面は素文で、中央に長さ0.8cm、幅0.6cm、高さ0.2cmの偏平な橋状の素鉢を有するが、鉢孔は不明瞭である。鏡縁の断面は低い薄鉢状を呈する。鏡面は凸面で、0.15cmの反りをもつ。717-726は鉄釘で、断面は方形を呈し、頭部を短く折り曲げる。以上の出土遺物から12世紀後半の木棺墓と考えられる。

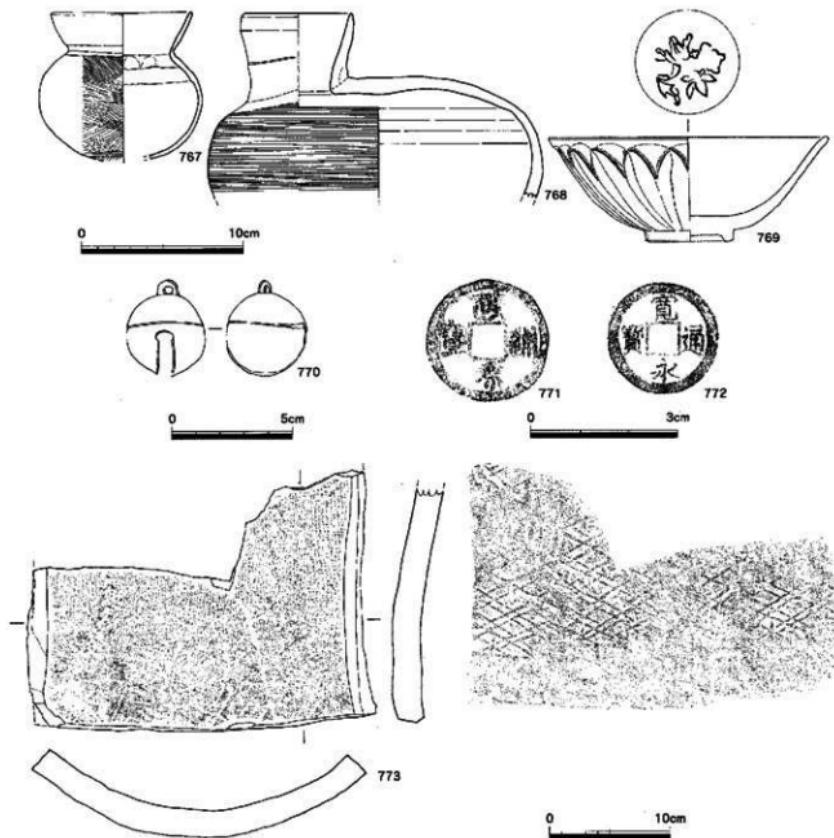
番号	出土遺物	グリッド	種類	番号	出土遺物	グリッド	種類	番号
227	SP0091	D-2	十角形小皿	690	青磁碗	C-3	上部飾物	701
728	SP00740	E-1-2	土師小皿	702	SP1185	T-3	上部飾物	702
729	SP00745	E-1-2	土師小皿	703	SP1225	T-3	土師小皿	703
730	SP00746	E-1-2	土師小皿	704	SP1226	T-3	土師小皿	704
731	SP00831	E-2	土師小皿	705	SP1295	D-4	土器	705
732	SP00831	E-2	土師小皿	706	SP1296	D-4	土器	706
733	SP00831	E-2	土師小皿	707	SP1297	D-4	土器	707
734	SP00831	E-2	土師小皿	708	SP1310	D-4	土器	708
735	SP00831	E-2	土師小皿	709	STW080	T-5	古代土器八脚瓶	709
736	SP00902	C-1	土師小皿	710	SP1000	E-2	土器	710
737	SP00902	C-1	土師小皿	711	SP00904	E-2	土器	711
738	SP1319	D-4	土器	712	SP00905	E-2	土器	712
739	SP0325	B-7	土器	713	SP00906	E-4	土器	713
740	SP0325	B-7	土器	714	SP1195	T-3	青磁碗	714
741	SP0740	E-1-2	土器	715	SP1220	D-4	青磁碗	715
742	SP0829	E-2	土器	716	SP1221	D-4	白釉碗	716
743	SP0829	E-2	土器	717	SP1222	D-4	白釉碗	717
744	SP0829	E-2	土器	718	SP1223	D-4	白釉碗	718
745	SP0831	E-2	土器	719	SP1224	D-4	白釉碗	719
746	SP0831	E-2	土器	720	SP1225	D-4	白釉碗	720
747	SP0835	E-2	土器	721	SP1226	D-4	白釉碗	721
748	SP0835	E-2	土器	722	SP1227	D-4	白釉碗	722
749	SP0860	E-2	土器	723	SP1228	D-4	白釉碗	723
750	SP1051	C-2	土器					

* 番号：斜線は口径で直径を示す。斜線は回転ヘラ切り底。平行線は回転ヘラ切り底。斜線と平行線の組合せ

第3表 ピットおよび構造検出時出土遺物一覧表



第92図 ピット出土遺物実測図 (1 / 3)



第93図 遺構検出時出土遺物実測図（771-772は1/1、770は1/2、773は1/4、他は1/3）

（7） その他の遺物（第92・93図、第3表）

ここでは4区で検出したピットおよび遺構検出時出土遺物の一部をとりまとめている。概要は第3表のとおりであるが、同一遺構出土は728・741がSP0740、742・743がSP0829、731～735および744～746がSP0831、733・749・761がSP0980、754～756および765がSP1260、738および757・758がSP1310である。

756は外底部に爪状の刺突を円形に施している。762の胎土は赤褐色を呈し、器面はヨコナデ調整を施す。770は体部中央にひび割れにより、鳴きを欠損している。

IV. 結語

今回報告した第22次調査4区で確認した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期および古代末から中世の2時期に大別することができる。ここでは各時代別に主要遺構の時期的変遷や本遺跡内での関連性についてまとめを行ないたい。

＜弥生時代後期～古墳時代前期＞

SK0021は現在のところ、本遺跡内で最も遅い時期の遺構で、弥生時代後期中頃に比定される。また最近、砂丘東側斜面において調査事例が増加しつつある古墳時代の遺構についても、堅穴住居と考えられるSC0041やSK0025の土坑、溝状遺構としたSD0028・0069、また埋葬関連の遺構であるSX0029・0035を確認することができた。いずれも布留式併行期である。この中でもSD0028・0029は外来系の精製器種が含まれ、隣接する第26次・40次調査での事例から方形周溝墓の溝の一部である可能性を有する。これらから当該地には比較的まとまった集落が展開していたことが推測される。

なお、SX0029は山陰系土器を核として用いているが、本遺跡と立地を同じくする博多湾岸の砂丘上の遺跡である博多遺跡や西新町遺跡、姪浜遺跡等でも同様の調査例が報告されている。

＜古代末～中世＞

本文中に記述した当該期の個別の遺構時期および以下で用いる時期区分は例言に記した参考文献の他、山本信太氏の土師器および輸入磁器の編年観を参照した。今回の検出遺構は10世紀後半から14世紀前半頃におよび、土師器法量や標準磁器等から以下の5期に区分し得る。まず、黒色上器や越州窯系青磁に代表される10世紀後半から11世紀中頃(Ⅰ期)、回転ヘラ切り底の土師器や白磁碗IV・V類等の出土頻度の高い11世紀後半から12世紀前半(Ⅱ期)、土師器の外底部の切り離しに糸切りが主体を占め始め、龍泉窯系青磁I類や同安窯系青磁、白磁碗Ⅵ類等が磁器の主体となる12世紀中頃から後半(Ⅲ期)、土師器の小形化の傾向を示しながら、磁器では龍泉窯系青磁碗II類が出現する13世紀前半(Ⅳ期)、土師器の小形化が顕著で、龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁IX類が磁器の主体となる13世紀中頃から14世紀初頃(Ⅴ期)で、そのピークはⅣ期にある。

I期は磐崎宮の創建年代に近く、注目される時期で、本調査区を含む遺跡南東部で調査事例が増加している。今回も井戸に丸太割り抜き材を用いたSE0026・0031等の井戸や方形堅穴状の土坑であるSK0053・0054・0055等が確認できた。土坑中からは格子目叩きを主体とする瓦が出土しており、具体性には乏しいが、瓦葺きの建物の存在が伺える。II期前半では少數であるが、該期に帰属すると考えられるSE0067では板材を用いた方形井戸の井戸が検出されており、同タイプの出現時期が推測し得る。II期後半からIII期には遺構の著しい増加が認められる。特に木桶を井戸に用いる井戸、掘立柱建物や土坑、埋葬遺構の大半は該期に帰属し、『宮守縁事抄』の記事にみられるように都市化が進行していたものと考えらえる。中世墓は頭位方向に統一性があるが、本遺跡第21次調査における同時期の類似した埋葬遺構事例ではその方位の規則性が殆ど認められず、その差異が起因するものについては今後の課題である。また、銅鏡を副葬遺物にもつSX0050の被葬者が熟年女性であることや、当時貴重であった絹織物が鏡の包み材として使用されていたことは、極めて興味深い。続くIV期では、SE0042・0058やSK0053・0818、SX0018等、またV期ではSE0047、SK0052、SD0036等が検出されたが、前代に比して遺構量が激減している。現在のところ、同時期では第1次・5次・11次・24次・42次調査例が示す様に砂丘西側緩斜面上を主として都市化の傾向が認められ、本調査区で遺構群の消長と符合するが、その詳細な様相については今後の検討課題であろう。

＜参考文献＞

- 山本信太「大宰府における古代末から中世の土器・陶器類」『中近世土壤の基礎研究 IV』1988年
山本信太『坂口・坂井・坂治時代土器新器の編年研究』にて、「乙巳重慶先生古稀記念 九州上文化論集」1990年
山本信太「中世初期の貿易海賊船」『新説 中世の土器・陶器』、青柳社 1995年

<付論1>

福岡市箱崎遺跡第22次調査出土の中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院

中橋 孝博

はじめに

古い歴史を持つ商都、博多とその周辺部は、弥生以降の各時代の人骨が出土する、全国的にも稀な地域の一つである。生活環境と骨格形質の関係や地城性、時代性とその要因を探ることは人類学上の重要課題であるが、当地はその人骨資料や歴史的、考古学的情報の豊富さによって、そうした問題を考察する上で特に興味深い地域の一つと言えよう。

2000年から2001年にかけて、旧博多街区の東隣、福岡市東区箱崎地区で、上地区画整理事業に伴う発掘調査が福岡市教育委員会の手によって実施された。この箱崎遺跡では、過去にも1997年度の第7次調査で12世紀前半～13世紀初めの男性頭蓋が出土し（中橋、1993）、1999年度の20次、21次調査でも、保存不良ながら計5体の同時期の人骨が出土している（中橋、2002）。今回、やはり12～13世紀の人骨5体がまた新たに出土した。残念ながら保存状態が悪く、形態的な特徴について計測値に基づく詳しい分析は実施できなかったが、全国的に稀な時代の貴重な追加資料となるものであり、以下に得られた知見について報告しておく。

遺跡・資料・方法

箱崎遺跡は、かつて博多湾岸に形成された古砂丘上にあり、西側は博多湾に、東側は宇美川（多々良川の支流）に区切られた一画に位置する。それは現在の箱崎宮の北側に隣接した地区にあたるが、今回は從来の21次までの調査に継続して、その隣接区域が調査対象とされた。遺構面はいずれも3メートル前後の標高にあり、主に古墳時代から中世にいたる時代の遺物・遺構が検出されたが、特に4区と呼称される区画から6基の理葬遺構（土壙墓1基、木棺墓5基）が検出された。この内、5基からは人骨も出土した（表1）。別項に詳しく述べられているようにかなり豊富な副葬品を持っており、その種類も土師器皿や杯、短刀、和鉄、和鏡など多岐にわたる。

所属時代はこれら副葬品や層序に関する考古学的な検討から、ほぼ12～13世紀のものと考えられている。

表1. 箱崎遺跡第22次調査出土人骨

番号	性	年齢	時代	埋葬施設	埋葬方位・姿勢
SX0018	?	(成人)	13C前半	土壙	北向き・右側臥屈肢？
SX0024	?	(熟年)	12C後半	木棺	北向き・右側臥屈肢？
SX0033	男?	熟年	12C後半	木棺	北向き・仰臥？
SX0040	?	熟年～	12C後半	木棺	北向き・？
SX0050	女	熟年	12C後半	木棺	北東向き・右側臥屈肢

所見

SX0018

土墳墓から、わずかに左右の大腿骨、脛骨と思われる骨片が検出された。その位置関係からみて、一応、頭位をほぼ北にとり、身体の右側を下にした側臥屈肢の埋葬姿勢が想定される。保存が悪く性、年齢は不明だが、骨の厚さから成人であった可能性が高い。

SX0024

右大腿骨片の他、部位不明の四肢骨片、及び右上顎第一大臼歯、左下顎第一大臼歯が回収された。咬耗の程度から熟年以上に達した個体と見なされるが性は不明である。埋葬頭位、姿勢はSX0018とほぼ同じだが、釘の存在から木棺墓と見なされている。

SX0033

左右の大腿骨、脛骨の一部、及び右上顎第一大臼歯、右下顎第一大臼歯、第二小臼歯が回収された。咬耗の程度からやはり熟年以上に達した個体と考えられ、歯のサイズから一応男性の可能性を考えられる。下肢骨の位置関係から、頭位をほぼ北で、一応、仰臥でゆるく膝を曲げた姿勢が想定される。

SX0040

頭片と歯（左の上・下顎歯が主で計16本）のみで、性は不明だが、歯の咬耗がかなり進行していることから熟年以上に達した個体と見なされる。頭位は他と同じだが、埋葬姿勢についてそれ以上の復元は困難である。

SX0050

右側頭骨、前頸骨など頭蓋各部の破片と歯（右の上顎歯、左の下顎歯が主で、計9本）、それに左右の大腿骨片が回収された。大腿骨などの骨体がかなり細く、女性の可能性が高い。また、歯の咬耗の程度から熟年女性と考えられる。頭位を北東にとり、顔面をほぼ西に向かた右側臥での埋葬と推測される。

以上、今回の出土例は保存状態が悪く、残念ながらその詳しい形態的特徴は不明であったが、埋葬姿勢において、頭位をほぼ北、ないし北東にとった右側臥屈肢の多い傾向が見られた。この姿勢はその後、中、近世の各地で類例が確認されている。旧博多街区ではしかし必ずしもこうした姿勢に統一されていない状況も見られ、その違いが何に由来するのか、おそらく社会階層や宗教的な背景との関連が予想されるが、今後さらに事例を増やして検討を続ける必要があろう。

謝辞

当人骨を分析するにあたり、色々とご教示いただいた福岡市教育委員会の関係各位に深謝します。

文 献

- 中橋孝博（1993）：「箱崎遺跡群第7次調査出土の中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集。
中橋孝博（2002）：「福岡市箱崎遺跡群第20次・21次調査出七人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集。

<付論2>

箱崎遺跡第22次調査出土青銅鏡付着繊維の調査について

福岡市埋蔵文化財センター

片多雅樹・比佐陽一郎

1.はじめに

箱崎遺跡第22次調査では、6基の中世墓が検出され、うち12C後半の【SX0050】からは青銅鏡が1枚出土した。この鏡は鏡面を上にした状態で出土し、表面には織物の付着がみられ、鏡背面側には、鏡面積とほぼ同じ寸法の木質(写真1)が残存していた。鏡本体に関する詳細は本文に譲るとして、ここでは鏡に付着、残存していた有機質について調査した結果を述べる。

2. 実体顕微鏡による観察

鏡と残存木質に関して、実体顕微鏡を用い6~40倍で観察した。まず鏡を観察したところ、鏡面鏡背面共に織物と織り目のない繊維質(不織布)の付着がみられた。織物(写真5)は織り密度、約経60×縦50 [本/cm] (1mm2からの復元)で、ほとんど撚りのない糸で織られている。一見平織りに見えるが、絹糸の一部が三つ編み状になっており、しかも、単に絹糸として織られているのではなく、織糸が三つ編みの中に組み込まれる形で織物を形成している(写真6)。不織布(写真4)は和紙と思われ、鏡と併に挟まれた状態に位置している(写真3)。次に、鏡背面側に残存していた木質は少なくとも2層になっており、それぞれ木目が直行しているため、現代の合板のような様相を呈している。鏡背面に接していた木質層は繊維方向に細かく分裂しており、織り目がないカゴ網工のようにも見える。また、鏡本体に付着していたものと同じ様相を呈する織物の付着が見られる(写真2)。それに対し反対面の木質層は木目の通った薄い板材であり、鏡箱の残片の可能性が考えられる。

3. 走査型電子顕微鏡による観察

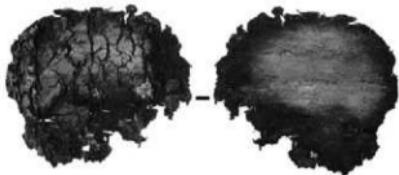
出土繊維製品の多くがそうであるように、付着織物の繊維成分は完全に消滅し、鏡から折出した紺が辛うじて織物の痕跡を形成していると考えられる。そこで、繊維の断面形状を電子顕微鏡[PHILLIPS社製 XL30]を用いて観察することにより、繊維の同定を試みた。繊維断面調査には、保存処理(鏡と木質の分離、鏡の錆取り、アクリル樹脂の塗布)の際、剥落した織物片数片をアクリル樹脂にて包埋後、繊維断面が出来るように切断し、表面を鏡面研磨したものを試料に供した。観察の結果、織物の単織維断面は紺特有の不等辺三角形をしていることが分かった(写真8)。また、対をなしていないことから精練された紺(練紺)と考えられる。和紙の断面も観察されたが、単織維の断面形状は確認できず、厚さ50μm程の繊維密度の濃い層が、2~3層重なっているのが観察された(写真7)。

4.まとめ

調査の結果、この鏡は和紙で包まれた後、織物で再度包み、鏡箱に納められた状態で副葬されたと考えられる。ここで特筆すべきは、この紺織物の織り組織である。調査地点は違うが、本遺跡より600m程北に位置する箱崎遺跡第21次調査でも、12C中頃の木棺墓【SX-153】から銅鏡が出土しているが、付着していたのは平組織の麻織物であった。それに対しこの鏡に付着していたのは、絹糸が三つ編み状を呈していることから、隣り合う絹糸を絡ませながら織る振り織り組織と考えられる。そのなかでも3本の絹糸を絡ませて織る『鸞文紺』という、平安~鎌倉時代にかけて夏の公家装束などに用いられていた織物である可能性があり、また練紺を用いていることから、当初は鮮やかに染色されていたと推測される。紺と麻とはその価値の差は歴然であり、更にこの様な複雑な織り組織を有することから、被葬者の身分や当時の染織技術を知る上でも、貴重な資料といえる。

(参考文献) 連藤清祐1980「紀と妙 漢き説う青銅鏡 日本の古鏡」赤水社

比佐陽一郎・片多雅樹2002「箱崎遺跡第21次調査出土青銅鏡の保存科学的調査について」『箱崎13 箱崎遺跡第21次調査報告書 - 福岡市埋蔵文化財センター第705号』福岡市教育委員会



表・鏡背面付着物



写真1 鏡背面側に残存していた木質

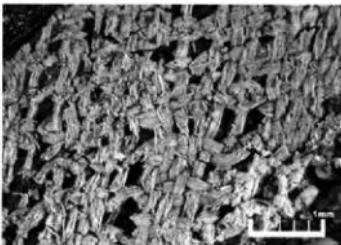


写真5 付着織物

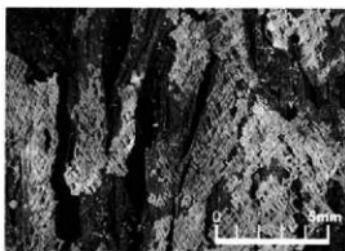


写真2 木質に付着している織物

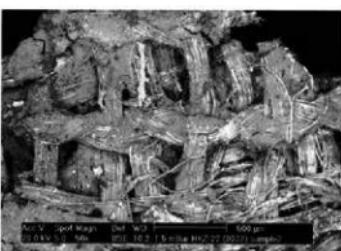


写真6 三つ編み状の経糸(電子顕微鏡写真)

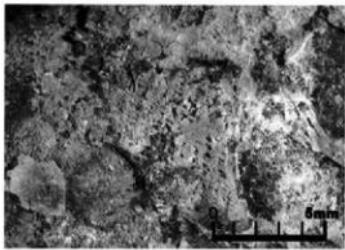


写真3 鏡-和紙(不織布)-織物の順に付着

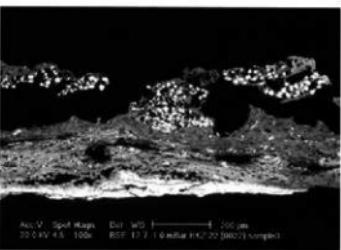


写真7 織物と和紙の断面(同上)

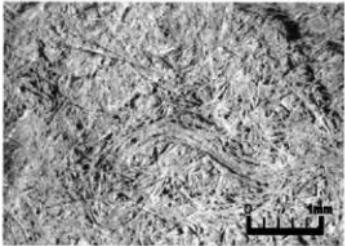


写真4 付着和紙

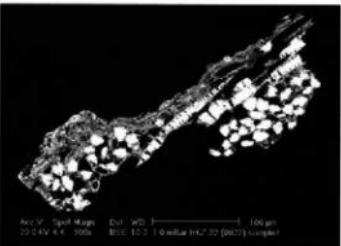


写真8 織物の繊維断面(同上)

図 版



調査作業風景



(1) 4区南側全景(上空から)

※右が北



(2) 4区北側全景(上空から)

※下が北

図版2



(1)SC0041(南から)



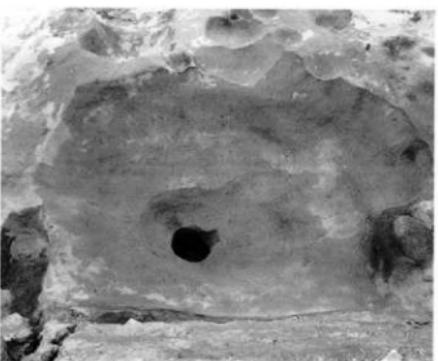
(2)SC0041(南西から)



(3)SE0006(北から)



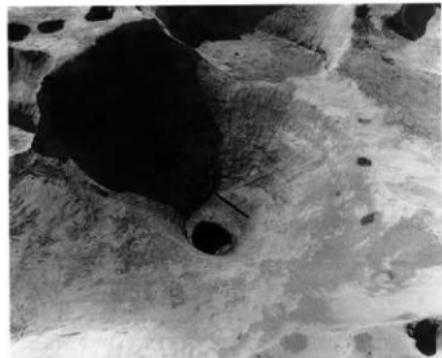
(4)SE0008(西から)



(5)SE0011(東から)



(6)SE0011井筒(北から)



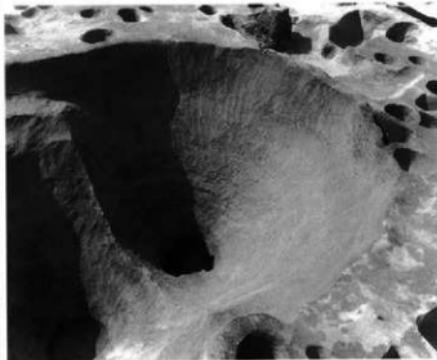
(1) SE0012(北東から)



(2) SE0014(北東から)



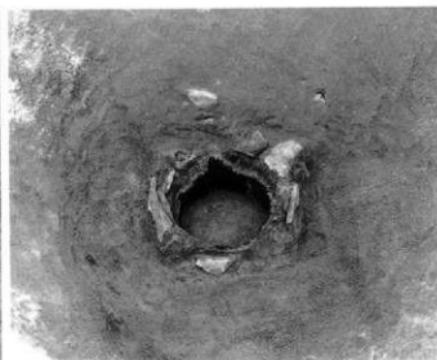
(3) SE0015(北東から)



(4) SE0022(北東から)



(5) SE0026(北東から)



(6) SE0026井筒(東から)

図版4



(1)SE0030(北西から)



(2)SE0031(西から)



(3)SE0038(北から)



(4)SE0039(東から)



(5)SE0039井筒(南から)



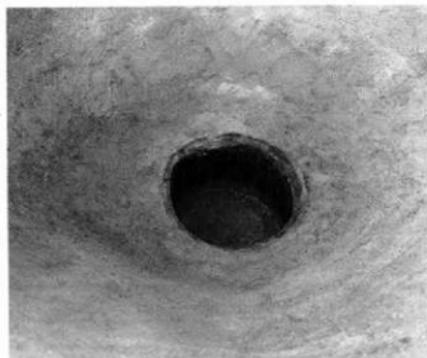
(6)SE0042(西から)



(1)SE0046(北東から)



(2)SE0047(南東から)



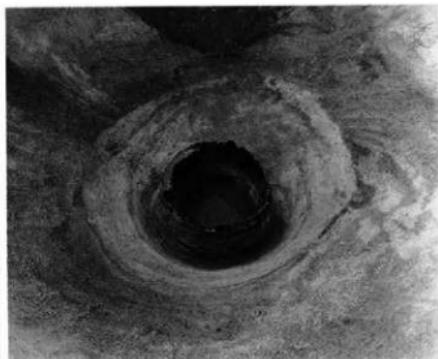
(3)SE0047井筒(南東から)



(4)SE0057(西から)



(5)SE0058(南東から)



(6)SE0058井筒(東から)

図版6



(1) SE0060-0063(南から)



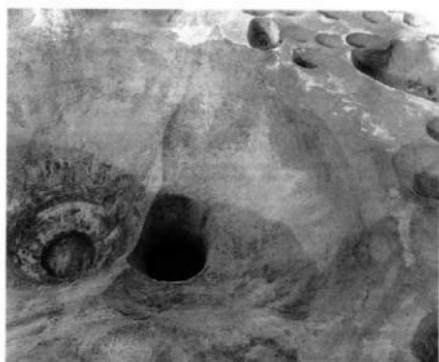
(2) SE0062(南から)



(3) SE0062井筒(南から)



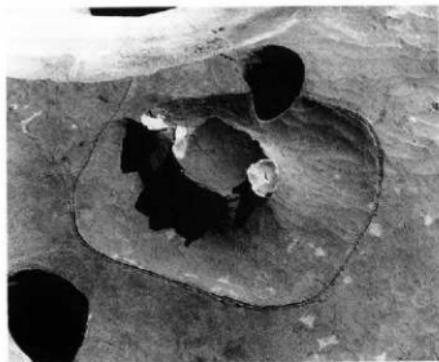
(4) SE0065-0066-0067(北から)



(5) SE0068(南から)



(6) SK0017(北から)



(1) SK0021(北から)



(2) SK0025(北東から)



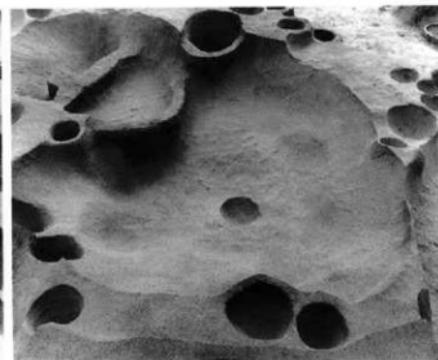
(3) SK0037(北から)



(4) SK0048(北東から)



(5) SK0053(西から)



(6) SK0054(北から)

図版8



(1) SK0055(東から)



(2) SD0020土層(西から)



(3) SD0028(北から)



(4) SD0036土層(南から)



(5) SD0069(東から)



(6) SX0018(西から)



(1) SX0018人骨出土状況(西から)



(2) SX0023・0024(西から)



(3) SX0029(北から)



(4) SX0029(北から)



(5) SX0033(西から)



(6) SX0033遺物出土状況(西から)

図版10



(1) SX0035(西から)



(2) SX0040(西から)



(3) SX0040遺物出土状況(西から)



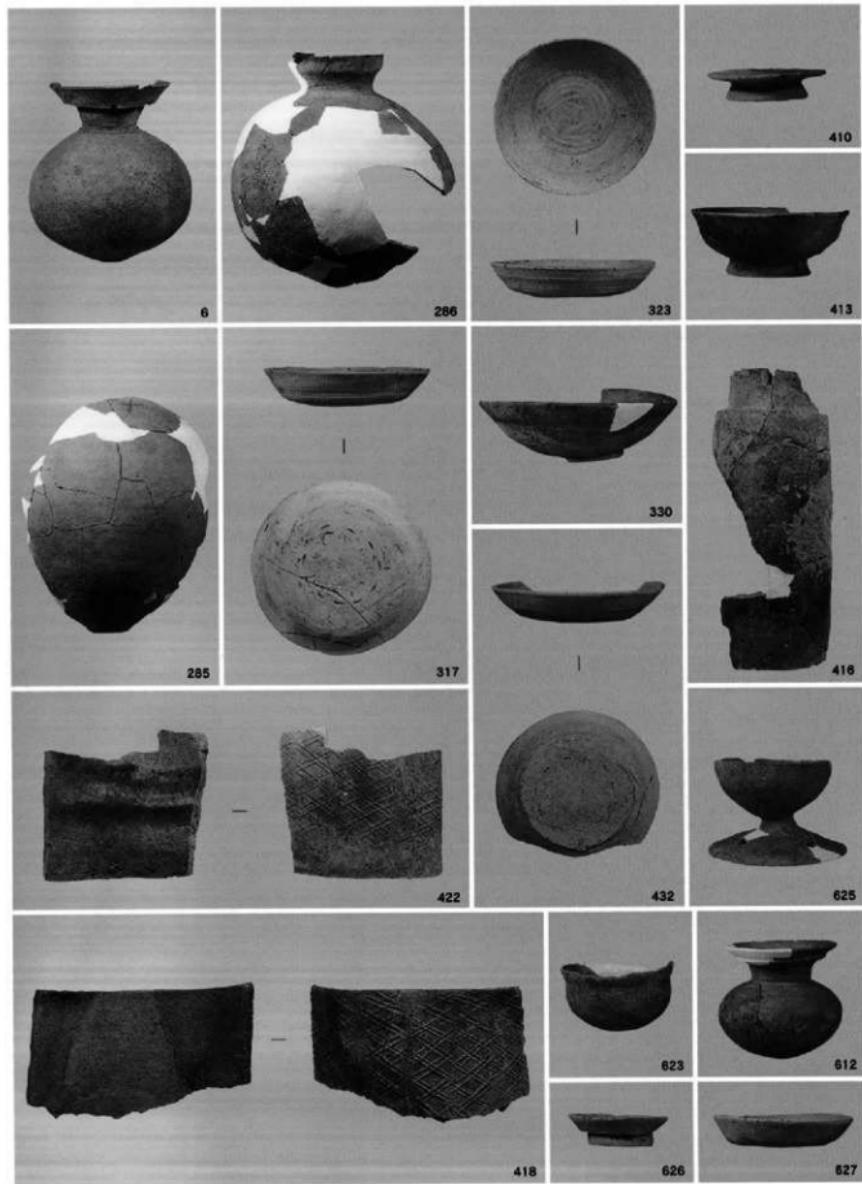
(4) SX0050(東から)



(5) SX0050遺物出土状況(南から)

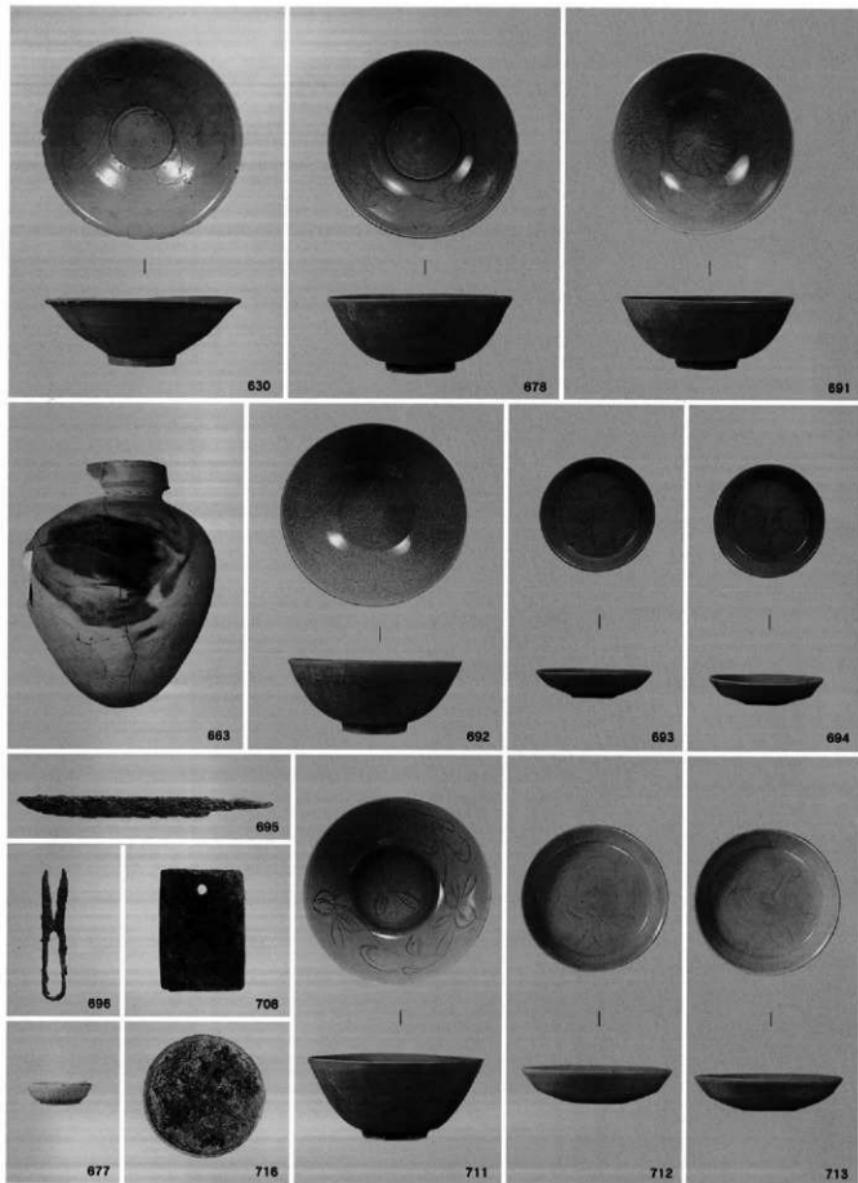


(6) SX0050遺物出土状況(南から)



出土遺物(1)

图版12



出土遗物(2)

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 発行機関 発行年月日 作成機関ID 郵便番号 住所	はこざき じゅうなな 箱崎 17 箱崎遺跡第22次調査報告（1） 福岡市埋蔵文化財調査報告書 811 榎本義嗣 福岡市教育委員会 福岡市教育委員会 20040331 810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 （日本測地系）	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
はこざきいせき 箱崎遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ひびしくいだしまの1 東区馬出5-1	40131	33° 2639	130° 36' 25' 30" 36"	20000724 ~ 20010131	2,473	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
箱崎遺跡	集合 (都市)	弥生	土坑	1	弥生土器	山陰系土器館 中世墓	
		古墳	竪穴住居	1	古武士師器		
			溝	2			
			埋葬遺構	2			
	古代/中世	掘立柱建物	2	土師器・黒色土器・瓦器・須恵器土器			
		井戸	29	高麗陶器・中国陶器			
		埋葬遺構	6	白磁・越州窯系青磁・龍泉窯系青磁			
		上坑	多数	同安窯系青磁・青白磁			
	溝	多数	瓦・土製品・石製品・金属製品				
	ピット	多数					

若崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ

はこ 箱 崎 17

—箱崎遺跡第22次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集

2004(平成16)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 (株)玉川印刷

福岡市中央区清川3丁目18番11号

